



魔装少女は 屈しない

小説
懺悔
挿絵
樺糖練乳

二次元
ドリーム
パルス
18
未 満

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

※本作品は電子書籍配信用に再編集しております。



あけのさか
紅ノ坂リリカ
魔装少女に変身して妖魔と
戦う女子校生。

やぎら
柳楽ジン
親友のシュウジを救うため、
魔装少女のサポートをする
少年。

はせ
長谷シュウジ
リリカとジンの
親友。

CHARACTER

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.
Illustration by KatouRennyu
Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.

Illustration by KatouRennyu
Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.
Presented by ZANGE
Magic Armed Lyrical will not yield.
Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.

CONTENTS

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.

Illustration by KatouRennyu

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.

Presented by ZANGE

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.

Victory and loss.Happiness and shame spaced by a piece
of glass.The first date is after the first agreement etc.I
will also watch the first kiss.Relationship between
demonic girl and demonic devil.
Presented by

004 一話 勝利と喪失

079 二話 ガラス一枚が隔てる幸福と恥辱

123 三話 初デートは初めての合意エッチの後で

163 四話 ファーストキスも見守ってやる

230 五話 魔装少女と魔装悪鬼の関係

259 おまけ

目次

一話	勝利と喪失
二話	ガラス一枚が隔てる幸福と恥辱
三話	初デートは初めての合意エッチの後で
四話	ファーストキスも見守ってやる
五話	魔装少女と魔装悪鬼の関係
おまけ	

一話 勝利と喪失

耳にしたこともないような鳥の鳴き声が聞こえると少年達は怯えた声を上げて身を竦めた。見上げようにも森の木々は空から隔絶するように頭上を覆っている。今は昼間なのか、陽が暮れ始めているのかすらわからない。

「……なあ、もういいだろ？ そろそろ帰ろうぜ」

小学校の教室では一、二を争う腕白な少年が身を縮こませて声を震わせる。

しかし先頭を歩く少年は意気揚々と獣道とも言えない山道を駆けあがって行った。

「ビビったんなら帰っていいぜ？」

教室内の格を決める威信を懸けた肝試し。大人達には絶対に足を踏み入れるなと口酸っぱく注意されている丘の中は、少年達が思うよりも空気が湿っぽく、そして薄暗かった。

進めば進むほどに寒気が覆い、獣の死骸と腐った果実が混ざったような匂いが濃くなっている。

それに加え数分歩く毎に目につく、「進入禁止」と書かれた立て札やテープで同級生は次々とリタイアしていった。

最深部に到着すると、残ったのは二人だけだった。目印の祠の前で少年が少女に振り返ると得意気に笑顔を浮かべた。

「どうよ？ オレ、一回もビビんなかったぜ？」

「はいはい。すごいすごい」

少女はぞんざいに褒めたたえたと、「それじゃさっさと証明のバッジ置いてきたら？」と肩を竦めた。

肝試しを完遂した者は証拠として名札を最深部の祠に置いてくるというルールだった。少女は興味がなかったので少年だけに促す。

「わかってるよ。つかこの祠、蔓だらけでどこがどうなってるのかわかんねーな」

祠は後から成長したであろう大木に吞み込まれるように存在しており、子供の体格では近づくことが困難だった。

「もういいや。えいっ！」

少年は面倒臭くなったのか、手近にあった石を名札で包んで投げつけた。するとバキン、と碎けた音がした。おそらく腐りかけていた祠の木が破損したのだろう。

少女は少年の頭を拳骨で殴りつけた。

「なにやってんのあんたは！」

「いてえっ！」

「ほら、ちゃんと謝つときなさいよ。呪われても知らないよ？」

「へーん。オレそんなの怖くないもんねー」

少年は少女に舌を出すと、その場を去ろうとした。少女はやれやれと頭を振ると、祠を振り

返って「ごめんなさい」と謝り、少年の背中を追うのであった。

放課を知らずチャイムが鳴ると運動場は部活に動しむ下級生でごった返した。その間を縫って俺達三人は帰路につく。

夏の大きな大会を前に、練習に励む下級生達の顔は険しい。そんな彼らを羨ましそうに眺める長谷シュウジは、ただでさえ上背のある体躯を背伸びさせながら悔しそうに言う。

「くっそ。オレもこいつらに交じりてえぜえっ！」

一々無駄に声が大きい。ガサツなのは初めて出会った頃から変わらない。当時は無神経な奴だと、どちらかといえば苦手な部類に入っていた。

「シュウジ。声デカイ」

「長谷君。声大きいから」

俺達二人から同様のツッコミを受けても、意に介した様子もなく両拳を握ってわなわなと震えている。

シュウジはバスケット部のエースでキャプテンだったが、我が校は一応進学校なので部活の引退は早く、夏前には大抵の部活はバトンタッチを済ませていた。

「オレの熱い血潮はまだコートに置いてきちまったままなんだよおっ！」

運動場の中央でそうわめく彼の後頭部を、我らが三人組の紅一点、紅ノ坂^{あけのさか}リリカの手が勢い良く叩く。小気味の良い音が運動場に響き渡った。

そのまま彼女がシュウジの耳を引っ張って歩きます。

「はいはい。長谷君？ 練習に集中してる後輩に迷惑掛けちゃダメでしょ？」

澄ました顔のまま、手馴れた様子でシュウジを引っ張って行く。

「イデ、イデデデッ！ リリカ、わかった、わかったからっ！」

リリカはどちらかといえば背が高い方とはいえ、一見してすらりとしたスレンダーな体型をしている。到底ガタイが良いとは言えない。そんな彼女に大の男がよいように制御されている。

しかしそんな光景もこの学校では珍しくもなく、周囲の人間は俺も含めて気に留める様子もない。

「校内では随一の身体能力を有するシュウジでも、リリカの手に掛ければリードに繋がれた大型犬とさほど変わらないな」

そんな二人の背中を眺めながら俺が鼻で笑うと、シュウジは耳を引っ張られながら俺を振り向く。

「馬鹿野郎！ ジン！ オレはな！ いつだって鎖から解き放たれた狼……痛い痛い！」

「長谷君。本当うるさいから。ジンの言う通りリード着けるよ」

リリカのその口振りは、手の焼ける弟を相手にする姉そのものである。

実際リリカとシュウジは幼少の頃からの付き合いで、同じ年ではあるものの、リリカの方が姉

貴分な子供時代を送っていたらしい。

いつかシュウジが言っていた。いつも通り屋上で三人で昼食を摂っていた時だろうか。

「子供の頃の記憶を紐解くと、大体オレが悪戯をしてリリカにど突かれてる思い出しかない」

リリカがうんざりするように俺に対して肩を竦めると、シュウジが言葉を続ける。

「でもそんなオレの尻拭いをいつもしていたのもリリカだからな。だから未だに頭が上がりないんだ。あつはつは」

「何回あたしが長谷君の代わりに頭を下げたか」

恨みがましく、しかしどこか楽しそうにリリカは思い出に浸っていた。

凛々しさを伴った可憐な目鼻立ちのリリカは、その情深く世話焼きな性格に加えて、落ち着いた物腰で実際姉御肌として色んな人間から頼られる。

それでもやはりシュウジとの関係は幼馴染ということもあって特別だろう。

そんな二人に俺が割り込んだのは中一の時だった。とある事情も加味して俺達はあつという間に三人で居るのが当たり前の親友になっていた。

最初はその『とある事情』による上辺だけの付き合いだったかもしれない。

確かにシュウジはガサツで無神経だったが、誰よりも真つすぐで、裏表のない性格は沢山の人間に好かれ、俺もその例に漏れなかった。

どこか捻くれた日陰者の俺は、太陽のような彼を少し眩く思いながらも惹かれていった。

そしてリリカについては言うまでもない。

一目惚れだった。

ぱっちりとした二重瞼の瞳はただ美しいだけでなく、未来を真つすぐ見据える自信と力強さに溢れていた。

平均よりはやや高い身長に、すらりと伸びた四肢は、同性からも憧れの目で見られている。

ただ均整が取れた体型というだけではない。その華奢きしゃにも見える体躯に、女性らしい起伏が隠されていることを俺は知っている。

少し赤みがかった長い髪は、風に揺れる度に甘くも清涼な果実の芳香をまき散らす。

そんなリリカ本人は飾り気の薄い、常に自然体な振る舞いをするものだから、余計に男を引き寄せた。

しかし彼女は恋人を作ったことはない。そんな暇はないからだ。

「それじゃあたしとジンは受験勉強あるから。ちゃんと家で大人しくしてなよ？」

校門を出ると、リリカがシュウジに向かってそう言う。シュウジは鬱陶しそうに手を振りながら応えた。

「へいへい。俺だけ仲間外れだよ。寂しいねえ」

「じゃあ長谷君も一緒に勉強する？」

「じゃあお前も一緒に勉強するか？」

シュウジは痛快そうに笑った。

「いつもハモリながらオレを窘たふめるなよ。まったく、オレの方が付き合い長いのに、よっぽどリ

リカとジンのが息が合ってるな」

その言葉に俺は内心くすぐったい気持ちに捉われる。リリカとシュウジが姉弟同然のような幼馴染だとはいえ、リリカに恋心を秘める俺としては、やはりその過ごした時間の長さに対しては嫉妬する部分もあった。

しかし俺とリリカの数年は密度が違う。絶対に失敗できない一つの目標について、手を取り合って邁進してきたのだ。

「大体シュウジはスポーツ推薦で受験する必要がないだろ」

俺の言葉にリリカが首を振る。

「いやいや。それでも長谷君には教養が必要だからね。やっぱり今から皆でお勉強会が必要かも」

お勉強会という名のリリカからの説論が待っていると察したシュウジは、わざとらしく肩を震わせた。

「二人の健闘を祈る。それじゃまた明日っ！」

と全力疾走で帰って行った。

それを見届けると俺とリリカはくすくすと笑いあいながら俺の家へと向かった。

「ああ見えて長谷君。あたしとジンの勉強を邪魔しないようにって配慮したんだよ」

「冗談だろ。逃げたようにしか見えないね」

などと訝いぶしみながらも、俺もリリカの意見に同意していた。ガサツで無神経だが、それ以上に

だから俺のような卑屈で根暗な人間でも二人の間にすんなりと溶け込め、こうやって普通の友達を演じられている。いや、いつしかそれは演技ではなくなっている。

俺はシュウジを親友だと思っているし、その気持ちは中一の時に二人に近づいた俺の『とある事情』の目標達成に対する想いをより強固にさせた。

今も走り去っていくシュウジの背中を見つめながら、握った拳に力が込められた。

リリカもそんな俺の決意を感じ取ったのか、いつも通り自信に満ちた微笑みを浮かべて言葉を掛けてきた。

「ジン。ありがとうね。あたしとシュウジの友達になってくれて」

「……最初はただの任務でしかなかった。今だから言うけど、二人とこんな仲良くなるつもりなんてなかったよ。データさえ取れば良いと思ってた。ただ……」

「ただ？」

隣を歩きながらリリカが顔を傾けて俺の顔を覗き込んでくる。その仕草と眼差しで、俺の心臓は熟した林檎のように甘酸っぱくなった。

「……シュウジが底抜けの馬鹿で、底抜けに良い奴だったから。だから今は本気でシュウジを守りたいと思ってる」

その言葉にリリカは普段の大人びた雰囲気崩して、満面の笑みで「うん！」と返事をした。それに君が好きだから、などとは今はまだ言えない。まだそれどころではない。

俺達の歩調に緊張感が漂う。

ついに今夜なのだ。

「怖いか？」

「全然。ジンと二人だから」

俺に全幅の信頼を寄せるその笑顔は、俺に優越感を与えると共に。再び深く深く恋に落としてくれる。

その信頼のもと、長きに渡った実験は今日終わりを迎え、そして実践が始まる。

俺とリリカが放課後二人になることが多いのは受験勉強のためなどではない。どちらも学力は十分だし、なにより進路どころか生活を全面的に保障されている。

シュウジは何も知らない。知る必要はない。

俺とリリカが育んだパートナーシップで彼を救う。

俺と、リリカで。

三人が通う学校からは、雄大にそびえたつ山脈が否応なく視界に映る。その山脈から一部分、学校側に突き出るように丘が形成されていた。

山脈を城壁とするならば、まるで見張り塔か関所のように存在するその丘は、全く人の手が入っておらず、生い茂る森林は日中でも陽光を完全に遮る。

その奥深くに、小さな祠がみすばらしく放置されていた。蔓が全体を覆うようにびっしりと巻

き付き、目を凝らさないと祠と認識することは困難極まった。

ただでさえ薄暗い森の中が、陽が暮れると完全な暗闇に覆われる。

月は満ちており爛々と輝いていたが、到底月光など届かない奈落のような場所に、その祠は朽ち果てていた。

それがドクンと、脈打つように鳴動した。途端に鳥は一斉に飛び立ち、獣はおろか虫まで丘から逃げ出すように必死に這いずり回った。

コルタールのような泥が祠から漏れる。闇より深い黒を有したそれは、やがてその場で人の背丈より大きい獣を象った。

産声を上げたそれは鴉に似ていた。目玉は一つで、クチバシの中からは蛇のような舌が伸びた。

そんなことでさえ些事に思えるほど、普通の鴉と決定的に違うのは、体長が人間と同じくらいか、少し大きいという点。

「グエッグエツ」

蛙のような鳴き声を上げると、ひょこひょこと数歩前に歩いた。

幹の太さが直径一メートルを超えようとする杉を目前に据ええると、真っ黒なクチバシで袈裟斬りするように斜めに突いた。

大木は鈍で払われた竹のように切り払われて倒れる。

その鴉のようななにかは翼を広げる。一つ一つの羽が蛆虫のように蠢いていた。

翼を広げたままその場で回転すると、周囲に生い茂っていた先程と同じくらいの木々が纏めて根本から刈り取られた。

「グエッグエツ」

己の力を確認して満足したのか、跳躍するように森林から夜空に一気に飛び出た。

まるで恐竜のような翼をバサバサと羽ばたきながら、その単眼が見つめるのは学校のその先、長谷シュウジの家だった。彼の家は丁度祠と学校の延長線上に在る。

上空でぐぐつと身を縮こまらせる。全身の筋力と魔力が凝縮するように丸まった彼は、まるで空中に浮かぶ砲弾だった。その状態から翼を激しく羽ばたかせると、爆ぜるような音を鳴らした。弾丸めいた滑空で長谷シュウジのもとへと飛び立つ。

それは鳥というにはあまりに速すぎた。時には新幹線をも凌駕する地球上で最速の鳥、ハヤブサの速度をその巨体で更に上回った。

なんの障害も無ければ、数分と経たずに長谷シュウジ宅に到着しただろう。

祠と長谷シュウジ宅の丁度中間地点である、学校の屋上に、両腕を組んで彼を睨み上げる少女の姿をした魔力の塊が無ければの話だが。

それは明らかに自分に敵意を抱いていると本能で察した。このまま素通りはさせてもらえないし、それに値する力は保有していると、生まれたての彼でも理解した。

翼を精一杯広げると、彼女の目の前で急停止した。

「魔装少女リリカ。崇りと接敵を確認。祠より受肉した最初の崇りを、これより『アルファ』と呼称する」

俺は自宅地下の研究室のパソコンの前に座り、ヘッドセットのマイクに淡々と言葉を投げかけた。やや前傾姿勢になり拳は強張っていたが、過剰な緊張や焦燥は無い。片手の指では数えきれなくなった数年間。やるべきことはやってきたという自負が俺にはあった。

「了解。これよりアルファの迎撃に移る」

校舎の屋上で仁王立ちしているリリカの声も同様に、微塵^{みじん}の震えも感じられない。

「アルファの動向は？」

研究室にある無数のモニタは、リリカの周囲を全て映し出していたが、それでも通信のテストも兼ねて尋ねる。

「急停止して、あたしをじろじろ見てる」

「やれそうか？」

「余裕」

リリカは即答したが、パソコンが表示する彼女のバイタル数値は、明らかに不安と緊張を表していた。

当然だ。彼女はあくまで普通の女の子なのだ。いくらシミュレーションを繰り返してきたといっても、こんな化け物を目の前にして平常心を保てるわけがない。

安全な場所から指示を出すだけの俺とは違い、直接対峙している彼女の恐怖はまさに理外のも

のだろう。

それでもリリカは言った。

「この数年、あたしとジンが積み重ねてきた時間を信じる」

その言葉と共に、彼女の脈拍心拍が落ち着いた。彼女の信頼が心強く、なにより嬉しい。俺は更に拳に力を込めると、力強く言った。

「リリカ！ そのクソ鳥ぶっ飛ばしちまえ！」

「はは。ジン。まるで長谷君みたいに暑苦しい声だよ」

同時に様子見をしていたアルファが、そのクチバシをリリカに突き付けた。

アルファはリリカを訝しむように観察していた。

胴体の胸当てだけは頑強そうだが、それ以外はキャミソールのワンピース。それも下着を隠すには殆ど意味を成さないようなミニスカートしか纏っていない。実際のところ、繁殖に適したしっかりとした腰つきの真下に位置する、黒いレースの下着は半分以上が常時丸見えた。

しかし露出は多いものの、その布地が確かに魔力を帯びた耐久性を伴っている装甲であることは一目瞭然だった。

とはいえずらりと伸びた太ももや肩回りは大胆に肌を晒している。

その代わりに膝と肘の先には、やけに堅牢で図太いフォルムの甲冑を装着していた。赤を基調としたそれは機械で作られた巨人の手足のようで、リリカの胴体と同じくらいに太い。

少なくとも先程の木よりは余程頑強に思えたアルファは、殆どない知能の中でも迂回しようという考えがよぎる。

しかしそれは一瞬で却下された。目の前で自分を睨む少女は、自分の獲物を守ろうとしていることを、言葉でなく殺気で伝えてきた。

ならばここで殺す。アルファは首を仰け反らせ、そしてクチバシを突き出した。その速度は野生の肉食獣でなければ反応できるものではない。

しかしクチバシが砕いたのは屋上の床だけだった。コンクリートが砕けたクツキーのように飛び散る。

リリカは完全に見切りながら半歩だけ下がっていた。そして右腕をそっと前に差し出す。

「充填。照準。完了」

リリカの右腕が古代文字のような幾何学模様を巻き付かせながら発光する。

アルファは相手の力量を見誤ったかと、全力で追撃することを選択した。再び大きく首を仰け反ると、瞬きする間もなくリリカを再びクチバシで貫こうとした。

魔力によって強化された動体視力は、目の前に迫りくるクチバシを捉えていた。それでもリリカは臆することなく、訓練通りにそれを放つ。宝石のような瞳の光彩は、未来を勝ち取る力強い意志で満たされていた。

「ドラグーン。発動」

リリカの手の甲の上にある発射口が開くと同時に閃光が走る。魔力を帯びた武骨極まる鋼の杭

が超高速で射出された。

パイルバンカー式魔装兵器ドラグーン。

容易に大木をなぎ倒すクチバシを、真正面から衝突させると粉々に打ち砕いた。

右腕に巻き付くように光っていた幾何学模様が消える。それは魔力の再充填の要を意味した。

アルファは苦悶の鳴き声を上げながら背中を向けて羽ばたき逃走していく。ダメージは深刻で、本来の弾丸めいた飛行には程遠く、ふらふらと浮き上がるのが精一杯といった様子だった。

それでも空中に逃げ出せたのは大きなアドバンテージとアルファは少ない知能で考える。己のクチバシを砕いたあの個体は、翼を持っていないし、投擲武器も有していないように見えたからだ。

リリカはアルファの背中を追って疾走した。

「逃がすわけないでしょ！ あたしはっ！ あたしとジンはっ！ ずっとこの日のために菌を食いしばってきたんだからっ！」

そしてそのまま屋上から飛び降りた。

右腕には再び幾何学模様が浮かび、ドラグーンの再充填を知らせるが、アルファとの距離は五メートルは開いていた。ドラグーンの間合いは三メートル。

リリカの踵から脛脛に掛けて無数の魔法陣が浮かび上がり、それらが炎のように光を放出すると、彼女は中空を蹴るように跳躍した。右足に続いて左足。

魔装少女が夜空を駆け抜ける。

アルファの背中にしがみつくと、右手をその首に押し当てる。同時にドラグーンの閃光が雷のように地面に向かって落ちた。

頭部を消失したアルファはそのまま墜落し、リリカは踵から光を放出しながら、ホバリングするようにゆっくりと着地した。

地面に足が着くと、丁度ガス欠のように踵から光を放出していた魔法陣が消えた。

「……長谷君は絶対に守ってみせる。あんた達なんかには負けないんだから」

彼女が睨む足元では、コールドタールのような泥が地面に染みつき、そして蒸発するように霧散していった。

俺はヘッドセットマイクを投げ捨てると、息を切らしてリリカのもとへと向かった。俺に用意された住処は学校とほぼ隣接している。ここが戦地という名の実験場になると想定されていたからだ。

リリカは魔装少女の出で立ちのまま、パイプ椅子に座り、毛布を肩に掛け、紙コップの飲み物を両手に包んでいた。『協力者達』が用意してくれたものだろう。

俺の到着を視認すると、満面の笑みを浮かべて手を振った。

立ち上がろうとするのを俺が制する。初めての実戦だ。消耗は激しいだろう。

「そのまま座っていい」

「どう？ 中々上手くやれたでしょ？」

「百点満点だ」

「でもやっぱりドラグーンの射程や再充填までの時間は改善の余地有りだね。あとは跳躍もギリギリだったし。まだまだ課題は多いみたい」

リリカの口調は少し高揚で上擦っていた。それも当然だ。普通の人生を歩むはずだった女の子が、化け物と命を懸けた勝負を交わしたのだから。平然を装えるだけでも彼女の精神力の強度が窺える。

研究室に帰投させたリリカの両手足の兵装を外すと、手術台のような大仰なベッドに横たわらせる。

相変わらずその肌の露出の多さには目のやり場が困る。ただでさえモデルのような肢体なのに、生足は太ももの付け根から爪先まで全て曝けだしている。芸術性すら感じるほどの美脚。それでいて太ももは瑞々しい肉感に溢れ官能的だ。眩しいほどに白く輝くそれは、黒いレースのショーツとの対比があまりに熾惑的で、俺は直視することができない。

その下着を隠しきれないミニスカートや、一見大人びた下着にしか見えないショーツも、全ては魔術兵装として意味のあるデザインで、決して俺の趣味というわけではない。空气中に漂う魔力の吸気なども考え、肌の露出バランスなども機能性のみを極めている。

しかもこのショーツ、正面から目にするだけでは気づけないが、実は本来クロッチがある部分に縦の切れ目が入っていて、少し左右に広げれば陰唇が丸見えになる。勿論^{もちろん}それも魔装少女の機能を高めるために不可欠なデザインだった。

リリカも当初は恥ずかしがっていたが、すぐに慣れたようだった。

「あの馬鹿を守るためだしね。それに基本的にはジンにしか見られないんだからいいか」

そうはにかんでくれた彼女の言葉は、俺への絶大な信頼の表れだ。

リリカの身体の節々に電極パッドを張りながら、改めて思う。それにしてもなんと均整の取れたプロポーション。そして美しい顔立ち。聡明であり、不屈の精神を胸に秘め、更には深い母性を有する。

若くして研究者としての才覚が頭一つ抜けているこの俺に、何一つ見劣りしない女性。祠の祟りは俺とリリカという優れた遺伝子を引き合わせるために発動したのかもしれない。

電極パッドを張り終えると、毛布をその上に掛ける。

「魔装少女。解除」

そう言ってからパソコンのボタンを押す。何千回と繰り返してきた儀式だ。リリカも完全にリラックスしている。

「んっ」

電気のように魔力が流れると、彼女は少しくすぐったそうに吐息を漏らし、背中を浮かした。同時にリリカの身体から魔装は光を帯びながら消失し、毛布を掛けたままとはいえ全裸となる。

リリカは毛布を纏いながら、脇に置いてあった制服に手を伸ばした。俺は着替えの間はずっと後ろを向いている。どちらから言い出したわけでもないが、最初の変身実験の時からの不文律となっている。

親しき仲にも礼儀は必要だ。

しかしリリカからは信頼と共に、俺への好意をひしひしと感じる。幼馴染を守るために苦楽を共にした長くも濃密な年月は、お互いに特別な感情を芽生えさせるのが必然だろう。互いに優れた能力を持つ同士ならば尚更惹かれ合う。

「もういいよ。ありがとね。ジン」

振り返ると制服姿のリリカが居た。凛々しくも愛らしい微笑み。俺の太陽。

「『企業』の試算によると、次の祟りの受肉化は早くも数日後らしい。今日のところはゆっくり休んでくれ」

「うん。ジンの方こそね。それと……」

リリカは気恥ずかしそうに視線を逸らし、そしてモジモジすると俺を見上げた。

「ありがとね。一緒に戦ってくれて。本当はアルファを前にした時すごく怖かった。でもジンの声で足の震えが止まった」

頭の中で羽毛が舞い散るような高揚感。心拍は心臓を破裂寸前まで追い込む。

「バートナーなんだから支え合うのは当然だろ」

リリカはくすぐったそうにはにかむ。

「長谷君は手の掛かる弟みたいだったけど、ジンは頼りになるお兄ちゃんって感じ」

「そんなことはないさ。リリカは俺の姉さん女房だよ」

うっかり俺のそうなって欲しいという本音が漏れ出てしまう。しかしそれは冗談だと伝わった

らしい。リリカは愉快そうに笑うだけだった

「あはは。女房って」

ともかく俺達は最後にハイタッチをして、幼馴染の守護という悲願の第一歩を祝い合うと解散した。

俺とは違い、ごくごく一般的な家庭で生まれ育った彼女が、何故こんな戦いに身を投じなくてはならなかったのか。

それは十年近く前に話が遡る。

この街の外れの山脈から突き出た丘には、誰からも忘れ去られた祠があった。

そこへ肝試しに訪れたのが幼い頃のシウウジやその同級生達だった。当時ガキ大将だった彼は、己の勇気を証明するために祠に悪戯をしてしまったらしい。

そして崇られた。

ここまではよくある話だ。

大抵は高熱を出すとか、財布を紛失する程度の不運に見舞われる程度で済む。

しかしその祠が保有していた崇りはあまりにも濃度が高かった。文献にはあの山では昔、大規模な落ち武者狩りが行われたと記されている。

崇りは数年から十年程度で、祠からこの世に受肉して、シウウジを呪い殺すと算出され、とある組織の監視下に置かれた。

通称『企業』と呼ばれる、要は魔術師の組合である。

彼らは魔術を管理し、その発展を目的とする研究機関であり、裏社会から政治経済にも深く関わる大規模な秘密結社である。

そのトレードマークのような存在が『魔法少女』である。昔から日本を守り続けてきた守護者であり、本来であれば祠レベルの怪異は彼女達が対処する。

だが、『企業』がこの町へと派遣したのは魔法少女ではなく、俺だった。

俺の家系は代々魔術師で、当然『企業』にも加盟していたし、なにより俺は幼少の頃から、この研究や開発に関して神童の名を馳せていた。魔術の実技はそれほどでもなかったが、まだ陰毛も生え揃っていない頃から一つの研究部門を任されていた。

それが量産型魔法少女。魔装少女の開発だ。

魔術師は慢性的に人材不足で多忙だ。今回の件でも十数人レベルで隠蔽工作に当たっている。

戦闘で破損した校舎を元通りに修復したり、一般人の目を誤魔化す結果を張ったりと、何かと便利な魔術を行使できる彼らだが一つだけ欠点がある。魔術師は基本的に激しい戦闘には向かない。精々低級霊を相手にできるくらいだ。今回のアルファのような一定レベル以上の怪異を相手にするのは、魔法少女の役割だったのだ。

近年、その魔法少女の数は激減しており、最盛期には国内だけで一万人近く居た魔法少女が、今ではもう千人を割るという。

魔法少女はそもそも適合者が少なく、更に魔力の出力が個人差で大きすぎた。

その点魔法と科学を融合させた魔装少女は適合する者をそれほど選ばず、個人差に依らない安定した出力も上層部には魅力的に映った。

『企業』は世界の混沌や破滅を望む人間の集まりではないが、積極的に社会の秩序を守りたいなどという正義の集団でもない。常に優先されるのは知的好奇心。上層部はシュウジの命などなんとも思っていない。

定期的にアルファのような実験素材を生み出してくれる祠を、『企業』は体の良い魔装少女の試験装置として利用しようと考えたのだ。

正直に言えば、俺も最初はそんな風に思っていた。魔術という真理に縁の遠い一般人など、衆愚ですらないとすら考えていた。だから最初は魔装少女のデータを取る為だけにリリカとシュウジに近づいたのだ。

でも今は違う。

純粹にシュウジを、友を守りたい。

真理を追究する同志でもない、ただ声のでかいデリカシーの無い男を俺は気に入ってしまったのだ。

人付き合いが苦手は俺は一人でゆっくり研究できる施設、つまり今の俺の住処である家屋の下に研究所を要求し、『企業』はそれに応じた。

魔装少女の適合者は他にいくらでもいたが俺はリリカを勧誘した。

一目惚れした雑念が混じっていたことは否めないが、それ以上に弟同然の幼馴染を守るという

彼女が持つ大きなモチベーションが重要なのは確かだった。

文字通り命懸けの戦いになる。生半可な動機では務まらない。

彼女の返事は聞くまでもなかった。勿論最初は彼女もそんなオカルト話は半信半疑だったろうが、一度魔装少女に変身させてみると、魔力に満ちた己の身体を以て、『企業』が暗躍する裏の世界を信じざるを得なかった。

『企業』としても魔装少女の試験はなるべく上手くいって欲しいらしく、木っ端の構成員ではあるが、こうして事後処理などに人手は割いてくれている。祠の観察も続け、崇りの受肉時期を常に計算し続けてくれた。その結果今晩も準備万端で迎撃できたというわけだ。

金銭面などで研究の後押しも惜しめない。それらの助力について感謝はしているが、やはり俺としては、リリカと二人で一步を踏み出せたという気持ち強い。

そう。まだ一步進んだに過ぎない。

祠にはまだまだ崇りが詰まっている。シュウジを殺そうとして、これからも受肉しては湧き出てくる。

しかし俺とリリカならきつと乗り越えられる。

暫く研究室で、手の平に残るリリカの温もりを感じていた。彼女の触れた場所からは、青々しい果実の甘い香りが漂っていた。

居ても立っても居られなくなって俺は深夜の街に繰り出した。なにとはなしに学校に足向け

る。『企業』の魔術師は撤退済みだった。仕事が早い。今晚この街で、化け物が暴れた痕跡は一つ残らず消える。『企業』は政府とも強い繋がりを持っているので、警察や報道機関のコントロールも完璧だ。

現場の視察ついでに、その辺をウロウロと歩いていると、深夜の校舎裏にリリカの後ろ姿を見つけた。夜風で静まりつつあった俺の胸が途端にときめく。先程ハイタッチした手の平がじんわりと熱を帯びた。

これは運命だ。もうこの日、告白してしまおう。そしてより強固なパートナーシップを築き、シュウジを守るのだ。

優れた雄には、優れた雌。当然の摂理だ。

しかし俺は、リリカに近づく前に気づく。彼女と対面するようにもう一人居る。俺は慌てて物陰に隠れた。月明かりが照らすのはシュウジの姿だった。

「どうしたの長谷君。こんな時間に」

リリカの声が弾んでいる。それもそう。目の前の幼馴染を、今まさに命に代えて守ったのだから。シュウジの元気な姿がより己の戦いの意味を実感させたのだろう。

「いや、なんか知らんけどついフラっとここに來たくなってるな。リリカは勉強帰りか？」

「まあそんなところ。すごい偶然だね。あたしもなんとなくここに來たくなったんだ」

リリカとシュウジはそう言葉を交わしたきり、見つめ合って静寂が二人を包む。しかしその無言の気まづさは、明らかに甘酸っぱさで満たされていた。

リリカとシュウジの鼓動の音が聞こえる。特にリリカのそれは、戦闘を終えた高揚だけじゃない。どちらも聞き覚えのある心音。俺がリリカに向ける、恋の音色。

二人が無言のままくすぐったそうに笑った。胸がざわつく。そしてリリカが口を開いた。

「……なんかこうやって長谷君とここであたり会えたのって、すごく運命みたいな感じる。特に今晚っていうのが」

「そうなのか？」

「……うん。えへへ」

リリカは愛らしく笑うと、今まで長い年月を掛けて胸に秘めた想いが、零れだすように言った。

「……長谷君。ずっと好きだったよ」

俺が聞いたこともないいいらしい口調でそう言うと、「……良かったら付き合ってください」と頭を下げた。

シュウジは慌てた素振りを見せながらも、覚悟を決めたように生唾を呑み込む。

「……オレも、リリカがずっと好きだった」

「……本当に？」

顔を上げたリリカは信じられないといった様子だった。そしてそのまま二人は恥ずかしそうに笑い合った。

「正直絶対振られると思ってた」

両手を後ろで結び、顎を引いたリリカの真っ赤な照れ笑いは、月明かりしかない夜中でも、この世で最も可憐だと断言できた。

恋が成就した乙女の顔。なんと幸せそうに花開くのだろうか。

「こっちの台詞だつつの。リリカとは昔から距離感近すぎたからな。男として見られてるのが不安だった」

「その言葉、そのままそっくり返すから」

二人がこの世の幸福全てを濃縮したような微笑みを浮かべ合う。

「ジンとも仲が良かったしさ」

そうだ。俺が居る。リリカと最も密度の濃い時間を過ごした俺が。

「ジン？ ジンはお兄ちゃんって感じ。誰かさんと違ってすっごく頼りになるんだから」

リリカは俺を誇るように言った。その透き通るような笑顔は俺への好感度の高さを表していた。しかしその感情は俺とは交わらないことを確信する。

「もしかしてジンと二人で勉強してたのとか嫉妬してた？」

「……そりゃあちよつとはするだろ」

シュウジが気恥ずかしそうに顔を逸らす。リリカはそれが嬉しかったようで、くすくす笑いながら「馬鹿」と可愛く言った。その表情と声色を向けられたのが俺なら愛らしさで全身を溶かしただろう。

しかしそれらを独り占めできるのはシュウジだけだった。ただの部外者の俺にできるのは陰か

ら盗み見ることだけ。

俺の胸に重苦しい闇が渦巻く。俺はゆっくり後ずさりながら、肩に押し掛かる絶望の重さに喉を詰まらせた。

「大体リリカってジンに対しては出会ってすぐ名前と呼んでいたのに、俺のことはずっと苗字だしさ」

「だってジンってさっきも言った通りすっごくお兄ちゃんって感じで親しみやすいんだもん。それに相棒だし」

「相棒？」

「ああ、えっと……受験勉強のね」

「じゃあ俺は？」

いつも颯爽とした印象のリリカが、やけにモジモジとしながら躊躇う。

「……好きな人の下の名前なんて、気安く呼べるわけじゃないじゃん」

二人の周囲から、まるで搾りた果汁を振りまいたかのような芳香が漂う。

「……じゃあこれからは呼んで欲しいんだけど」

リリカは「あはは」と照れ臭そうに笑うと、「暫くは恥ずかしくて無理かも」といじらしく答えた。

「そんな殊勝なタマかよ」

「ひどいなあ。あたしだって一応女の子なんですけど？」

地面や靴が濡れだした。俺の失恋を嘲笑うかのように雨でも降りだしたのかと思ったが、俺の落涙だった。夜空はリリカとシュウジを祝福するように満天の星空を輝かせていた。

二人はなにか話すでもなく、恥ずかしそうに頬を緩ませ、時折視線が交差すると、意味もなく頬を更に綻ばせていた。

「今だから言うけど、昔からリリカの気を引くことばかり考えてた」

シュウジの身も蓋もない言葉に、リリカは心底嬉しそうに顔を綻ばせた。

「なによ急に」

「小学校の時とかもさ、肝試しだって言って、祠に石投げちゃったりとか。あれとか全部リリカに男らしいって思ってた欲しかったからなんだ。今思うと馬鹿みたいだけどさ」

その言葉にリリカは言葉を失う。その間にシュウジが懺悔するように続けた。

「あの祠にも悪いことしちゃったな。また今度謝りに行かないとな」

リリカは笑みを浮かべる。

「……そうだね。もう少し色々落ち着いたら、またあたしが一緒に行って、一緒に謝ってあげる」

「色々ってなんだよ」

「受験とか」

まさか今まさにその崇りと戦っているなどとは言えない。

「そういえばあの肝試しも結局リリカと二人だけ残ったんだよな。流石^{さすが}リリカ。俺の惚れた女」

茶化すようなシュウジの言葉にリリカが苦笑いを浮かべる。

「あの時本当はすごく怖かったよ。でも長谷君と一緒にだったから」

そして俺だけに聞こえるその台詞の続き。

『今も長谷君のためだから頑張れる』

二人の間に俺が男として割り込める隙などこれっぽっちも最初からなかったのだ。親友として、そして相棒としてしか俺は存在していなかったのだ。

「そういえばさ、付き合うのは暫く二人だけの内緒にしないか？ 特にジンには」

「え？ なんで？ むしろジンには真っ先に報告したいんだけど」

リリカの口振りには、俺に対する強い友愛を感じた。

「あ……ほら。今まで仲良し三人組だったから、急に恋人でーすってなるの恥ずかしいじゃん？」

俺は確信した。シュウジは俺のリリカへの気持ちに気づいていたのだ。だから俺への配慮として、そう提案したのでろう。

「ん……まあとりあえずは良いけど、でも頃合いが来たら絶対ジンには一番に報告しようね？ 今のあたしと長谷君があるのは、ジンのおかげなんだし」

「まあまあ。そこは男同士でタイミング計らせてくれよ」

二人の言葉には俺に対する純粋な友情と感謝しか感じない。

長い恋を結んだ二人が、友達を思う気持ちしか感じない。

気が付けば俺の足は勝手に研究室へと向かっていた。その足跡は涙で濡れていた。俺は嗚咽を漏らしながら二人から逃げるようにその場から去った。

ずっと俺の独り相撲だったのだ。

リリカがシュウジを長谷君と呼び、俺だけを名前で呼び捨てにすることにずっと優越感を抱いていた。なんて馬鹿だったのだろうか。俺が好きだからではなく、シュウジの下の名前を呼べない乙女の恥じらいだったのだ。

魔装少女の変身時は毛布を羽織るとはいえ、全裸となる時後ろを振り向くだけで、退室をお願いしてこなかったのも、俺のことを異性として意識していなかったから。

そんな俺が淡い想いを寄せているなどとは、彼女は考えもしなかっただろう。

研究室に戻ると俺は鏡を覗き込む。如何にも自信過剰で、心が痩せた犬のような目つきをした道化が居た。太陽のようなリリカの伴侶には到底相応しいとは思えない。

惨めだった。

もう消え去りたいと願った。

幼少の頃から神童と持て囃され、自分の願うものは全てが手に入ると勘違いしていた。

俺が愛した女は、きつと俺を愛してくれると疑うこともしなかった。

俺は全身に魔装少女変身用の電極パッドを張り付けていく。

適合資格があるのは女性だけで、非適合者には死が待っていることは動物実験で明白だった。

あまりに無責任な捨て鉢だったが、肥大していたプライドがぼつきりと折れた俺にはもう何も

残っていなかった。

せめて自分が開発したこの装置で人生を締めたかった。俺が唯一残した成果。

もう俺が居なくてもリリカ一人でシュウジを守るだろう。

俺は顔をくしゃくしゃにしながらへたり込み、「……リリカ。大好きだったよ」と泣きじゃく

りながら、ボタンを押した。

夜遅くということもあったので、蜜月の時間もそこそこにリリカはシュウジと別れて研究室に戻っていた。

それでも随分と話し込んだように思える。それもそのはず。長年互いに男女として意識していないのではないかという齟齬そごを乗り越えて想いを通じ合えたのだ。伝えたい気持ちは山ほどあった。

家まで送るといふシュウジの言葉をリリカは嬉しく思いながらも、「ジンの家に忘れ物してきちゃったから」と嘘をついて断る。

リリカはあくまで普通の人間で、魔術の行使も魔力の感知もできない。しかし魔装少女としての変身及び訓練を繰り返す内に、常人に毛が生えた程度だが、魔力の存在に対して鋭敏になっていた。

そんな彼女がシュウジとの幸せな談笑中に、激しい凶兆を感じた。しかし次の祟りの受肉化は早くて数日後だと聞いている。

とにかくリリカはジンと連絡を取ろうとしながらも、地下の研究室に戻った。しかしジンの姿は見当たらなかった。

なにか得体の知れない不安に襲われる。

それを振り払うとリリカは全裸になり一人で己に電極パッドを張り付け、魔装少女への変身を遂げると、『企業』への緊急コールだけを済ませて外に飛び出た。

魔装少女となり魔力の感知が可能となったリリカは、その禍々しい気配に背筋を凍らせた。先程撃退したアルファとは比較にならない強大な存在感。否応なしに今なら明確に位置も掴める。学校の方だ。リリカは文字通りひとつ跳びで再び運動場に降臨した。

その瞬間彼女はぞっとした。

『それ』は自分が先程アルファを迎撃した際に位置取っていた学校の屋上から自分を見下ろしていた。

おそらく、自分がシュウジと談笑をしていた時から。

それは崇りと同じように全身が漆黒で形作られていた。人型で背丈は自分とそう変わらない。全身が甲冑のような甲殻で覆われている。頭部も西洋鎧の兜のようだがどこか生物的で、目は見当たらず、口元も見えない。

それでも口らしき器官は存在するようで、グルグルと肉食獣のような呻きを上げながら涎らしきものを垂らし続けていた。

それがなんなのかりリリカにはわからない。しかし発する魔力は明らかにこの世の悪感情を煮詰

めたような嫌悪感を抱かせる。

それは一瞬で屋上から姿を消した。

(速いっ！)

魔装少女となり強化されたリリカの動体視力は、なんとかその動きを追えた。

人型のそれは、先程アルファが倒れ、そしてその身を溶かした地面の上に立っていた。そしてなにを思ったか、その場に獣のように四つん這いになると、地面をガツガツと食りだしたのだ。

リリカはその行動の考察は無意味だと警戒に集中する。不穏な雰囲気はどう見ても友好的とは思いがたい。突き出した右手は既にドラグーンの発射体勢に入っていた。

食事を終えたそれは四つん這いのままりリカに向き直り、不格好なクラウチングスタートの体勢を取った。するとその背中に、ギチギチと音を立て鉱石が隆起するように、なにかが生えた。

それは翼だった。

魔術や怪異の知識などほぼ皆無のリリカでも瞬時に理解する。

アルファの魔力の残滓(ざんし)を喰らうことで、その能力を取り込んだのだ。しかもただの模倣ではない。

翼は羽ばたくことをせずに、その羽の先端一つ一つを噴射口のように開かせると炎を噴き上げた。戦闘機のジェットエンジンを想起させる。

それでもリリカに恐れはない。まだ一匹とはいえ、祠の崇りを打ち砕けた経験は彼女に揺るがない自信を与えた。

（来るなら来い。あたしとジンが鍛え上げたこのドラグーンはなんだって貫ける！）

「オレノ……モノダ……」

獣が人語を無理矢理発声したような響きが聞こえた。声というよりはノイズに近い。

（なにを言ってるの？ こいつは祠の祟りじゃない？ でも明らかにあたしに敵意を向けている）

漆黒の塊は膝をぐっと曲げると、次の瞬間、羽の噴射口が爆発するような豪炎をあげ、リリカに向かって突進した。

その初速は音を置き去りにしていた。それでもリリカの宝石のような瞳は、臆することなく照準を頭部に合わせていた。

（どれだけ速くても予備動作が大きすぎる！ 正面かつタイミングが丸わかりならっ！）

数年に渡るジンとの訓練は決して生ぬるいものではなかった。文字通り血反吐を吐くことすらあった。リリカは決して武道の達人でもなければ一流のアスリートでもない。それでもシユウジを守りたいという気持ちだけで彼女はジンの予想以上の成長データを叩きだした。

魔力で強化された全身の神経と血肉を余すことなく駆使して、訓練に裏打ちされた精度で黒鬼を捉える。

ドラグーンの閃光が迸る。

龍の咆哮めいた槍撃が黒鬼の顔面を打ち穿った。

リリカがそう確信した瞬間、黒鬼は弾丸めいた高速突進の最中、その身体を無理矢理きりもみ

回転させた。

ドラグーンは鬼の肩を掠めて装甲の表面を削るに留まった。

（嘘でしょ!? あの速度から空中で身体を捻った!?）

あり得ない動きを見せた敵に対して、リリカは驚きを隠せない。それでもリリカは全身を硬直させて衝撃に備えた。それは防御と呼べるような代物ではないにしろ、それでも想定外の事態にただ怯むような女ではなかった。

黒鬼は頭頂部からリリカの腹部に衝突する。それはタックルなどと呼べるようなものではなく、原始的な体当たりだった。

鈍い衝突音が響くと、リリカは列車に跳ね飛ばされた中型動物のように宙を舞った。

ほぼ水平方向に弾き飛ばされ、着地した後も水面を跳ねる石の如く無残に転げ回った。

運動場のトラックの端から端まで飛ばされて、漸く静止したリリカは夜空を仰ぐように倒れた。

全身の骨が砕けたのではないかという激痛と共に、頭がぐわんぐわんと揺れて天地すら判別がつかないほどに平衡感覚を失う。

しかしそれでは終わらないとばかりに黒鬼が仰向けのリリカに馬乗りになる。

「オレノ……オレノガ！ オレノガフサワシイ……」

両拳を頭上に掲げ、それをハンマーのように振り下ろそうとする。どんな逆境でも光彩を失わないリリカの瞳がそれを見つめたまま、小馬鹿にするように鼻で笑った。

「……なに言ってるのかわかんないわよ」

息も絶え絶えで、絶体絶命の窮地。それでも彼女が屈することは無い。喉元にせり上がる血反吐を呑み込みながら、右腕を黒鬼の脇腹に伸ばす。

「……負けないって言ってんでしょ」

不敵な笑みを浮かべて、ドラグーンを再度発射させた。

あまりに微量な充填だったそれは黒鬼を僅かに仰け反らせる程度のダメージに留まった。

それでも痛みと衝撃に怒りを覚えた黒鬼は、リリカの足首を掴むと、八つ当たりのように放り投げた。

リリカの身体が人形のように飛び、そして地面に跳ねて滑っていく。

無造作に投げ捨てられたリリカの行き着いた先は、先程長年の恋が成就した校舎裏だった。

彼女の朦朧とする脳裏には、ずっと恋い焦がれ続けたシユウジの笑顔が浮かぶ。彼のためなら命だって惜しくはない。だから戦うと決めた。起き上がるのが無理ならせめて這えと彼女は地面に這いつくばった。

首だけで振り返ると、黒鬼が悠然とこちらに歩いて来ている。

リリカはぎよっとした。その股間には、先程まで無かった男根らしき突起が、天を衝くように勃起していた。

「……オカス……オマエハ……オレニ、オカサレルベキ」

リリカは生の勃起した男性器を目にしたことがない純潔の乙女だが、それでも教科書などで学

習したそれとフォルムが殆どそのままだった。

ただ長さとはさほど噂に聞くような生易しいものではない。刃物のように尖っているわけでもないが、その強大な肉槍は、処女でなくとも眉間をしかめただろう。

真っ黒で、どこか甲皮めいた質感を纏っているが、人間の男根とそれほど相違ないものが、ビクビクと血管を浮き上がらせて、先端からはだらだらと透明な粘液を垂らしている。

「……まさか……あたしをレイプしようとしている？」

リリカはより必死に這って距離を取ろうとした。

「やだ……やだやだやだ……」

しかし黒鬼にとっては芋虫の捕獲よりも容易い。

「さっきここでやつと長谷君と結ばれたのに……好きな人に好きって言えて、言ってもらえて……嘘みたいになぜな時間を過ごした場所なのに……」

首を掴んで仰向けにひっくり返すと、甲冑のような甲殻の一部分として違和感のない肉槍が、リリカの下腹部に照準を合わせた。

「……こんな奴に無理矢理犯されるなんて絶対嫌っ！」

「……待ってっ、お願いっ」

もはや発声の余力すら怪しいリリカはそれでも必死に懇願する。しかし黒鬼は黒いシヨーツの切れ目に穂先を押し当てる。ぬめった男根は、男を知らない無垢で高潔な腔壁でも、スムーズに掻き分けていけそうなほどに潤滑油に満ちていた。

まさに鋼のような亀頭が、戦いに身を投じた乙女の陰唇をむにゆりと左右に押し広げた。如何に凛々しく、如何に不屈の魂を持ったリリカでも、女性器は自分を負かした雄を拒絶することなど不可能なほどに柔らかかった。

リリカの細めた瞳には涙が浮かぶ。

「……助けて……長谷君」

その言葉は俺を激昂させた。何故俺の名前を呼ばない。

俺？

これは俺なのか？

間違いない。俺は柳楽^{やぎら}ジンだ。

なにが起こっている。

敗北感と劣等感から逃れるように自決しようとした後から曖昧だった意識が徐々に整理されていく。

ただし今も憎悪と憤怒と嫉妬の渦に巻き込まれている。

意識と身体は間違いなく俺なのに、到底制御ができない狂暴性に身を委ねることしか叶わない。

まるで暴れる野犬の背中にしがみついているかのようだ。しかしその野犬も俺自身であるという不思議な感覚。

そんな獣じみた興奮の中、ショーツの割れ目に亀頭を押し当てる。夢にまで見たリリカの陰唇はプリプリと柔らかく、対して俺の亀頭は鋼のように硬い。

その鈴口から滲^{にじ}む愛液は人間のカウパー腺液とは一線を画す粘度を伴っており、それがもたらす滑らかさはこのまま腰を押し進めればいとも容易く結合を果たせそうだった。

何故俺じゃダメなんだ!?

何故俺に助けを求めない!?

そう彼女に詰め寄ったかったが言葉は出ない。その代わりに男根で一氣にリリカの奥まで貫いた。

「ぐうつっ!」

どこか曖昧模糊とした意識の中でも、全身の筋肉や神経が強化された俺の鼓膜は、なにかがプチッと破れた音を捉えた。同時にリリカの純潔を破ったのが男根に伝わる。

彼女の肉壺に包まれた性器はじんわりと温かく、そしてむにゅむにゅと柔らかい。

この至福を最初に我がモノにできたという優越感が獣の鼻息を更に荒くした。

処女膜を無残に散らされたリリカは、その痛苦に耐えるように奥歯を食いしばった。

更に鋼めいた肉角で腹の奥を持ち上げられるように、背中を反り返らせて浮かせる。

自身を串刺しにする確かな雄の剛直を胎内で感じている。荒々しい熱と硬さ。それによって恋人への純潔を奪われた事実は、彼女に抗う氣力を一時的に失わせる。

「……長谷君……ごめん」

決定的な敗北感の中、齒を食いしぼり、恋人に処女を捧げられなかったことを、涙を流して謝罪した。

その健気さが俺の怒りを更に買った。もっと俺を見てくれ。俺はずっとリリカを見ていたんだ。心の中でそう叫びながら腰を振った。

膣壁の締め付けは非常にきつい。柔肉がぎゅうぎゅうに詰まった壺で剛直を往来させる。その窮屈さはシュウジへの想いを体現化したものだ。そんな場所で男根を摩擦することは、罪の意識と共にとにかく俺を夢中にさせた。

「んっ、くっ！」

リリカが初めて受ける雄の寵愛は野性じみていた。覆いかぶさられ、獣のように腰を振られる。その度に鋼のような硬度を誇る筋肉の槍が、己の奥底を押し上げたかと思えば一旦引き、そして一息つく間もなく再び奥底を突いてきた。

「ふうっ……ぐっ！」

女の都合を考えないその交接は、自分より強い雄に犯されているという事実をリリカに突き付ける。

自分が負けたから犯されている。自分が弱かったから……。

そんな幾重にも重なるリリカの無力感が、痛みに耐える彼女の表情から伝わる。皮肉にもそれは俺の腰つきを更に激しくさせた。

それでこそリリカ。俺の惚れた凛々しくも可憐な女。

並の女であれば、この時点で己の生殺与奪権を男に託すしかない。しかしリリカは屈しない。

その宝石のような眼光に未来を掴み取ろうとする意志が宿る。

「んっ、んっ、んっ、んっ」

唇を真一文字に結び、激しい抽送で漏れる苦悶の吐息をできる限り遮断する。

そして俺を睨み上げ続けた。一度は必ず訪れるであろう最大のチャンスを見逃さないために。

直接密着する粘膜から彼女の心の声が聞こえてくる気がした。

(……こいつがどういう存在なのかは今のあたしには判断する術がない。それでもおそらくいつかは射精かそれに類する行為を果たす。どんな生物でもその刹那は無防備になるはず……不確定要素ばかりだけど、やるしかない)

初めて他者の侵入を許した女性器を、ただでさえ規格外の巨根でズコズコと貪られながらも、リリカは反撃の糸口を手放さない。

ただでさえ激しく犯され、もはや余力なんてものは存在しない。それでも右手のドラグーンには少しづつ魔力が充填されていった。

それはシュウジを守りたいという願いの力。それが鬼となった俺にも伝わると、余計にそれを陵辱したくなった。

リリカへの恋慕、シュウジへの嫉妬。

それら全てが倫理や道徳というフィルターを一切排除した今の俺の原動力となる。

負の感情と欲望が無限に増幅されていく。制御できない。どうなっている。わからない。しかし今はリリカの柔壺による快感と、そして支配欲に浸っていたい。

ピストンが更に苛烈になる。すると初めて男を知ったはずのリリカの膣が、じゅぼじゅぼと淫らな摩擦音を上げた。

「……くっ」

リリカの眉間に恥辱で皺が寄る。

こんなの膣が防衛反応で愛液を分泌させているだけ！ と俺に釘を刺すような視線だ。

勿論それも要因の一つではあったし、俺の男根が最初からぬめりを伴っていた影響もある。

しかしそれだけでは、陰茎が纏う破瓜の鮮血が、白く泡立つ愛液でその朱色を薄めていく説明にはならない。

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ」

リリカの乱れる呼吸に、もどかしげな焦燥が混じる。更にはその時々で、「んっ」と明らかに苦痛や屈辱とは無縁な、甲高い吐息が漏れた。

(………嘘………嘘嘘嘘………そんなの、絶対にない！)

リリカは認めることができない。岩のようにゴツゴツした男根が、膣壁を往来する度に、全身に甘い痺れが走ることを。

魔装少女変身時のリリカは、戦闘用に痛覚が多少麻痺させられている。

普通であれば、こんな凶悪な巨根を、これほど無造作に抽送されれば、如何に凛々しいリリカ

でも、激痛にのたうち回るか、失神は免れなかっただろう。

しかし皮肉にも、魔装少女としてのリリカの耐久性が、処女膣でもその男根の雄々しさを味わえてしまっていた。

「くっ、くっ」

眉間の皺や、食いしぼる歯が耐えるのは、処女喪失の痛みと野太い男根による圧迫感だけではなくなっていた。

闇より深い漆黒さと、堅甲めいた質感以外は、なんら人間のそれとは変わらないように見える男性器。強大であまりに逞しい形状をしているが、それは一応人間でも有する者が居るレベルではあった。というか俺は元々これくらい巨根だったのだ。

決定的に違うのは、その鈴口から漏れ出る我慢汁の成分。

鬼と化すまでにリリカへの恋情を募らせた俺の想いは粘液として溢れ、無垢な彼女の膣壁を熱く疼かせたのだ。

リリカっ！ リリカっ！ 愛してる！

俺の理性の半分は、地下の研究室に置いてきてある。それでも半分は残っていた。自分がなんの罪を犯しているのか明瞭に自覚している。

それでも俺に宿った鬼の力は、抗えない狂暴性と衝動を絶えず爆発させ続けている。失恋という劣等感を糧にして。

「グアッ！ グルッ！ ウウッグ！」

リリカの中、温かくて、きゆうきゆうで、すごく気持ち良いよ！

俺が声にならない声を呻きながら腰を振る。

催淫効果を持つ分泌液を万遍なく纏った巨根と、痛覚に耐性を得ていた膣が鳴らす摩擦音は、耳にする者の頬を紅潮させるほどに淫らだった。

じゅっぶ、じゅっぶ、じゅっぶ、じゅっぶ、じゅっぶ。

それはリリカも例外ではない。先程まで感じていた屈辱や敗北感とはベクトルの違う羞恥で頬は紅色に染まっていた。その上呼吸のコントロールもままならなくなる。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

犬のような息遣いでなんとか「それ」を喉元に押さえつけていたが、鬼のピストンが一度大きなストロークで、ズン、と彼女を責め立てると、「それ」は喉の奥から押し出されるように、その凛々しい唇から漏れてしまった。

「あんっ」

リリカは我が耳を疑った。長年想いを寄せた人を守るために戦い、そしてその意中の男と恋が実ったこの場所で、名も知らぬ屈強な鬼に倒され、組み伏せられ、犯されて、まるで媚びへつらうような声で鳴いたのだ。

その甘い音色は鬼と化した俺の本能をより煽り立てた。

ああ、リリカ。なんて可愛い喘ぎ声。もっと気持ち良くしてやるからな。

ズンッ、ズンッ、ズンッ、と立て続けに深いストロークで貫く。

「ああっ、あっ、あんっ！」

リリカは思わず視線を横に逸らしてしまう。射精という千載一遇のチャンスを穿つために睨み続けていたその瞳が、己を犯す雄への直視を避けた。

その際にあまりの恥辱と、自責の念が、「……くそっ」と彼女にか弱い悪態を吐かせた。

そのいじらしい所作は、俺の腰つきを鬼の姿に相応しい更に熾烈なものとさせる。

逞しい肉棒がガツガツと突き立てられるリリカの女性器は、まさに蜜壺と言わんばかりにグチョグチョと淫靡な音を鳴らしてその往來を許した。

処女喪失当初の過剰な強張りが溶け、本来の役割である男根への抱擁を、リリカの意志とは関係無く習得し始めていた。

彼女はそれを如実に感じる。胎内で自身の膣壁が、雄を悦ばせるための蠕動ぜんどうを始めたことを。リリカは余計に己を恥じて、真横の虚空を睨み、歯を食いしばった。

「んっ、くう……ふっ、う……はあっ、あっ……やっ……ん」

魅惑の肢体に女の悦びが、じわじわと蓄積していくのが手に取るようにわかった。露出した部分の肌に浮かぶ汗の粒は、明らかに性的な艶やかさを伴っていた。更には徐々に瞼がトロンと落ちていく。

それでも好き勝手やられてなるものかという彼女の自尊心はギリギリで持ちこたえていた。

「くっ、うっ……んっ……ぐう……」

その矜持きんじも鬼のより深い一突きで容易く瓦解する。

「ああんっ」

力強い男根で脳天まで痺れるような快感。思わず瞼はぎゅっと閉じ、口がだらしく開いた。

リリカ……なんて愛らしいんだ。

普段の凛然とした姉御肌気質なリリカからは、想像もできない蕩けた声に、俺は更に燃え上がる。

リリカの膝裏を抱え込みながら、より深く挿入できるように結合部を調整すると、腰を振り下ろすように男根を突き刺した。

雄の形を覚え始めた膣壺が、ズボッ、ズボッ、ズボッ、ズボッ、と喘ぐと、同時にリリカの口からも嬌声こせうが漏れる。

「あつ、ああつ、やつあつ……あつあつあつ……やだっ、こんなの……」

紛う事なき喘ぎ声を上げながらも、リリカは今一度顔を引き締め、鬼を直視した。

自身の中で感じた雄の膨張。それはより雄々しく自身を押し広げ、荒々しく肉壺を擦る。そのどちらかが頭をジンジンと甘く痺れさせることを恥じながらも、リリカは同時にチャンスを感じる。

（……もつと、もつと勃起させてみなさいよっ！ あんたのより太くて硬いの、顔にぶち込んであげるからっ！）

甘い吐息を漏らしながらも、彼女の眼差しは明確に反撃のチャンスを窺っていた。

リリカを蕩けさせる恍惚こうふと、その中でも高潔さを失わない彼女に、俺は益々恋に落ちていく。

リリカの右腕はうつすらと光を帯びていた。勿論俺も気づいていないわけがない。それでも俺は遮二無二に腰を振った。実際に射精に近い。

リリカが受けている辱めは想像を絶して余りあるが、その気高くも不屈の精神は、やはり己が恋した女に間違いはなかったと確信させる。

俺の全てを受け取ってくれリリカ。君のような最高の女性は、俺のような優れた遺伝子を受け継がせるべきなんだ。

根本まできっちりと挿入したまま、ガツガツと回転数を重視したピストンを見せる。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ！」

今の俺の男根が纏った粘液は、どうしようもないほどリリカの膣壁を雌として悦ばせる。

リリカが激しく喘ぎ、背中を反らせて浮かせる。彼女は必死に歯を食いしばろうとするが口元から涎が垂れた。

「やだっ、イクッ、イクイクイクっ！」

リリカはそうなることを本気で恥じているようだった。シユウジ以外の相手でそうなるくらいなら死んだ方がマシだという気概すら感じる。

そんなリリカを愛おしく思う気持ちだが、精液となって尿道をこじ開けた。

「イクッう！！！」

リリカが一際高い声を上げると同時に俺もガツンと奥まで突き上げ射精する。

ドビュッ、ドビュッ！ ビュルルルルッ！

ピストンが静止して、俺とリリカが絶頂を共有する。リリカとシュウジの想いが繋がったこの場所で二人の脳裏が同時に火花を散らす。その直後に真っ白な大波に意識が攫われ、得も言われぬ恍惚の中に心身を溶かされる。

惚れた女に男根を奥までずっぱり挿入して、ドクドクと精液を注入するのは、それが人生の全てだと俺を身震いさせた。

対して生まれて初めて精液を注がれたリリカは、繁殖という行為の熱量に改めて雌の部分を反応させる。

「熱っ、い……精液っ、やだ……」

ビクビクと痙攣するリリカの表情は屈辱と嫌悪感に溢れていた。愛する男以外に種付けされた女の敗北感が眉間に皺を寄せる。

しかし同時に力強い雄への称賛も隠しきれないでいた。

魔装を纏ったもの同士が、暫く一つの生き物として結合していた。

リリカから見て俺は得体の知れない怪異だが、それでも自分の奥底で精を吐き出す行為を愉しんでいるように見えただろう。実際に俺は喜悦極まっていた。

リリカもその熱い吐精を受けて、思考と視界が霞むほどの浮遊感を味わっていたが、彼女の胸の奥で揺るがない想いが、その眼光と右手に力を与えた。

つまりはシュウジへの恋心と、そして俺との特訓の日々への信頼。

二人の大切な人が与えてくれる勇氣。

それは魔装少女リリカを奮い立たせる氣力の源になるには十分すぎた。

そしてそれだけでは説明がつかない魔力が、予想を超えて急速に溜まっていく。

半分以上理性を失っている俺はぼんやりと思いつく。

精液には魔力が含まれ、女性器での吸収が最も効率が良いのは魔術師にとっては基礎知識である。

しかしそれは精々アスリートがスポーツドリンクを補給する程度の効果しかない。ドーピングにはなりえない。

それでも現にリリカの魔力は空の状態から三割程度は回復していた。

リリカにその知識があったかどうかはわからないが、ともかく蕩けた息遣いと眼差しのまま、彼女は不敵な笑みを微かに浮かべた。そして射精で弛緩しきっている俺の眼前に右手を差し出す。

「……溢れるくらいビュービュー精液注いでくれてありがとう。お返しにあたしも嬉しいので突いてあげる」

発射口が開き、ドラグーンが俺の顔面に向けて雄たけびを上げた。

ガギンッ！

直撃すれば神話級の怪異でもなければ、どんな装甲にも通用する出力で設計されたドラグーンが、初めて開いた俺の口に咥えられて受け止められていた。

今の俺の口はサメのように無機質な牙が幾重にも並んでおり、それらがドラグーンに突き刺さ

るよう噛みつき受け止めていた。

不完全な充填のドラグーン相手とはいえ、なんとという強度。そしてなんとという反射速度。

頭がギリギリと軋むと、瞬く間にドラグーンが噛み砕かれた。自身で設計した武器を破壊するのは開発者として複雑な思いに駆られたが、暴走する狂暴性はそれ以上に自身の雄々しさに惚れ惚れとした。

無残に破砕された唯一の武器を、リリカは気丈にも見続けていた。その瞳に絶望は宿らない。

その佇まいにも俺は惚れ直した。

雄は一旦射精すると身体も気力も臨戦態勢を解除する。だからそのタイミングを狙う。リリカのその作戦はこれ以上ないほど理に適っていたし最善だった。

それを彼女の誤算と評するにはあまりに不公平だろう。

リリカには知る由もなかった。

俺が抱いていたリリカへの想いと、味わった劣等感とは、一度射精したくらいで満たされるほど薄くはない。噴火のような射精をしても尚、俺の頭は、胸は、そして男根は、彼女を手に入れたという激情で溢れていた。

リリカは漸く気づいたようだ。

己を貫く男根が、全く萎えていないことを。

このまま一晩中でも自分を犯し、陵辱する気概に溢れ、一瞬たりとも気力が萎むことは無いことを、膣内でギチギチに勃起を続ける男根から悟った。

俺の手が魔装少女の胸当てを掴むと、一息にそれを剥がし、その下の布地も同時に破り捨てた。

手足の兵装と、黒いショーツだけを残して、彼女は全ての肌を晒された。

胴体の中でも比較的重厚に守られていた胸元には、なんとも瑞々しくも豊かな乳房が隠されていた。

仰向けでも美しく盛り上がったままの釣鐘型の巨乳は、やや左右に広がりながらも、本来の形をそう崩すことなく維持している。

乳頭はつんと尖り、その豊かな乳肉には相応の面積の乳輪が、鮮やかな桃色で艶めいていた。凛々しさと可憐さを併せ持つリリカらしい美巨乳だと、俺はより彼女の魅力に傾倒していく。

その証左として、彼女の黒いショーツの切れ目から挿入していたままの男根が、ドクンと激しく脈動した。そして彼女の中で更に凶悪な存在感を増す。

リリカはもう自身には打つ手が無いことを悟ると、残された選択肢は少ないことを瞬時に理解する。

一つ。声を荒らげて助けを呼びつつあくまで抵抗する。そして高確率で殺される。

二つ。撤収済みではあるが、俺か『企業』の人間が気づいてくれるまで耐え忍ぶ。

彼女の瞳は常に未来を見据える。

両手を万歳すると、これ以上の抵抗の肚積もりは無いと意思表示した。

しかしそれは降参の合図ではないことを俺は知っている。リリカの心はまだまだ折れない。生

きて帰り、シユウジを守るための光で煌めいている。

どちらにせよ俺は、リリカを好きにしているのだ、という浅ましい欲情で満たされた。

「ガウウッ！」

ノイズのような獣の鳴き声を上げる。

鬼の魔装は明らかに俺の負の感情を増幅させていた。普段の理知的な思考回路は鳴りを潜め、短絡的で利己的な快楽主義に突き動かされる。

彼女の両脇辺りに両手をつくと、カクカクと腰を振る。

「んんっ……ふうっ、つく」

精液塗れの肉壺は、あまりに野太い陰茎が出入りする度にグッチョグッチョと卑猥な音を上げて、陰唇から精液を押し出されていた。

「はあっ、あっ」

先程は起死回生の一撃に意識を集中させていたものの、熱く硬い男根で絶頂していた事実が、今更になってリリカの全身を覆う。

我慢汁でさえ微かな媚薬めいた効能を発揮するほどだった。ならばジンの恋心そのものと言っても過言ではない精液が、子宮口から腔壁に塗りたくられたことによって、リリカの身体にどういった影響が出るかの推測は容易い。

(……なにこれ……やけに下腹部が疼く。ジンジンと痺れるような、それでいて痒みもあって、

おちんちんに擦られる度に意識が飛びそうになる……)

全身が汗ばむほどに火照っている。痛みと屈辱の象徴だった自身を行き来する肉棒は、今ではその摩擦の度に下腹部を疼かせ、奥を突く度に甘ったるい声を押し出してくる。

「あっ、あっ……あんっ、ああっ、んっ……」

ズコズコと腰を振ると、美しくもたおやかな乳房が、たぶんたぶんと弾むように揺れた。中はゼリーでもぎっしり詰まっているのかと思うほどの瑞々しくも蠱惑的な揺れ。

鬼の魔装を纏ったジンの腰つきが更に激しくなる。

「やあっあっ……だめっ、そんなっ、激しっ……あっ、あっ、嘘っ、そんな奥までっ」

死力と策略を尽くしても尚敵わなかった雄相手に、リリカの雌が敗北感を超えたなにかを抱き始める。

(やだっ……こいつのおちんちんっ……ドラグーンより硬くて強いっ……)

リリカは必死に首を振って邪念を振りほどこうとする。

そしてなるべく反抗的な態度は示さない方が得策だとわかっていても、彼女はそのまま蕩けていくのは絶対に避けたかった。

恋する人を守るために、信頼できる友人と積み重ねた時間をなにより誇りに思っていたから。

寸断無く襲い掛かる極上の快楽の中で、彼女はトロトロに溶けそうな表情と声色をなんとか引き締めて、鬼を睨む。

「……あたしが、犯された程度で……大人しくなるような……やっああ、はあ、はあ……慎まし

い女だなんて思わないでよね……んつく……絶対、絶対……いつか……あつ、いっいつ♡ あ、あんたの喉笛に嘯みついてやるんだから……」

自身と、なにより恋人と友人の尊厳を守るためにそう言い切る。

しかしそんな彼女の気高い心意気とは裏腹に、下腹部は力強い男根に屈する喜びを受け入れ始めていた。

「あぁっ、いっ……あっいつ♡ そこっ、そこっ、やめてっ、奥っ、奥っ♡ 届いてるからっ……おっきいので、奥、ズンズンってされると、変になっちゃうっ♡」

リリカはトロトロに蕩けてしまいうるようになるのを、なんとか崖っぷちで耐えていた。心に秘める、ずっと好きだった幼馴染への想いを最後の砦に。

「あぁっ、いっ、いっ……イクっ、イクっ♡ あっ、あんっ、きもちっ♡ そこっ、そこっ、気持ち良いっ♡ もうダメ、そんなされたら、メチャクチャになっちゃうっ♡」

（可愛い。可愛いよりリリカ。もっと蕩けさせてあげるからな）

そんな清廉な気持ちなど打ち砕くように、ジンはガツガツと腰を叩きつける。

リリカはその衝撃で、脳天まで男根に貫かれ犯されるような感覚に陥った。

その一瞬だけが、彼女は完全なる敗北で頭を真っ白にさせた。自身を負かした雄に、力づくで屈服させられることを、心地良いとすら思ってしまった。

彼女の蜜壺にゆつくり浸透したジンの粘液の催淫効果は、彼女を淫らに昂らせる。

そんな自分を認めたくない一心で、リリカは必死に懇願した。意思の疎通が叶うかどうかすら

わからない相手に、縋りつくように言葉を投げかけた。

「お願い、あたし、好きな人が居るの……その長谷君に赤ちゃん作ってもらうための場所なの……だから、だから……こんな強いおちんちんで、長谷君用のおまんこメチャクチャにしないでっ……こんな大きくて気持ち良いちんぼの形、長谷君と赤ちゃん作る前に覚えさせないでっ……」

（リリカ、大丈夫だ。この世でお前を一番幸せにできるのは俺なんだから。天才である俺の種子を受け取るに値する愛しいリリカ。もっともっと愛してやる）

ぐっ、と一際強く腰を押し込むと、龟头をリリカの子宮口を押しつぶすように密着させ、一発目とやら遜色の無い射精を施す。

ドブドブとヨーグルトのような精液を直接子宮に流し込んでいく。その特濃の粘液による催淫効果は、リリカの口が忌憚の無い雌の意見を漏らすほどに、彼女の子宮を痺れさせた。

「あっ、あぁ……♡ すっご♡ さっきより、びゅっびゅっ射精てる♡ 硬くて熱いちんぼから、強いザーメンびゅるびゅる注がれてるっ♡」

自己の意識が溶けるような快楽の中、はしたない言葉を発する自分をリリカは恥じた。しかしそんな恥じらいは溶岩流めいた雌の悦びが燃やしつつ押し流していつてしまふ。

「射精ちんぼっ、すごい♡」

そんな中でもリリカは踏ん張る。全ては支配されまいと、心の奥歯を噛みしめる。

リリカは紛う事なき処女だったが本能で理解する。男は連続で二度も射精をこなせば多少は満

足するはずだと。トロトロに湧けながらも、これ以上の快楽責めは無いと踏む。

(……うう……悔しいけど……気持ち良すぎる……全身が浮いてるんじゃないかってくらい心地良い……でも気を抜いちやダメ……逃走のチャンスくらいはあるかもしれない)

強靱な精神力で僅かなチャンスを窺うリリカに、ジンは無常にもピストンを再開させる。

ジンはリリカの両足首を掴んで、彼女の腰が浮くくらいにくぐと前方に押し込んだ。

リリカからも結合部が丸見えになると、その視線に驚愕や焦燥が混じる。

「嘘っ、嘘っ……なんで、おちんちん、カチカチなの……もう精子でお腹いっぱいなのに、あっ
あっ♡ ガッチガチで、遅いままっ♡ こんなっ、こんなの……あっ、あっ、あっ♡ おっき
♡ あっ、いいっ、いいっ♡ 勃起ちんば、硬くてきもちっ♡」

数年間二人で築き上げた、強く凛々しい魔装少女。

それを己の角で征服する。ジンの細胞全てが歓喜で満ち足りていく。

ドラグーンを破壊された両手を鬼の首に回して縫りつくようにぎゅっと握った。

「イクっ、イクっ♡ おまんこ来ちゃうっ♡ おちんばズコズコされる度に、痺れるのが昇ってくるっ♡」

同時に彼の肉棒が、破裂しそうなほどに膨張する。

リリカはそれをドロドロに溶けた蜜壺でも感じ取ると、鬼を睨みつつも唇をきゅっと結った。



屈服させられている雌としての色香、そして魔装少女としての誇り、更には彼女本来の負けん気の強さが混じった表情をジンに向ける。

「もう無理だからねっ！ それ以上はもう精子入らないんだからっ！ 長谷君の赤ちゃん作る部屋、あんたの溶岩みたいな精液でもうタブタブなんだからっ！」

それでもジンが射精目前の激しいピストンを行うととろりと溶ける。

犯される悦びを知った女の身体は、もう彼女を快楽の濁流で押し流していく。

「ああっ♡ あっあっ♡ いっ♡ イクっ♡ イクイクイクっ♡ お腹っ、熱い♡ ちんぼとザーメンの熱さでイっちゃう♡ イっちゃうイっちゃう♡ んんっ……ああっ♡ イククウウツツツ♡♡♡」

リリカが今夜一番甲高くも甘い鳴き声を上げると、ジンは素早く男根を引き抜いて射精した。それは気遣いなどではなく、胎内は確かに精液で満たせた感覚があったので、マーキングしたいという衝動からだった。

日本人には中々見られない大砲めいた逸物が、ビクンビクンと上下に暴れるように揺れながら、ビュルッ、ビュルッ、ビュルッ、と濃厚な白濁液の固まりを射出する。

リリカは背中だけでなく腰も浮かせて激しく絶頂の痙攣に身を任せていた。喉はぎゅっと閉じて、口は大きく開いていた。

「はあっ、はっ♡ はっ、ひい♡ あっ、ああ、はっ……んっ♡」

巨根から吐き出された濃密な精液は、リリカの額まで優に届き、彼女の顔を濡らしていく。そ

の際に、だらしなく開いた唇にも塊が飛散し、唇から口腔内に垂れるそれをリリカは無意識に咀嚼し嚥下していた。

当然その美巨乳や、腰のくびれも、精液でべとべとに濡れていく。

リリカはその最中、浮かした腰から、びゅっ、びゅっ、と潮を黒いショーツの切れ目から噴き続けていた。

ジンの腹部がそれを受けて濡れていく度に、お返しと言わんばかりに肉角をビクビクと上下に揺らし、ドビュドビュと彼女の白い肌を更に白く染め上げていった。

やがてリリカの背中と腰が地面に落ちると、彼女の瞳は虚空を見つめ、口元からは涎が垂れ続けた。

手足は弛緩しきったように大の字に広がる。

依然として続く絶頂で膣内が収縮と痙攣を続けているのであろう。ショーツの切れ目からは、潮の代わりに、精液が押し出されるように、びゅっ、びゅっ、と勢い良く漏れた。

ジンの股間はまだ臨戦態勢を解いていなかった。

リリカの瞳がそれを捉えようと、その眼光に己は魔装少女だという生気を取り戻す。

「……かかってきなさいよ……」一晩中でも相手してあげるんだから」

もう指先一つ動かせない状態でも、リリカは挑発するように言った。

少なくとも性交中は殺されないだろうという打算や、少しでも時間を稼いで助けを待つという作戦もあったが、それ以上に、やられっぱなしでいてなるものかという気概を感じる。

その感情の由来は何も彼女の気質だけに依るものではない。

「……長谷君を守るために、ジンと二人で鍛え上げた魔装少女が、これくらいで音を上上げるわけがないでしょ」

リリカは下唇をぎゅつと噛みしめると、自分に言い聞かせるようにそう言った。

その健気な気持ちに余計にジンを昂らせる。しかし彼の魔装が剥がれ落ちていきそうな予兆を感じた。

甲殻めいた魔装が消失していくと同時に、狂おしいほどに増幅されていた劣等感や劣情が理性を取り戻しつつあった。

文字通り魔を装い鬼となっていた間は、自分が自分じゃないかのように狂暴性の虜になっていた。それが醒めていく。

どちらにしてもこのままでは自分の正体がバレてしまうと、ジンは慌ててリリカの身体を転がしてうつ伏せにさせた。

その頃にはジンはリリカと同じように、手足だけが魔装を纏っている状態になっていた。厳密にはリリカはショーツも纏ってはいたが。

屹立した男根は、その質感や漆黒を失っただけで、強大な形状はそのままだった。ジンは元々暴力的なまでの巨根の持ち主だった。

半裸でうつ伏せになっているリリカの後ろ姿は、理性を取り戻したはずのジンに生唾を呑み込ませた。

なんて細く綺麗な背中。

豊かな乳房が地面で潰れて乳房が脇腹からはみ出て覗き見える。

スレンダーな腰回りから、女性らしい開いた骨盤への曲線に思わず鼻息を荒くさせる。

「もう大丈夫だよ。ほらリリカ。俺だよ。正気を失っていたんだ」

そんな台詞が脳裏をよぎるが、ジンは無言のまま黒いショーツを引き千切った。

ぶりんとした臀部が露わになると、先程まで味わっていたリリカの柔肉を渴望するように鼓動を速めた。

もう鬼から人へと戻ったジンは、ひどく罪の意識を覚えながらも、まだ魔装を纏ったままの手でリリカの腰を掴んで浮かばせた。

膝をつかせて、土下座の体勢にさせる。

リリカには抵抗の気力と体力は残っていない。ただこのまま矜持を胸に秘めつつ、耐え忍ぶという覚悟だけを感じる。

突き上げさせたリリカの腰は、白桃のような丸みを帯びていた。その肉感はどうしようもなく男を雄にし、人を鬼にさせた。

ジンの肉槍が筋肉を軋ませて反り返った。

両手で腰を掴むと、ジンは心の中で恍惚の声を上げる。

(リリカ、なんて綺麗な背中と煽情的な臀部なんだ。俺の血を残すために磨き上げられた器)

滾りに滾った肉棒を、再びリリカに突き刺す。

「あつ、ん♡」

鬼と人ではなく、人と人として交わった。その事実がジンを天にも昇らせる。

リリカの中の温もりとヒタヒタした感触は、理性を取り戻した今の方がより鮮明に愉しめられた。

腰を振るとリリカの桃尻が、ばんっ、ばんっ、ばんっ、と小気味良い音を鳴らす。それと同時に甘い嬌声が漏れる。

「あつ、あつ♡」

ジンの陰毛が当たったりなど、多少の差異は存在していたが、絶頂を繰り返したリリカにそこまでの認識能力はない。腰を掴む手は鬼のままなのが、その認識の欠如に拍車を掛ける。

意識がまどろむリリカとは対照的に、想いに想ったリリカを自分が喘がせているという現実が、より鮮明にジンを奮い立たせた。

(……どうして俺じゃダメなんだ?)

「ああつ、いつ♡ 奥っ、奥っ♡ そこっ、だめっ、あつあつあつ♡ すごいっ♡」

ドラグーンを破壊されたリリカの手が、地面を抉るように掴む。

(俺が世界で一番リリカを愛しているのに！ 一番幸せにしてあげられるのに！)

「あつ、イクっ♡ このちんぽ、強いっ♡ あんっ、あんっ♡ だめっ、こんな強いおちんちん、あたし一人じゃ勝てないっ♡」

(そうだ。俺達はずっと二人で頑張ってきたじゃないか。だから俺に頼ってくれよ。俺の名を呼

んでくれっ！)

ジンはリリカに縋るようにガツガツと腰を叩きつける。

「イクっ、イクっ、イクっ♡」

リリカは背中を絶頂でヒクつかせると、「はあつ、はあつ、はあつ……♡」と甘い吐息で呼吸を整えながら呟いた。

「……長谷君、あたし頑張るからね……長谷君を守るためなら、こんな奴のおちんちんになんか、絶対負けないから……」

その言葉はジンを再び修羅にさせる。魔を装わなくとも、人の身のまま、彼は鬼となってその剛直を彼女に突き立てる。

「はうっ、あつ♡ ひいついつ♡ あひっ♡ ひっ、ひいつ、ひいつ♡」

絶頂の余韻に浸る暇すら与えない。リリカの頭の中は白い爆発が絶え間なく続く。

「ひいつ、ひっ♡ ああつ、ひいつ♡」

桃尻はヒクつくような痙攣が止まらない。それでもジンはピストンを止めない。

地面を掴むリリカの両手が更に地表を深く抉った。

「……長谷君♡ 長谷君♡ 好きだからねっ♡ あたしが好きなのは、長谷君だけで、こんな奴のちんぽなんか……おちんぽなんかあつ……♡」

男性器は射精感で破裂寸前だったが、少しでも自分に振り向かせたくてジンは腰を叩きつけた。

「あんっ、あんっ、あんっ♡ ズコズコくるっ♡ 射精直前のガチガチちんぽ来てるっ♡ 長谷君、好きっ、好きっ♡ あああっ♡ そこっ♡ おっき♡ やっあ、それ、好きっ♡ やだ、ちが、そうじゃなくて……あっあっあっ♡ きもち♡ 気持ち良いっ♡ 好きなのは長谷君だけで、でも、でも、あっ、あっ、あっ♡ このちんぽ、硬い……やだあ……大きくて硬いおちんちんなんて、絶対好きにならないんだからっ……あいつ、いいっ♡」

精液が鈴口をこじ開けるのを感じた。寸前になって、このまま自分勝手に、彼女の奥底を自分の想いで満たしているのかと葛藤した。

リリカは自分にとってなにより大切な初恋相手だったことを思い出す。

「イックうう♡♡♡」

しかし一足先に果てたリリカが、全身をヒクヒクさせながら漏らした言葉が、俺に中出しを選ばせた。

雌として屈服した絶頂の息遣いの中、リリカは俺を睨んだ。

「……あんたなんか、いつかジンと二人でぶっ飛ばしてやるんだから……」

それで全てが慰められたわけではなかった。それでもやはり、自分が彼女にとってただの有象無象ではないのだと思えた。

葛藤や罪悪感は消し飛び、やはりこの女を手に入れたいという支配欲に突き動かされる。

腰をぎゅっと掴み、下腹部で尻肉をむにゅりと押しつぶすように密着させた。

竿全体で初恋の温かさと柔らかさを甘受しながら、ドクドクと精液を注入していく。

リリカはその精液の熱と濃さを受け止めると、雌の悦びで全身をふるふると震わせながらも、剣呑な眩きを向ける。

「……ジンならきつと、あたしをもつともつと強くしてくれる」

恋情ではないにしろ、それは間違いなく特別な信頼だった。

それを受け取りながら、彼女の雌穴に根本まで挿入して続ける生射精は喜悅の極みだった。

リリカもそんな射精を受けながら、ジンが時折龟头を奥にぐりぐりと押し付けるものだから、

「……っく♡」と悔しそうに甘い声を上げて、膝をガクガクと揺らしては絶頂していた。

まだまだリリカと繋がっていたい激情が萎えることは無かったが、不意に彼女の首筋に吹き矢のようなものが刺さるのが見えた。次の瞬間にはジンも同じ場所に同じものを撃ち込まれた。

瞬時に混濁していく意識の中で、既に『企業』の人間に包囲されていたことを彼は悟る。

二話 ガラス一枚が隔てる幸福と恥辱

「我々『企業』は、昨晚君が陥った形態を『魔装悪鬼』と命名したわ」

とても車内とは思えないリビングルームめいた広々とした空間で、その女性はさほど興味も無さそうにそう言った。そして備え付けの冷蔵庫からワインを取り出すと、まだ午前中だというのにグラスに注ぎ、躊躇なく口にした。

しかしその所作や雰囲気はエレガントの一言で、一朝一夕で身に着く品格ではない。昼間から酒をおろる姿が、周囲に優雅さを感じさせる人間はそう多くない。

ぞっとするような整った美貌だった。儂い^{はかな}ほどの白い肌に、やや垂れた目尻は妖艶ですらあった。

さぞ格式のある生まれを持つ、生来のお嬢様だったのだろう。彼女の纏うオーラは、庶民とは一線を画す気品に溢れていた。

それでも年齢は二十歳そこそこだというのだから恐れ入る。

時折研究室にも顔を出す花鳥院^{からういん}シランは、言うなれば『企業』から派遣されている俺の監視役だ。

口を開けば他人は全て己にかしずいて当然という高慢な態度だが、それが許されているのは、その美麗さと家柄のおかげだろうか。

「相変わらず安物しか置いていないようね。それとも予算削減の波はこんなところまで押し寄せてきているのかしら。どちらにせよ滑稽ね」

彼女はグラスを置くと、あからさまに皮肉めいた視線と声色を俺に向けた。

「そんな中、潤沢に予算を注ぎ込まれている魔装少女の研究は順調かしら？ 柳楽ジン君。いいえ。『魔装悪鬼』と呼んだ方が良いかしら？」

それでも俺は一步も引かない。朗らかなリリカとはまるで別種の、冷氣すら感じる宝石のような瞳を真正面から受け止める。

「名前の方でお願いします」

「よろしい。では柳楽ジン。改めて初陣の所感を述べなさい」

「報告書に記した通りです。兵装のリロードや射程、または機動性に改善の余地は残すものの、出力は非常に安定しています。魔術師が対応できないクラスの怪異相手にも、十分な戦果を上げました。一万人に一人以下とも言われている魔法少女の適合率と比較し、魔装少女は十人に一人は適合するため、やはり量産が可能な魔装少女の研究は今後も推し進めるべきかと」

花鳥院シランはグラスの中のワインを回すように揺らすため息をついた。

「それはもう報告書で確認したわ。今のわたくしが、いえ、『企業』が知りたいのは『魔装悪鬼』として初陣を飾った貴方の感想なのだけれど？」

場の空気が緊張感で凍り付く。花鳥院シランだけが、リラックスした雰囲気ワインを口にしていた。凍えるほどの静寂の中、彼女から「いつまでこのわたくしを待たせるつもりかしら？」という

無言の圧を感じる。

「……変身した後は、自身の中に潜むある種のカテゴリの感情が、暴走するように増幅したのを感じました」

「ある種のカテゴリとは？」

「……一言で言うなら闇です。この世を憎悪するような闘争心で全身が満たされました。意識は鮮明ですが、意志の支配権は殆ど失っていました」

花鳥院シランがうつすらと、しかし明らかに俺を蔑むような微笑みを浮かべた。

「それと性欲でしょう？ 映像を確認したわ。いくら負の感情が暴走していたとはいえ、長年連れ添ったパートナーを随分野蛮に犯したもののね。それとも彼女に特別な感情でも抱いていたのかしら？」

彼女は俺の気持ちなどわかり切った上で、弄ぶように冷笑した。俺はそれを無視して尋ねる。

「……俺はどうなるんですか？」

「勿論粗相を犯した獣は殺処分よ」

大したことでもないようにさりとそう言う。そしてそのままワインを飲み干すと、俺を一瞥もせぬまま言葉を続けた。

「しかし獣ではなく戦士となり得るなら話は別。なのでわたくしが貴方に下してきた指示はこうよ。『このまま魔装少女も魔装悪鬼も、どちらの研究も続行しなさい』。以上。以前と変わらず協力は惜しまないわ。なにか質問は？」

「……お咎めは無し、ということですか」

「『企業』も貴方には期待しているわ。お好きにやりなさい」

「魔装悪鬼は謎だらけです。昨晚のような暴走の可能性は高いです」

「ただの獣なら殺処分と言ったはずよ」

「……リリカにはなんと説明してあるんですか？」

「『魔装悪鬼なる正体不明の怪異が出現。貴女を犯した後、柳楽ジンと共に我々企業が到着すると逃げていった』と誤魔化してあるわ。まさかあれの正体が貴女のパートナーだったなんて、彼女の心情を鑑みれば口にできるわけもないでしょう？」

「『企業』が欲しているのは研究成果のみ。彼らがリリカの精神面をケアするのは人情に依るものではないのは明らかだった。」

「……ありがとうございます」

「よろしい。では精々励みなさい」

車が丁度目的地に到着し、俺が降車すると、その高級車はさっさとその場を去って行った。

俺は病院の玄関からロビーに入り、そしてリリカが入院している病室に向かった。

ノックをしようとする拳が扉の直前で硬直する。

一体どんな顔をして会えばいいものか。

魔装悪鬼は確かに俺だった。でも同時に俺ではなかった。俺の心は燃え盛るような嫉妬と劣等感という鬼によって支配されていた。

勿論犯されたリリカにはそんなこと関係無い。酒に酔って押し倒されたのと何も変わらない。

唯一の救いは『企業』が魔装悪鬼の正体を誤魔化してくれたことだ。そしてそれに安堵している自分にも嫌気が差した。

リリカと対面することに葛藤する俺の肩に手が置かれた。

「よおジン。お前もリリカのお見舞いか？」

振り返るとシュウジの見慣れた笑顔があった。どこか能天気なそれは頼り甲斐も備えており、こんな時でも不思議と心が落ち着く。親友の人柄に感謝すると同時に、リリカが彼を選んだ理由が身に染みて心が沈む。

「リリカなら全然元気だぜ。検査結果も問題無かったようだし、ちょっと貧血だったんじゃないかって話だな」

表向きは普段通りに振る舞いながらも、リリカはどんな気持ちでシュウジと言葉を交わしたのだろうか。シュウジと結ばれた直後に犯され、シュウジに助けを求め、謝りながら絶頂していた彼女が……。

いつも通りの毅然とした笑みを浮かべていたのだろうか。それを知るのが怖い。

「でもちょっと様子が変だったかもな。弱っててもそれを見せまいと強がるのはいつものことだけど、それが少し過剰というか」

細かいことはあまり気にしないシュウジにも見透かされるほどに、昨晚刻まれた心の傷はまだ胸の奥で疼いているようだった。

余程俺が深刻な顔をしていたのだろうか。俺を慮るようにシュウジが口を開く。

「おいおい。そんな顔を青くするほど心配することないだろう。ほら、リリカも今まで病院に運ばれたことなんてなかったし、少しは動揺してるんだろう」

「……そうか。いや、受験勉強をハードにしすぎたかもな」

なんとかかひりだすように冗談を口にする、シュウジは「わっはっは」と大きな声で笑い俺の肩を叩いた。

「病院だぞ。静かにしろよ」

「さっきもリリカにそうやって叱られたよ。本当お前らには同じことばかり言われるな」

以前までなら、俺とリリカの呼吸が合っていることをシュウジに指摘されると、密かに優越感を燃やしていたものだが、今では到底そんな気にならない。

「それで今リリカは？」

「少しだけ眠るそうさ。それで俺が帰ろうとしたらお前の姿を見かけたもんでな」

「そうか」

まだ中で眠ってるかもしれないリリカに配慮して、俺がドアノブから手を離すと二人で世間話を交わす雰囲気になる。シュウジは廊下の壁に背を預けて苦笑いを浮かべた。

「リリカって大きな怪我とか病氣したことないだろ？　だからうちの婆ちゃんとかが祠の呪いだってうるさくてさ。あんなの小学校の頃の話だったのにな。あ、ジンにしたことあったっけ？

祠の話」

「……ああ。肝試しでどっかの馬鹿が悪戯したんだろ？」

「そうそう。だから呪われるならそのどっかの馬鹿だろって言ってんのにな。その馬鹿はこの通りピンピンしてるし」

シュウジはカラカラ笑いながら力こぶを作ってみせた。お前のためにこっちがどれだけ苦労してるか、などという風には考えなかった。どうやら俺は根っからシュウジのことを友達だと思っているらしい。

「そういえばなんでそんなことしたんだ？」

「……あゝ」

シュウジが照れ臭そうに天井を仰ぐと、「……そんな時一緒に居た好きな女の子に格好いいところ見せたくてさ。馬鹿みたいだろ？」と無邪気な笑顔を俺に向けた。

シュウジとリリカに出会う以前の俺なら、なんて非合理的な理由で余計な面倒を増やしやがって、としか思わなかっただろう。

「いや、気持ちわかる」

俺もリリカに好かれるためなら泥だつて啜るだろう。

「でも後で知ったんだけど、あの祠ってマジでやばいらしいな。親父辺りの世代は知らないみたいだけど、爺ちゃん婆ちゃんには当時メチャクチャ叱られたもん。なんでも爺ちゃんが子供の頃に友達が俺と似たようなことして、すんごい不審な死に方したんだとよ」

「変質者だろ」

素っ気なく返すが、そのデータは勿論俺も確認している。数十年前にこの地で起きた凄惨な事件。獣に食い散らかされたように文字通り八つ裂きにされた少年の死体。

俺とリリカが居なければ、昨晚シュウジも同じ姿となって発見されていただろう。

暫くシュウジと時間を潰すと、改めて二人でリリカを見舞った。リリカは個室のベッドに伏すでもなく、窓際で陽光を浴びながら背伸びのストレッチをしていた。

「あ、ジンじゃない。おはよう。長谷君も帰らなかったんだ」

何事も無かったかのように笑みを浮かべて俺を迎える。

「あの、これ……差し入れ」

リリカの好物である林檎を差し出した俺に、「あはは。ジンも林檎持ってきてくれたの？ わざわざありがとうね」と普段通りの、頼もしさすら感じる凛々しい笑顔を浮かべた。

「見てよジン。長谷君もこんなに買ってきてさ。こんなに食べられないよ」

シュウジが高らかに笑う。

「あっはっは。考えることは一緒か」

「シュウジ。だから声デカいって」

「長谷君。個室とはいえ病院なんだから静かにね」

いつもと何も変わらない俺達のやり取り。日常。しかしリリカがどれほどの痛みを隠しながら、その笑顔を作っているかは俺には想像もできない。

やがて元々帰るところだったシュウジが先に帰って二人きりになった。

病室に重苦しい空気が漂う中、暫く無言になるとリリカはベッドの上で背筋を伸ばして、毅然とした表情と声色で言った。

「……統けるからね。魔装少女。安心してよ。あたしそんなヤワな女じゃないからさ。それに最初から命懸けになるってわかってたんだから。これくらいで済んで御の字だよ」

リリカの言葉は途中から震えだし、そして下唇を噛んだかと思えば目頭に涙を浮かべた。

彼女はそれを零すものかと素早く手の甲で拭くと、引きつった笑みを俺に向けた。

「怖かったし、悔しかったけどさ……でも、長谷君守れて良かったって思えた。長谷君の笑顔守るためなら、あんなの野良犬に噛まれたようなもんだよ」

俺は何も言えずに俯いた。そんな俺をリリカはむしろ励ますかのように、優しくも力強い言葉を投げかけてくれる。

「あたしはジンと一緒に戦ってくれるなら百人力なんだからさ」

俺は自己嫌悪で益々喉を詰まらせた。

先程シュウジと三人でこの場に居る時、リリカとシュウジが重ねあう眼差しが時折恋人同士のそれになるのを如実に感じた。俺が訪問する前は常にそうだったのだろう。

リリカはシュウジと視線を交わすことに罪悪感と共に癒しも受け取っていたのだ。

そしてそんな二人の甘酸っぱい視線の交差を覗き見る度に、疼く胸の痛みを慰めるように耳元で幻聴が聞こえる。魔装悪鬼となった時、常に頭に響いていた声と一緒に。

『リリカの初めてを奪ったのはお前だぞ』

『思い出せ。美しく豊かな乳房。無垢ながらもヒダヒダとした挿入感が甘美だった臍壺』

『腰を振る度によがっていただろう。あの可憐な顔と声を知っているのはお前だけだぞ』

その声に誘惑されるように、俺はずっと優越感で勃起していたのだ。

三人で談笑している時も、そしてこうしてリリカの決意表明を受け止めている時でさえ、身の心も鬼に成り果てようとしている。

「ねえジン。魔装悪鬼は祠と関係あるのかな？」

「……その可能性は低いと思う。そもそもシュウジには目もくれなかったみたいだし。独立した怪異か、もしくは『企業』と敵対するなにかか」

「でもあいつ、『オレノモノダ』って言ってた気がする。それがシュウジのことだとしたら……」

リリカのその推察は当然のものとも言えたが、それでもやはり彼女が常にシュウジの安全を最優先に考えていることが如実に伝わる。その想いが健気であればあるほど、俺に鋭利に突き刺さる。

「怪異が口にする言葉は大抵意味が無い。気にする必要は無いよ。奴はシュウジを狙わなかった。それが全てだ」

そうだ。俺はシュウジの死を願わなかった。現状ではそれだけが救いだ。

「そっか。ならいいんだけど」

リリカは俺の言葉に納得して安心していた。彼女が俺に全幅の信頼を寄せているのは確かだ。それは誇らしい。

しかしその敬意は俺の恋慕と交差することは無い。

そしてリリカはその日には退院して、数日後の夜には、再び魔装少女として学校の屋上に立ち、祠の方向を睨んでいた。

俺は研究室から無線でリリカに声を掛ける。

「……リリカ。問題無いか？」

「うん。ドラグーンも両手に換装してもらったしね。脚部の魔法陣スラストーによる跳躍もより長く作動するようになった。これだけ強化してもらえれば怖いもの無しだよ」

実際魔装少女リリカの総魔力量は、アルファ撃退時よりかなり上昇していた。その上昇率は単なる経験による成長では片付けられない。

俺はその理由を推測していたが、とてもリリカには言えなかった。

どちらにせよ、彼女がより魔装少女として力を得たのは事実なのだ。それは喜ばしく思うしかない。

しかし俺が心配したのは戦力的な問題ではない。俺が言うのもなんだが、リリカの精神面が不安だった。そんな俺の気持ちを感じたようにリリカが言う。

「……この前はさ、やっぱりジンが助けに来てくれたんだね」

という設定になっている。

「……当然じゃないか」

どの口がそう言うのだと自嘲するしかない。

「あたしね、絶対ジンが来てくれるって思ってたから耐えられたんだよ」

それこそリリカは自虐的に笑った。

「はしたないところ見られちゃっただろうけどね」

リリカは自分が魔装悪鬼に犯されたことを俺に目撃されたと察していた。勿論目撃どころか俺が張本人なのだが。

しかしこの数日間、それをどちらも話題には上げなかった。

俺が何も言えずにいるとリリカは言葉を続ける。

「あいつに好き勝手されてる時、すごく悔しかった。ただの痛みや苦しみ以外を感じてしまった自分が恥ずかしくて仕方なかった」

リリカはそこで一旦言葉を区切ると、弱い自分を振り払おうとする強さを見せた。

「でもあたし、ちゃんと前に進むから」

彼女は強く凛々しい。しかし完璧な超人などではない。どこにでもいる女の子だ。今もバイタルの数値は不安と緊張を示している。

しかしそれでも前に進もうという気持ちを見せつける。愛する人を守りたいという気持ちを俺にこれでもかと突き付ける。

「ジンが見てる前でさ、尻尾を巻く姿なんて見せられないでしょ？」

彼女は気丈にも姉貴分ぶった快活な笑みを浮かべた。俺もその気持ちに応えたくて軽口を返す。

「ああ。それにリリカのはしたない姿なんて見慣れてるよ」

「魔装少女をこんなデザインにしたのはジンでしょ！」

リリカがムキになって反論すると、俺達は声を上げて笑い合った。

そしてリリカが静かに言う。

「……ありがと。ジン。大分落ち着いたよ」

リリカがそう言うと同時に、祠の方から魔力の発生を感じる。流星に『企業』の仕事は精度が高い。試算されていた時間とほぼ誤差が無い。

祠はシュウジを祟り殺すまで祟りを受肉させて差し向ける。

ならば祠を壊すのが手っ取り早いが、しかし今の祠は呪力に満ち溢れている。水が満タンのコップと一緒だ。迂闊に手は出せない。しかし呪いが受肉する度にコップの水が揮発して減っていく、それに伴い祠の強度も弱体化する。

祠を破壊するタイミングは、何体かの祟りを撃退した後が望ましい。『企業』もそう判断している。

「リリカ。来るぞ。迎撃準備を整えろ。今より二体目の祟りをベータと呼称する」

「了解。ベータを視認。巨大な蠅のように見える。飛行速度はアルファほど速くはない。でもこ

れ……」

ブブ、という強烈な羽音と共に通信に乱れが入る。

「リリカ？」

「……ジ……こえる？」

「ダメだ。聞こえない。リリカ。聞こえるか？ おそらくベータの羽音は強烈なジャミングを発生させている。電波だけでなく魔力の感知も障害を起こすだろうから気をつけろ！」

「……解！」

なんとか最後の指示だけは伝わったようだった。しかしこうなると俺にできることは何もない。

途端に無力感が肩に押し掛かる。俺も魔装悪鬼となって出陣するか？

ダメだ。あの負の感情の増幅をコントロールできとは思えない。またリリカを犯してしまうかもしれない。

頭の奥から声をする。俺に巢食う鬼の声。

『犯したいんだろ？』

それは紛れもなく自分の声だった。

「違っっ！」

俺はその声を振り払うように手を振った。するとリリカの鞆を弾き飛ばしてしまう。

悪夢にうなされたかのように、一瞬で汗をびっしょりと掻いた。鞆から飛び散った中身を、俺

は情けない気持ちで拾い集めた。

「俺は、あくまでシュウジを守りたくて……それでリリカと一緒に……」

自分に言い聞かせるように化粧道具やら手帳やらを拾い上げていく。その中に可愛らしい装丁のノートが開いて落ちていた。手に取ると視線が吸い込まれるようにその文字列を読み込んでしまふ。

それはリリカとシュウジの交換日記だった。どうやら退院直後のこの数日で続けていたらしい。

口に出すのも憚られるほど、甘い言葉を交わしあっていた。砂糖でできたインクを使ったペンでも使っているのだろうか。読んでいるだけで胸やけがしそうだ。

俺の前では昔から変わらぬざっくばらんとした調子で会話を交わしながら、俺の知らないところで愛を囁き合っていたのだ。

目を覆いたくなるが、特にリリカから積極的に「いつも元気な長谷君が大好き」「長谷君のことを考えると眠れないくらい好き」といった言葉を羅列している。

その中に、「長谷君のためなら、どんな辛い試練でも乗り越えられる」とも綴られていた。恋人との交換日記なのだ。俺の名前が出てくるはずもない。

しかし無視されたかのように感じた俺の胸は、ジェラシーで焦げ付きそうになった。

そして極めつきは、明日デートの約束を交わしている一文を見つけたこと。

リリカはそれを糧に、恐怖に打ち克っている。彼女が見据えている未来の隣に俺は居ない。俺

の見たことのない笑顔や声色を、明日シユウジが独り占めする。

『お前のモノにしてやれ』

あんな目に遭っても、気丈に戦う彼女を改めて美しいと思った。そんな彼女の心の拠り所の一番が自分でないことが胸を締め付ける。

『「企業」は魔装悪鬼の研究も望んでいるんだろう？ 丁度良い実践機会じゃないか』

鬼は免罪符も用意して俺を誘惑する。

リリカの柔肉による甘美な感触が、鮮明な記憶として蘇る。張り詰めた美乳にウネウネと締め付ける蜜壺。腰を振れば切なそうに漏れる喘ぎ声。

彼女が欲しい。彼女を手に入れたい。彼女の特別になりたい。そんな欲望が、俺の視線を再び魔装少女変身用の電極パッドに向ける。

魔装悪鬼に陵辱された精神ショックはリリカを痛めつけはしたが、それ以上に彼女の心の強度を高めた。

(もう二度と負けない！)

折れた骨がより太くなるように、彼女の胸に秘める炎はより颯然と燃え上がっていた。

ベータはアルファのような飛行速度を有しなかったが、それでも常人では目にも留まらない速度で彼女の周囲を飛び回る。隙あらばその牙を彼女に突き立てようとしている。

しかしリリカに恐れはない。あれほどの敗北を喫した後なのに、妙に落ち着いている自分が不

思議だった。ただの精神的成長だけでは説明できないような魔力の充実感。

リリカは脚部のスラスターを発動させると、宙空を蹴って稲光のように夜空を縦横無尽に駆け巡った。

たった二度三度の跳躍でガス欠を起こしたアルファ戦が嘘のように彼女は空を支配し続ける。

悠々とベータの背後を取ると、新たに左手にも換装されたドラグーンを撃ち込む。閃光の如きバイルバンカーは、いとも容易くベータを貫通して爆散させた。

(威力、そして充填とリロード速度も向上してる？)

リリカがあまりの自己の強化に驚きを隠せないでいると、爆散したベータは肉片一つ一つが小さな分身と変化する。小蠅の群体となりリリカを襲う。

しかしリリカに焦燥は無い。

「こっちはねえっ！ 明日初デートなんだからあっ！」

リリカは両手を前に差し出すと、それぞれのドラグーンを同時に発動させた。左右のバイルバンカーの先端を自身の前で交差させるように激突させる。超高速で衝突した魔力の杭が火花を散らす。それは指向性を持った爆発を引き起こした。

前方広範囲爆破術式ボルケーノ。

夜空に咲いた巨大な花弁のような爆発は、ベータの群体を纏めて消失させた。

(流石ジン。新技も計算通りね)

ジンの考案もさることながら、リリカの精密なドラグーンの扱いが無ければ成立しない大技で

あった。ほんの僅かな角度や魔力量の誤差で自爆もあり得る。

ベータの完全な沈黙を確認すると、リリカは通信を試みる。

「こちら魔装少女リリカ。ベータの撃破を確認……ダメだ。まだジャミングの影響が残ってる」
無線はノイズで役に立たないままだった。周囲の魔力もろくに感知できない。

「……これは」

しかしその禍々しい存在感はジャミングでも隠しきれない。

ベータの撃破で安堵したリリカの表情が一瞬で険しくなる。彼女は運動場に降り立つと、いつの間にかそこに立っていたそれと向かい合う。

全身をどこか生物感漂わせる黒い甲冑で覆った鬼。

「魔装悪鬼。この前の借りは返させてもらおうわよ」

リリカに恐れはない。自分は強くなった。今度は勝てる。

魔装悪鬼は空中で撒き散らかしたコールタールのようなベータの残骸を、雨を飲むように口で受け取りその力を身に取り込んでいく。

翼を生やすと、羽を微細動させて不快な羽音を鳴らす。校舎の窓ガラスが粉々に割れるほどの振動波。リリカは一瞬怯んで顔を苦痛に歪めた。

魔装悪鬼はその一瞬を見逃さない。先日と同様に弾丸めいた突進でリリカを襲う。

しかし稲妻のような機動性を手に入れたリリカはそれを難なく回避した。タックルをいなすように上空に飛び立った彼女は、両手を地面に向けて差し出す。

「同じ手で来るなんて、随分と舐められたものねっ!」

リリカがボルケーノを発動すると同時に、魔装悪鬼はリリカを見上げ、そして口を開いた。その中から凝縮された振動波が放たれる。

二つの魔力が正面から激突すると、大型車が正面衝突したかのような音と振動で地面が揺れた。その衝撃で運動場の土埃が屋上を覆うまでに立ち込めた。

（相殺された? でも戦える。互角以上にやれてる!）

空中に浮かんだまま戦意を高揚させるリリカのもとに、魔装悪鬼が土煙の中から突進してくる。しかしリリカはそれをも余裕で回避した。

リリカはスラストでホバリングし、魔装悪鬼は羽ばたいて静止している。空中で対峙する二人の様子を、そう遠くない場所に停車していた高級車の中から眺める者が居た。

花鳥院シランがワインを薄い唇に運ぶと、退屈な余興に目を細めながら言った。

「軽装ならではの小回りが利く機動性が売りの丙種魔装少女。その機敏な動きは確かに目を見張るものがあるわ。そしてなにより守りたい者のためなら命を矛にできる心の強さ。想いの強さは魔力に直結する。しかし……」

魔装悪鬼が再び口を開けて振動波を放とうとする。聡明なリリカは瞬時に最適解を導く。

（ボルケーノはまだ撃てない。リロード時間は向こうのが上。でも威力はこっちのが微かに上回っている。相手の装甲は明らかに破損している。今のあたしなら回避は余裕。避けた後にドラグーンかボルケーノをぶち込むっ!）

一瞬でそこまで判断すると、リリカは『それ』に気づいて青ざめた。
花鳥院シランがワインを揺らす。

「……その想いが仇になったようね。それにしても、ふふ。柳楽ジン。理性が半分以上失われるといってもその狡猾さ。わたくし以上の性悪ね。もしくは鬼を逆に呑み込もうとしているのかしら」

リリカの背後に立ち並ぶ住宅街。つまり魔装悪鬼が放とうとしている衝撃波の射線に、長谷シュウジの家が存在する。

（偶然？ それともやっぱりこいつも長谷君を狙っている？ どちらにせよ避けられない。あたしが受け止めるしかないっ！）

周囲になるべく影響が出ないように、『企業』が様々な手回しをしてくれていることは重々承知だが、あの激しい振動波に耐えきれほどの結果を用意してある確信は持てなかった。

魔装悪鬼が上げる咆哮が生み出す衝撃に対して、リリカは魔力の充填が間に合わない両手を前に差し出した。

「明日は晴れそうだな」

シュウジはバルコニーに続くガラス戸に片手をついて、満天の星空を見上げていた。

絶好のデート日和を期待したのだろう。その頬は幸せそうに緩んでいた。

『企業』の仕事は完璧で、シュウジの眼に映るバルコニーの景色は平穏そのものだ。家屋全体

を覆う結界によって、外部からの音と衝撃も全て遮断されている。

とはいえやはり魔装悪鬼の攻撃に耐えるほどの強度は無く、リリカの判断は正解だったと言える。

そのガラス戸一枚を挟んで、明日のデートの相手であるリリカが、空から落下してきてもシュウジにとっては平穏な夜でしかない。

両手の兵装と上半身の魔装は全て弾け飛んでいた。黒のショーツと足のスラスタ―だけが残っている。

続いて俺がバルコニーに降り立ち、暫くシュウジの姿を睨む。

俺とリリカがこんな苦しい思いをしてお前を守ろうとしてきたのに、お前はそうやってのうとリリカを俺から横取りした。

逆恨みでしかない。

頭では理解している。しかし魔装悪鬼変身による負の感情の暴走が抑えきれない。この世の全てを恨みなくなるほどの憎悪に包まれる。

戦う手段を失ったリリカがよろつきながら立ち上がると、俺の前に立ちふさがるように両手を広げた。

立っているのがやつのように、膝はカクカクと笑っているが、その目つきはシュウジには一切指を触れさせないという気迫を感じる。

そんなにシュウジが良いのか。

俺じゃダメなのか。

こんなに好きなのに。

神童と謳われた俺の才覚を残すに値する女だと惚れこんだのに。

文字通り俺の男根が怒張する。怒りでビキビキと張り詰める。

俺はリリカの肩を軽く押すと、彼女はそのままガラス戸に背中を預けながら尻もちをついた。

その衝撃も音も、『企業』の隠蔽魔術によってシュウジには届かない。

シュウジは片手をガラス戸に当てたまま、もう片方の手で携帯を弄りだした。おそらく明日の天気や、デートスポットでも確認しているのだろう。

そんな彼と顔を合わせる俺を、立ち上がる力すら失っているリリカが見上げる。その視線からは自分はどうなっても良いからシュウジを見逃してあげて欲しいという懇願を感じた。

俺はいきり立った男根を彼女の眼前に押し出すと、両手で彼女の側頭部を挟むように掴んだ。

リリカは魔装悪鬼の行動原理など想像すら及ばない。

しかしまさに目と鼻の先でビキビキと青筋を立てる男根と、一旦暴れることを保留しているこの状況から想定される、自分に求められている交換条件は明白だった。

リリカは無念で胸を痛めながらも、背に腹は代えられないと瞼を閉じ、そして逆に口を開いた。

その唇を性器に見立て、俺は肉の穂先をゆっくりと挿し込んだ。瑞々しい唇を滑って男根が半分ほど彼女の口腔内に侵入する。臆とはまた違う生暖かさ。そして征服感が俺を天に昇らせる。

普段俺と会話を交わすあの口が、シュウジと恋を囁き合ったあの口が、俺の男性器を咥えこんでいる。

それは彼女にとっては筆舌に尽くしがたい屈辱だろう。

しかしガラス戸一枚を挟んだ、背後の恋人を守るために、自らを性欲の捌け口として捧げたりリカは凛々しくすら感じた。

そんなリリカとの明日のデートを待ちきれない親友の前で、俺は腰を振った。無造作に、粗雑に、リリカの口を犯した。

彼女の唇はグボツ、グボツ、と卑猥な音を鳴らし、やがて涎を顎から首元へ垂れ流しにした。

時折亀頭が喉元を刺してしまい、その度に彼女は険しい表情と共にえすきそうになっていたが、精神力だけで耐えていた。

途中から涙を流していたのは、その生理的反射の所為だろうが、その透明な液体はとても高潔に思えて、俺は益々乱暴に彼女の口をシュウジの前で犯した。

グボツ、グボツ、グボツ！

射精感がこみ上げると、俺は能天気携帯でデートスポットでも調べているであろうシュウジを眺めながらリリカの口で果てた。その際には両手でより強く彼女の側頭部を掴み、ぐつと亀頭を喉奥に押し込んだ。

ドク、ドク、と直接喉に注がれる精液を、彼女はそのままゴクゴクと喉を鳴らして嚥下していた。顔を離そうにも俺に掴まれていたので、無理矢理の飲精だった。

リリカはそんな苦痛の最中も、魔装悪鬼である俺を睨み上げていた。そっちの要求は呑んだのだから、わかっているな？　と言わんばかりの力強さだった。

この期に及んでもシュウジは絶対に守りたいという気持ち俺を昂らせる。

俺はリリカを無理矢理立ち上がらせると反転させて、腰を持ち上げると立ちバックの体勢を取らせる。

シュウジとは箇所こそずれているが、彼女は肘ごと両手をガラス戸についた。

俺は今にも崩れ落ちそうなりリリカの腰を両手でしつかり掴みあげ、ショーツの切れ目に亀頭を差し入れる。その肉槍の穂先は獲物を前にした野犬のように、だらしなく我慢汁を涎代わりに垂らせていた。

竿自身もぬめりのような粘液を全体にうつすら分泌させている。その二つの要素が挿入を容易くさせた。

切れ目の入った黒いレースのショーツと陰唇を掻き分け、ビキビキとけたたましく筋肉の軋みを上げ続けていた男根を根本まで一気に挿入した。

まだまだ男に不慣れな膣口には規格外なほど遅い形状の男性器だが、たっぷりとした潤滑油により、にゅぷり、と卑猥な音を立てて唇が雄を咥えこむ。

戦闘ダメージによりリリカの身体が強張る余裕が無いことも奏功しているだろう。

「んんっ」

シュウジの目の前で、リリカを貫いた。それでも俺達に気づくことはない。

リリカもそれを理解しているが、まさに眼前で犯される羞恥には顔を俯かせた。

「……お願い……やめて」

そう懇願するリリカの前髪を左手で掴み上げる。携帯の画面を見つめて明日のデートを感慨深そうに待ち望むシュウジの顔を無理矢理見上げさせた。

恥辱の極致ともいえるリリカの眼差しも、幸運にも恋人には届かない。

力で全てを勝ち得た充足感が、彼女の中で雄々しくそそり立つ男根から我慢汁をドロドロと垂らす。

俺が激しく腰を打ち付ける。バンバンバンッ、と乾いた音が軽快に鳴り続ける。それに伴い我慢汁が膣壁に塗りとくられる。

「ぐっ……うう」

リリカの呻きからは苦痛は感じられない。全身のダメージでそれどころではないのだろう。しかし激しい屈辱を感じる。とはいえそれは単純に犯されていることに対してではなく、また別の理由で彼女は恥じている。

催淫効果が認められる魔装悪鬼の精液を胃に注がれたことにより、リリカの全身は瞬く間に火照りと疼きを与えられる。

肉槍が抜き差しする度にリリカの爪先はピンと伸びていき、結合部はグチュグチュと蜜を垂らして男根の往來を悦ぶように鳴いた。

そしてリリカの口からは、「やっ、あっ……はあっ、あっ」と蕩けだした吐息が漏れる。二度

目の交接にして俺の男根で、身体が悦んでしまっていることに彼女は奥歯が軋むほどの屈辱を抱いているのだ。

「……くそっ……くそおっ……」

その全てがシュウジには届かない。彼の目にはバルコニーになんの異常も見当たらない。

俺のピストンを受ける度に、目の前でまだ見ぬ豊かな乳房がブルンブルンと派手に揺れているのに。

俺のピストンを受ける度に、内腿から愛液を垂らすほど肉壺を蜜で溢れさせているのに。

俺のピストンを受ける度に、表情を蕩けさせながらも、よがり声を我慢するために奥歯をギリギリと噛みしめているのに。

俺がこんなにリリカを愛しているのに、お前は何も知らない。

「やっだっ、こんなのっ、長谷君、お願いっ、見ないで……あたしっ、あたしっ……あっいつ、いやっ、いやっ……いやいやいや……あっ、あっ♡」

リリカの口から堪らずといった様子で嬌声が漏れる。リリカは恥辱で俯くが前髪を掴んでシュウジに見せつけるよう引つ張り上げる。

そして蕩けた顔を彼氏に見てもらえと言わんばかりに激しく突く。

奥歯が碎けそうなほどに食いしばっていた口がついに溶けた。

「あっあっ♡ だめっ、そんなっ、あっんっ、あんっあんっ♡ 長谷君、違うのっ、こんなのっ、違うっ、あっいつ♡ あっあっ、いいっ♡ 長谷っ、君っ♡ いっいつ♡ ちんぽっ、

おっきっ♡」

リリカはぶるぶると震える右手を、指を這わすようにしてシュウジの手へと向かわせた。

そしてガラス戸一枚を隔てて、シュウジと手の平を重ねると、いじらしい声音で言う。



「……あたしのこんな声、長谷君に聞かせないで……」
そんなことを言わずに聞かせてやれと腰を振る。

「あつ、あつ、あつ、あつ♡」

俺達三人はいつも一緒だった。ただでさえ今は付き合ってもいるんだから、よがる声を事前に教えておいてやれとまで思った。あまりに粗暴で下品な感情に自分で驚く。

それでもリリカの心は穢れない。

「……あたし、長谷君のためなら、どんな目に遭っても平気だから……だから、だから……」

リリカの長谷への想いが、魔装悪鬼と化した俺の嫉妬を尋常でないほど煽り立てる。

俺は怒り狂ったように腰を叩きつけた。

バアンツッ！ バアンツッ！ バアンツッ！

「ああつ、ぐっ♡ ひいつひいつ、あつひつ♡ ひい、ひい……いっ♡ いっ♡ ひっ♡ ひっ♡」

絶叫めいた喘ぎ声を上げながらも、その合間合間でシュウジに掛ける声色は、普段の姉貴分面した、凛々しいリリカのそれだった。

「……このおちんちん、ちよつとばかり手強いんだけどさ……でも心配しないでね……あいつ♡
いっ♡いっ♡……大きくて、硬くて、熱くて……すぐおまんこジンジンしちゃうけど……でも、でも……ひいつ、いん♡ あつあつあつ♡ ひっ、ん♡ こ、こんなの、どうってことないからさ……ずっと長谷君のこと考えてるから……長谷君が大好きって気持ちは、いつも消えないから」

リリカはそう言い切ると、指を切なそうに曲げて、シュウジと指を絡めて握りたそうにした。しかし一枚のガラスに阻まれて、それは叶わない。

「ああっ♡ やだっ、おちんちん、そんなところにキスしないでっ……♡」

龟头がリリカの奥底で、肉厚の輪のようなものをググッと持ち上げる。

「そこ、長谷君と赤ちゃん作るとこなんだってばあっ！」

その切羽詰まった言葉と、明日のデートに想いを寄せる親友の顔で、俺の肉棒は絶頂に震えた。

ビュルッビュルッ！ ビュルルルッ！

リリカの華奢な背中が、精の放出を受け取ると強張るように反り返った。

「あっ♡」

子宮口に龟头を押し付けられ、注がれた精液を一言でそう評すると、彼女の腰がガクガクと震える。

「あっあっ、イクっ……イクイクイっちゃうっ♡ ザーメン濃すぎておまんこ溶けるっ♡♡♡」

シュウジの目の前で、リリカをアクメさせた。それは余計に射精欲を煽り立て、リリカの狭い蜜壺の中でドクドクと精液を吐き出し続ける。リリカはそれに呼応するように腰をビクビクと上下に揺らした。

「あーあ。早く明日にならねーかなあ。リリカとのデート待ち遠しいなあ」

俺とリリカが激しい絶頂の余韻を共有していると、シュウジはガラス戸にカーテンを引いて俺

達の視界から消えた。

俺はリリカの前髪から手を離すと、彼女を嘲笑うかのように、そして同時に慰めるかのように腰を振った。

射精を終えた陰茎はこれっぽっちも硬度を失っていない。

ズボッズボッズボッズボッ！

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ♡」

大丈夫。リリカには俺が居るよと言わんばかりに彼女を剛直で愛でる。彼女の膣壺はすっかり俺のデカマラの味を覚え、ウネウネと絡みつくように肉竿を悦ばせてくれる。

腰を引く度に陰唇が吸い付き、泡立つ膣壁がずぼずぼと淫らな摩擦音を奏でる。

しかし俺はシュウジが姿を消した直後から、リリカに対して微かな違和感を抱いていた。一瞬の意気消沈の後、覚悟を決めるように綺麗な肩甲骨がきゅっと狭まった。

そこまではまだわかる。愛する男の姿が見えなくなったからといって、戦意を喪失するような情けない女ではない。引かかる点はそこではない。

明らかにリリカの方から腰を押し付け、あまつさえ僅かにだが腰を振っているようにも見えるのだ。

確かに魔装悪鬼の体液による催淫はかなり効果が著しいものと推測される。

しかしそれは快楽に流されただけの浅ましい雌の求愛には見えなかった。むしろ気高さと決意を秘めた戦士の覚悟を感じた。

俺の脳裏によぎるのは、先日初めて犯した時に、射精を受け止めた直後に放たれたドラグーンによる不意打ち。

そしてリリカが今日見せた、不可解なほどの性能上昇。

半理性性を失った俺でも彼女の狙いに気が付く。リリカは俺の研究室の書物かなにかで、精液には魔力が宿っていることを知っていたのだ。

本来ならばそれは雀の涙程度の話だ。食後のコーヒー程度の効果しかない。

しかし魔装悪鬼という種の精液が特別なのか、それとも魔装少女と魔装悪鬼の組み合わせが相乗効果を生み出すのか、とにかく今の俺に中出しされるとリリカは飛躍的に性能を向上させる。

勿論今この場で兵装を自力で復元させて、戦闘を再開するほどの回復は見込めないだろう。それはリリカもわかっている。

ただし明日はどうなっているかはわからない。魔装悪鬼を蹂躪するほどの力を得ているかもしれない。少しでもより良い未来を選択するために、リリカは敗北感と嫌悪感を押し殺して、憎き敵に柔肌を差し出しているのだ。

ああ、リリカ。なんて強かで敏い女なんだ。益々彼女で俺の遺伝子を残したくなる。

「あいつ、いっついつ♡ そこっ、そこっ、だめっ、弱いっ♡」

その甘い音色が、俺の射精を誘う演技ではないのは明らかだった。屈辱の選択を苦汁を舐めるように受け入れながらも、ただただ剛直に蕩けている。

「奥にっ、ちんぽっ、届くのやだっ♡ ああっ………それっ、それっ♡ やっあっ、ズコズコ

来るっ♡ 強いおちんぽがっ、奥までズコズコ来るとっ、おまんこ我慢できなくなるっ♡」

リリカの桃尻と肉付きの良い太ももがヒクつき出す。同時に男根も射精感で膨張した。

「イクっ、イクっ、イクイクイク♡」

リリカの背中が反り返り、その桃尻が余計に突き上がると、精液が尿道を駆けあがって行った。

その刹那、俺の思考回路は喧々諤々の議論を呈した。

魔装少女の生みの親としては、このまま彼女を強化させることになんの異論も無い。なにより惚れた女に中出しできるという至高の悦びを得られる。

魔を装った悪鬼である俺の心が揺れる。

シュウジを友として守りたい気持ち。失恋を認めリリカを素直に祝福したい気持ち。

そしてそんな二人の間を結ぶ赤い糸を、強引にかっさりいたい気持ち。

そんな気持ちで俺の中で水と油のように弾いては混ざろうとする。

更には俺の中に巣食う悪鬼が、矛盾した誘惑を囁く。

「このままリリカの中にたっぷり射精したいだろ？」

「これ以上リリカを強くしてしまったら力づくで犯せなくなるかもしれないぞ？」

俺は腰を引くと、リリカの後頭部から背中、そして臀部や太ももに精液を放出した。

「んっ、くっ♡ はあっあっ♡」

リリカはその熱い雄汁を背面全てで受け止めながらアクメしつつも、その嬌声には悔しさを滲

ませた。目論見を外された彼女の両手の指が、ガラス戸を引っ掻くように爪を立てる。

この期に及んで健気な強さを見せつける彼女に、俺は更に肉槍をビキビキと反り返らせた。

彼女の強くなりたい、もう負けたくない、大切な人を守りたいという気持ちを叶えてあげたい気持ちと、彼女を力づくで屈服させて、その最奥で身勝手に射精したいという気持ちが同時に沸き立つ。

先程取り入れたベータの異能には、羽音による振動やジャミングだけでなく、彼女には使用されなかったものがあつた。

それは酸性の溶解液。

俺はそれを素に自身の体内で別種の異能に作りかえた。

ショーツの切れ目はアナルまで届いている。指でショーツを左右に開くと、皺一つ無い薄桃色でさえある菊門が顔を出した。

口元から垂れる涎にそれを混ぜると、リリカのアナルに滴らせる。たつぷりとローションのように垂らしたそれは、少しづつだがリリカの肛門から直腸へと浸透していく。

それはバクテリアのように腸内にある不純物、つまりは排泄物を取り込んで唾液そのままである透明の粘液に変える。

同時に腸壁を熱く疼かせ、肛門を弛緩させもした。

自身の目論見を外されたリリカは俺を挑発する。

「……あたしが怖くて中出しできないの？ 明日にはもっと強くなってるあたしが怖いんで

しょ？」

リリカはそう啖呵を切ってから、己の肛門に異変が起きたことを知る。

明らかにじんわりと火照った菊門が、ヒクヒクと物欲しそうに律動した。

とはいえリリカはそこを性的な器官とは認識していない。ただもどかしそうに腰を振った。

俺は彼女の願いを叶えるため、そして自身の衝動を叶えるため、龟头をその無垢な肉穴に押し付ける。

直腸による精液の魔力吸収率は、子宮のそれに比べて遥かに落ちる。強大なパワーアップには繋がらない。

龟头がむにゅりとその肉の輪を押し広げると、リリカは不意を突かれたように身体を強張らせた。

「……ちよつと待って……嘘でしょ」

特製の唾液によつてすっかり弛緩しほぐれた肛門は、むにゅりと極太の龟头を呑み込んでいく。

「ひっ……」

もつと太いカリの部分をずぶりと呑み込むと、流石のリリカも不安で声を震わせた。

「……っぐう……冗談、やめてよ……」

そのままゆつくりと腰を進める。

あれだけ狭そうだった排泄を目的とする肉穴が、剛直をずっぱり啜えこんで広がっている。

リリカの背中に汗がぶわっと浮かんだ。肛門で男性器を咥えさせられた彼女は、これまで以上の屈辱と敗北感を味わっているようだった。

彼女は肘をついたガラス戸を、肘を支点として拳で力無くダンダンと何度か助けを求めるように叩いた。

「……長谷君……助けて……」

肉竿が六割ほど埋没すると、リリカは自ら顔を上げて、カーテンが閉められたガラス戸を見つめる。

「……お尻の穴、おまんこにされちゃう……」

八割挿入を完了する。

「……やだ……やだあ……挿入^{はい}ってくる……お尻の穴、すごく広がって……ああ……つぐう……つく……はっ、はっ……んっ、はあっ、あっ」

そして腰を密着させて、根本まで肛門への挿入を完了させる。

リリカは暫くの間、まるで犬の呼吸のように浅い息遣いを続けた。

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

やがてそれを呑み込むと、心底申し訳なさそうに口にした。

「……長谷君ごめん……あたしの肛門、こいつのおちんちん気持ち良くするための穴にされちゃった……」

あれだけ恋い焦がれたリリカの肛門に、男根を全て挿し込んだ俺の胸に去来したのは、失恋の

苦みを完全に癒す万能感と征服感。

俺はゆっくりと腰を振る。特製の唾液によって完璧に洗浄された彼女の腸内は、完全なる性器と化している。膣とはまた違う温もりに包まれた。

なにより抜き差しする時の肛門の強烈な吸い付きといったら、膣のそれとは全く比較にならない。

膣のように全体で抱擁してくるのではなく、肛門部分だけが食いついてくるような挿入感。

ぬぶっ、ぬぶっ、ぬぶっ、という独特の交接音に、リリカは肩を強張らせていた。

「嫌……嫌だよ……そんなところ、出たり入ったり……気持ち悪い……」

しかしゆっくりと抽送を続け、カリで肛門を捲っては押し込むことを続けると、徐々に彼女の吐息に桃色が混じり始めた。

「はあっ、はっ……んっ♡」

その頃合いを見計らって、トントンと腰を振る。

「あっ、あっ、あっ、あっ♡」

ズボズボと肉角が肛門を犯す度に、リリカは困惑が入り混じった嬌声を上げる。

「もうやめて……許して……これ以上あたしの肛門でセックスしないで……」

生殖器官以外での性交に強い罪の意識を感じていることが伝わる。

「強いちゃんぽにジンジン痺れちゃってる……こんなのもう、おまんこだよ……」

その背徳が、甘い果実となって彼女の全身を恍惚に誘う。

「あっあっ♡ だめっ、きもちっ♡ お尻、ちんぽで捲れるのっ♡ あっいつ♡ いやっ、やっ、やだよっ、お尻でイキたくないっ、こんなのっ、こんなっ、あっあっいつ♡ いっああっ♡」

リリカの膝がガクガクと揺れる。彼女の顔の真下がびちゃびちゃと濡れているのは、彼女の口元から垂れている涎だろう。

「だめっ、だめっ、だめっ♡ まんこになるっ♡ 深いカリで肛門が捲られる度に、おちんちんで気持ち良くなるおまんこになってるっ♡ 勃起ちんぽ気持ち良くなってもらうための、エッチ用の穴になっちゃってる♡ やっあっあっ♡ イクっ、イクっ♡ きもちっ♡ あっ♡ 大きいっ♡ 嘘っ、やだっ、やだっ……ああだめっ、イックうっ♡♡♡」

自らの剛直でずっぽりと押し広げた肛門の中で、ドクンドクンと精液を注入していく。

本来の生殖とは全く関係の無い肉穴によって行われる射精は、雌を支配するという繁殖とはまた別の雄の本懐で幸せに満たされた。

「あっ……♡ はあ……♡ あっ、うう……」

俺が両手を離すと、彼女は崩れ落ちるようにその場に腰を下ろした。その際に彼女のアナルから俺の巨根がずるりと抜け落ちると、その瞬間だけぽっかりと空いたアナルはきゅうつと締まり、そしてヒクつきながら精液の塊をどろりと垂れ流した。

俺は翼を広げて夜空に旅立ち、暫くリリカの頭上を舞いながら彼女を見下ろしていた。

彼女は立ち上がる気力も無さそうにぺたりと座り込んでいたが、その不屈の瞳だけが俺をじつ

と見上げていた。いつか必ず借りは返すという意志だけが俺に届く。

そして『企業』の人間が彼女を保護に向かうまで、彼女は恋人の家のバルコニーで、膝と肛門両方から俺の精液を垂れ流し続けていた。

三話 初デートは初めての合意エッチの後で

窓から差し込む朝日は実に晴れ晴れしく燦々と輝いている。絶好のデート日和だった。それも長年密かに思い続けた二人の初デートとあって、空が祝福してくれているとしか思えないほどの青空が広がっている。

しかしリリカの目覚めはどことなく重苦しい。相手が気づいていないとはいえ、その初デートの相手の前で辱めを受けたのだ。

普通ならば一生モノのトラウマだが、それでも彼女がベッドから立ち上がったのは、自分が身を投じた戦いは命を賭したものだ又何年も自覚して備えていたから。

恋人を守れて、自身の五体も無事。ならばこれ以上求める戦果はない。

その覚悟は決めていた。

「……それでもヒリヒリするんだってば」

リリカは眉間をしかめて独り言ちると、一晚経ってもまだなにか挟まっているかのような異物感を有する臀部に手を添える。

それにしても、とリリカは訝しむ。魔装悪鬼はなにが目的なのだろうか。

彼女は頭を振ってその疑問を振り払う。自分が集中すべきなのは、恋人に害を与えようとする存在を排除すること。それ以外のことはジンや『企業』が対応してくれる。特にジンに対する信望は厚い。

カーテンを開けて陽光を全身に浴びて背伸びをすると、勢い良く自身の頬を両手で叩いた。

「さ、今日は女の戦いだ。気合入れないと。何日も悩んで悩みぬいて決めた服だからね。化粧もばっちり決めないと。それで『可愛いね』の一言も無かったりしてみろ長谷君め」

スイッチのオンオフのように、そんな簡単に気持ち切り替えることはできない。しかしつまでもふさぎ込んでいても仕方がない。こんな苦境だからこそ無理矢理にでも顔を上げてにっこりと笑った。リリカはもう一度頬を叩いた。

なにより長谷シュウジとの初デートを心より楽しみにしていたのは事実なのだ。

そんなことを考えていると、その長谷シュウジからメッセージが届いた。

「今日デートだけど、遅刻するなよな？」

その文面にリリカはごく自然に笑った。

「いつも遅刻するのは長谷君でしようが！」

そう。いつも三人で待ち合わせして、彼が来るのをジンと二人で待っていた。

デート関係無く二人での待ち合わせ自体が初めてかもしれない。

今日、そこにもう一人の大切な友人が居ないことに罪の意識を覚えた。恋人の言いつけを守ってまだ交際していることは秘密だ。それだけがどうしても少し後ろめたい。

昔からの関係だから、今更交際しているのを知られるのが気恥ずかしいという気持ちもわからないでもない。しかし長谷シュウジがそこまでデリカシーのある男かと問われるとリリカは首を傾げる。

（なら何故？ 誰かに気を使っている？ 例えば近しい人……ジンが自分を好きだった？）

「そんなわけじゃない」

リリカは自分の推測を一笑に付した。そのジンからもメールが届いた。

「今日暇？」

「……あゝ、ごめん。出かける用事ある」

「昨日の今日だからな。あまり激しい運動はしないように。でも気晴らしになるようなことならむしろ推奨」

恋人との対照的な文面にリリカはくすりと笑う。

昔から手の掛かるシュウジは弟のようだったのに、今では目を合わすだけで心臓が高鳴る。対してジンについては本当の兄弟同然に落ち着く。

とにかくジンもきつと自分のことは、そんな風に思っているに違いないとリリカは確信していた。ずっと魔装少女の研究に勤しんでいたのだから仕方がないが、浮いた話も聞いたことが無いので、全てが一段落したらジンにお似合いな素敵な友達を紹介してあげようと目論んでいる。

そんなジンから、「用事の前に少しでも家に寄れないかな？ なるべく早めに説明しておきたいことがある」と言われれば、リリカとしてはなんの疑問も無くそれに応じるのだった。

デート直前のリリカは普段の五割増しで輝いていた。ワンピースに七分袖のカーディガンを着込んだ彼女は、俺にとってはもはや妖精のような存在だ。バックルベルトできゅっと締められた

腰回りは、彼女のモデル顔負けのスタイルを強調している。

「いつもと化粧が違う気がする」

「あ、わかる？ 変じゃないかな？」

「……可愛いと思うよ」

俺はリリカを部屋に招きながら言った。とてもじゃないが直視できない。耳たぶまで真っ赤に染まるものだから、俺の気持ちを彼女に悟られないか不安になった。

背後からはリリカに背中を気安く叩かれながら、「あはは。ジンにそう言われると照れちゃうじゃん」と楽しそうな声を受け取る。

しかしこれ以上この話題は踏み込まない。デートなんだ、と言われたら俺の心はガラス細工のように砕け散ってしまう。しかも相手が唯一の男友達とくれば……。

俺がベッドに腰掛け、リリカがクッションに座る。

俺は咳払いをすると、意を決して彼女の目を覗き込む。冗談ではない、という空気を最初から作りこむ。

「リリカも用事があるみたいだから率直に聞く。リリカ。この数日での急激なパワーアップに身は覚えはあるか？」

リリカは一瞬目を真ん丸にして、そして頬を紅潮させると小さく頷いた。

「……前にジンの研究室でちらっと読んだ本に書いてあった。あの……所謂男の人の……その……」

「いや、皆まで言わなくていい。デリケートな話題だ。理解しているならそれでいい」

誠実な態度でそう言う俺に、リリカは心から安堵し、そして俺を信頼しきった目を向ける。それが少し胸に刺さって痛い。

「しかしその推測は当たっていると思う。まあ一言で精液が魔力を上昇させると言ってもそんな単純な話じゃない。例えば精子バンクの精液を女性の膣に注入したら魔力が上昇するかといえば、殆ど効果がない」

疑いようもなく学術的で真摯な話をしているんだという、毅然とした雰囲気で説く。

リリカも若干気恥ずかしそうにしながらも、重要な話だと理解して応答する。

「新鮮さ、とか？」

「それもあるし単純に相性の問題もある。あとはどこで摂取するかでも吸収率が違う。基本的には子宮、直腸、胃の順番で魔力の上昇が見込める。またその効果も一時的であることが殆どだけど、次の成長段階に踏み込む契機というか起爆剤になることもある。今回のリリカはこのケースに当たる」

リリカの頬からはすっかり赤みが消える。まるで保健体育の授業を聞いているかのように真剣だ。俺も茶化した言い方はしない。

「そして最も吸収率を上げるのに重要な要素は、吸収する瞬間に供給側と吸収側が性的に高揚しているか否かにある。それもお互いの肌を通じてだ。それで相性が良くなるんだ。食べ合わせで栄養の吸収率が向上するように。わかるか？ つまり精液によって最も魔力が吸収されやすい

ケースというのは、セックスでお互いがオーガズムに達し、子宮に射精を行った場合となる」
そこでリリカの頬が再び赤くなる。つまり自分が大幅な強化を為したのは、自分も性的な高揚を味わったという事実には他ならないのだ。

俺はそんな彼女を擁護するように補足する。

「ちなみに魔装悪鬼もそうだが、大抵の怪異は女性を催淫する大なり小なりの手段を持っている場合が多い。特に体液だ。だから……その……特別恥じることはない」

俺の言葉に、リリカが照れ臭そうに自虐的な笑みを浮かべた。

「……あはは。フォローありがと」

「とにかく、今のところは魔装悪鬼の狙いは不鮮明極まりない。リリカが五体満足で済んでいるのは幸運としか言いようがない。更には今後は祟りも手強くなってくると試算されている」

「祠の奥深くに沈殿した呪いはより濃密、だったっけ？」

「そうだ。だからその……こんなブライベートに踏み込むようなことは極力聞くべきではないんだが……」

俺は申し訳なさそうに一旦視線を外して、再びリリカに実直な視線を向ける。我ながら大した演技だと自嘲する。益々自分のことが嫌いになる。

「今現在、セックスをするようなパートナーは居るのか？」

リリカは顔を真っ赤にして、左右に振りながら両手をぶんぶん振った。

リリカも嘘はついていない。リリカとシュウジなら、セックスはおろかキスまで何か月掛かる

かわかったものではない。恋人ではあるが、セックスをするようなパートナーではまだないのだ。

だからリリカがその問いを否定するのはわかり切っていた。

「……そうか」

俺は重々しく俯き、暫く無言のままでいた後、無力を痛感している自身を演じながら言った。

「……もしリリカが嫌でなければ、俺が力になりたい」

つまりジンは、自分があたしのセックスパートナーになると提案しているのだ。

あたしはその言葉にそれほど衝撃は受けなかった。というのも彼が抱いているフラストレーションは想像するに容易いからだ。いくら魔装少女の研究はジンが全てを担っているといっても、実戦の場では傍観する他ない。

長谷君とあたしという二人の友人の命が懸かった状況で、ただ見守ることしかできなかったのはさぞ無力感を煽られただろう。

『企業』の内情についてはあたしは殆ど知らない。それでもジンが組織内で非常に優れた評価と厚遇を受けている人材だというのは、状況から簡単に推測できる。

そしてジンはその能力に見合ってプライドも非常に高い。時にはその気質が言動の節々に表れ、不快だと感じる同級生も少なくはなかったようだ。

それでもあたしはそれがジンの向上心の裏返しであると、割と好感すら抱いていた。一見知的

で物静かそうなのに、胸の奥に燃え滾るような野心を抱く彼は傲慢の友人だった。

そんな彼があくまでパートナーであり、そして友人でしかないあたしに、恥も外聞もなくこんな提案をしてくるのは断腸の思いがあつたに違いない。

不埒な考えなど全くの慮外で、あたし達の目的を果たすための『作戦』として提示したのは火を見るよりも明らかだ。

実際今のあたしじゃ力不足なので、なんらかの強化策は急務なのだろう。ジンが言うなら間違いない。

とはいえあたしには長谷君という恋人が居る。ならば長谷君とセックスをすれば丸く収まるのでは、という合理的な発想は感情で却下される。

まずつい先日付き合い始めて、今日初めてのデートなのに、いきなり性交渉まで持っていくのが無理だ。まだ彼の下の名前すら呼べないほどに恋の鼓動は初々しい。こちらから手を繋ぐことを提案することすら困難極まるだろう。

そしてなによりそんな打算を目的として、長谷君とセックスをしたくないと考えてしまふ。

彼とはただただ愛を育みあうために繋がりたい。

青臭く非合理的なワガママかもしれない。それでも命を懸けて戦うほどに恋を募らせてきた長谷君と、不純な理由が付随したまま一つになりたくはない。

その点ジンとはその辺りが非常にクリアだ。互いに長谷君を守るためという不純物無しの理由だけが存在する。なんの他意も無い単なる『作戦』の一環だ。

そもそもジンのことは異性と思ったこともないので、性的なことをするという意識も薄いようだ。なにせ最も信頼できるパートナーであり、友人でもあるのだ。

守るべき純潔などとうに奪われている。それもやはりあたしが弱かったからだ。その屈辱も背中を押した。もう二度とあんな思いはしたくない。

とはいえやはりセックスはセックスだし、なにより今からデートなのだ。

リリカは暫く真面目な表情で思案すると、若干照れ臭そうに、それでいてやはり真剣な議論を交わしているのだという雰囲気崩さないように言った。

「……胃でも吸収できるんだよね？」

「臆や直腸よりは効率が劣るけどね」

リリカが言いづらそうにもごもごしている、俺が彼女の代わりに言葉を続ける。

「……勿論フェラチオからの飲精でも効果はあるよ。直前まで粘膜同士を接触させることで相性も良くなるし、男の方は性的高揚を感じるからね。女性の方はそうでもないのがネックだけど」

リリカは大袈裟なくらい深呼吸をすると、恥ずかしそうに顔を背けて、視線だけを俺に向けてた。

「……とりあえず、それでも良い？」

なんていじらしい愛らしさ。俺は再び恋に落ちた。幾度目かはもう数えきれない。

「……ああ。元々こんなことは無理強いすることじゃない。互いの同意が無ければ成立しない強

リリカは頬を赤く染めたままこくりと頷くと、暫く覚悟を決めるように目を瞑って深い呼吸を繰り返した。

そして瞼を開けると、「……それじゃ、失礼します」と照れ隠しにおどけるような口調で言った。そして床に座ったまま、ベッドに腰掛ける俺の目の前まで移動した。

「……長谷君を守るためとはいえ、ジンが相手じゃなかったらこんなこと丸一日悩んでも答え出なかった」

リリカが苦笑いを浮かべながら漏らしたその言葉は俺を複雑な感情にさせる。男性として好ましく思っているから受け入れたわけではないという感情が如実に伝わったからだ。

あくまで先立つものは信頼。男性として意識されていない故のハードルの低さ。失望や落胆が無いと言えば嘘になるが、それでも彼女と普通に性接触できる興奮が勝る。

俺を見上げると、「……どうしたら良いの？」と不安そうに尋ねる。

これからリリカにフェラチオしてもらえる。精液を飲んでもらえる。その事実が俺を天にも昇らせる気持ちにさせていた。当然既にフル勃起だ。

「とりあえず、ジーンズと下着脱がして」

「それくらい自分でやんなさい！」

リリカは普段通りの姉貴分面で苦笑いを浮かべながらも、これから行うことを考えて赤面していた。何だかんだで緊張はしているのだろう。それを誤魔化すために、努めて明るく軽い雰囲気

で場を進めようとしている。

「……男はそこから女の子にしてみらいたいもんだよ」

リリカはくすくす笑いながら、「ジンが偉そうに男を語っちゃってるし」と、まるで保護者面しながら小馬鹿にする。それでも面倒見の良さを発揮してベルトを外し、そしてまずはジーンズを脱がした。

テントを張ったトランクスを見てもまだリリカには余裕があった。無理矢理作ったような笑みではあるが、ニヤニヤしながら、「ジンも男の子だね」と俺をからかっていた。

しかしそのトランクスを下げると、リリカの瞳が真ん丸になり、そして生唾を呑み込んだ。予想より遥かに強大なそれを眼前にして畏怖の念を瞳に浮かべせたが、それでも引きつった笑みを浮かべる。

「……結構大きいじゃん」

「これくらい普通だよ」

男性経験の少ないリリカなら大丈夫だと思うが、万が一にも魔装悪鬼と同じ逸物だと悟られてはまずい。魔装悪鬼状態は若干質感や色が違うので、形状が同じでもまず同じモノだとは思われないだろうが。

すっかり勃起した陰茎の根本から俺を苦笑いで見上げる。

「……どうしたらいいのかわからないんだけど」

図星だったのか、リリカは気まずそうに笑った。そして「……上手くはできないからね？」といじらしく声を掛けると、根本を舌で舐め上げた。

男性器を生で見るのは初めてだった。父親のだって記憶に無い。

当然陰毛は生え揃っているし、血管が浮き出てドクドクと脈動しているのは威圧的にすら感じる。なによりこの大きさ。まるであの魔装悪鬼みたい。ううん。あんな化け物と、大切な友人を比べるなんてどうかしてる。なによりあいつのは闇を塗りたくったみたいに真っ黒だったし、そして甲殻を纏っていたような表面だった。ジンのとは全く違う。

それでもあの凶悪な男根に陵辱された経験によって、今更普通の人間の男性器が出てきても鼻で笑える自信があったが、ジンのそれはやはりあたしに威圧を覚えさせた。

しかしそれでもやはり安心感が違う。どんなに角のように反り返っていて、血管を浮き上がらせていても、これがあたしを傷つけることは無いという絶対的信頼がある。なにせ相手はジンのだ。

それにしても硬くて熱い。両手で根本をそっと押さえ、全体に舌を這わせていく。岩のようにゴツゴツと力強く、そして舌の表面が火傷しそうなほどの熱を感じる。

どうすればいいのかわからないので、とりあえず舌の腹をたっぶり使った舐め上げる。すると凶器のような男性器が、ヒクヒクと揺れながらカウパーを垂らした。

見上げるとジンはうつとりしたような顔であたしを見下ろしている。とても心地良さそうだ。

ジンは元々あたしの親友だし、なにより一蓮托生のパートナーでもある。そんな彼がこんな気持ち良さそうな顔をしてくれるのは嬉しい。

「……このおつゆにも魔力は含まれてるの？」

「……多少は」

ジンの声はどこか弱々しい。そんなに気持ちが良いのだろうか。性的な行為をしているのではなく、なんとなく弟分の世話をしているような気分にもなる。

垂れてきたおつゆを舌で掬い取るように舐め上げていく。生まれて初めて口にした我慢汁は殆ど無味無臭だった。

鈴口と呼ばれる場所から、泉が湧くように我慢汁が溢れてきている。少しでも受け取った方が良いと思ったので、その亀頭の先端にキスするように唇を密着させた。

ちゅう、と吸って、こくりと嚥下する。するとジンがあたしの頭をそっと撫でながら、「そこ、舌で突いたらもつと出るかも」と軽く息を切らしながら言うのでそうする。

鈴口を舌先でツンツンと突く。

「……もっと強くして」

ぐりぐりとほじるように突く。

「ううっ」

ジンが気持ち良さそうに悶えると同時に、鈴口からとろりとまた我慢汁が溢れた。

唇をすぼめるとそれをちゅうつと吸い、そしてまた舌先でぐりぐりと突いた。
 ジンはもどかしそうにあたしの頭に置いた手を頬に滑らすと、少し恥ずかしそうに、「……
 しゃぶって」とだけ言った。

あたしは顔がかあつと熱くなり、心臓もドキドキとしてきた。ショーツが湿ったのを感じる。
 初デート用で気合を入れた、お気に入りのピンクで可愛いやつ。

でもここまで来たらもう途中で止められないし、なによりジンを気持ち良くさせてあげたい。

これは女としての感情ではないことははっきりしている。ジンに対して異性愛は無い。

長年苦楽を共にした親しみ。感謝。それらが大部分を占める。

それにあたしは時々思うのだ。あたしにとって長谷君のような、ジンが本当に辛い時に、寄り
 かかれる心の拠り所があるのかと。

せめてこの一時だけは、ジンの背負う責任や無力感の捌け口になってあげたいと思った。

リリカの艶やかな唇が龟头を滑っていく。デート用に特別なリップグロスでおめかししていた
 のだろう。それが余計にぬるりとした心地良さを俺に与える。

リリカは肉竿を半分ほど咥えると、これ以上は難しいという目で俺を見上げてきた。

「それで十分気持ち良いよ」

リリカは安心したように首を引くと、そしてまた半分くらいの位置まで唇を滑らせた。それを
 繰り返す。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ。

たどたどしい咥えるだけのフェラチオだが、俺には至高の恍惚を与えてくれる。

あのリリカが、俺の陰茎を咥えているのだ。それだけで法悦に値する。

先日は無理矢理咥えさせて犯した一幕もあったが、やはり合意の上で奉仕してもらうのはまた
 違った征服感で満たされる。

リリカの口腔内は、彼女の内面を表すように頼り甲斐のある温かさで満たされていた。彼女の
 唾液が肉竿に纏い付く度に、じわじわとその熱を増していく。

精一杯歯を当てないようにしているが、それでも俺の太さは図抜けているので、時々掠るよう
 に歯先が当たる。しかしそれもまた背筋をゾクゾクとさせた。

くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ、くちゅ。

リリカの上唇がカリを通り過ぎる時に、少し捲れるのが俺の頭に羽を舞わせた。

彼女は不安そうに俺を見上げるが、「……メチャクチャ気持ち良い。もうイクかも」と言う
 と、リリカは顔を離した。

そして右手で竿を擦る。リリカの唾液は根本までたつぷりと肉竿に纏い付き、その扱きはにゅ
 るにゅると卑猥な音を立てた。

「いつでもいいからね？」

俺を見上げながら龟头にちゅ、ちゅ、とキスをした。それが俺の暴発を誘った。

「あぁっ、イクっ！」

彼女のまさに眼前で亀頭が爆ぜるように射精した。

まずは彼女のただでさえ凛々しくも可憐で、デート用の化粧でめかしこんだ顔に精液が飛び散った。ゼリー状のそれが髪や頬に撃ちつけられ、どろりと垂れていく。

更にはやはりデート用のワンピースも所々を白く染められていった。



筋肉の角がビクンビクンと上下に激しく揺れながら、濃厚な精液を顔や服に撒き散らかすのを、リリカは目を細め、下唇をきゅっと噛みしめながら見届けていた。

それが一段落すると、リリカは恨めしそうな笑みを俺に向けた。

「そりゃいつでも良いとは言ったけどさ……」

「悪い……でもほら、まだ出てるしさ」

リリカは俺を茶化するような目つきで睨みながらも、ヒクつく鈴口から垂れる精液を舌で受け止めた。それを口の中にしようと、目を瞑ってこくりと喉を鳴らす。

「……粘々して吞み込みづらい」

「ワガママ言うなって。良薬口に苦しっていうだろ。ほら、まだいっぱい付いてる」

俺が肉竿に付着した、どろりとした精液を指差すと、リリカは苦笑いを浮かべて鼻を鳴らした。

「ったく。人使い荒いんだから」

そう言いつつも男根の根本に這わす舌は丁寧で、ゼリー状のそれを舐め取っては嚥下していく。

「最後に啜えて、吸ってくればまだ出るかも」

リリカは裏筋に舌を這わせるように舐め上げながら龟头に到着すると、そのままかぶりと啜え、半分ほどまで肉竿を吞み込んだ。

ちゅるるるるるるっ。

その端正な頬を凹ませて吸引する。あまりに甘美な刺激に俺は背中を仰け反らせた。

「うううっ！」

陰茎を啜えこんだまま、こくりと喉を鳴らした。

啜えられたままの陰茎は萎える様子がなかった。

「……リリカ。まだ時間大丈夫か？ 今度こそ口の中に射精すから……」

リリカは啜えたまま小さく頷くと、そのまま再びフェラチオを始めた。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

俺がリリカの手を握ると、リリカも握り返してくれる。両手の指を絡めて握り合った。

リリカのフェラチオで酩酊するような心地良さを味わいながらも俺は謝罪する。

「……服にも掛けちゃったな。これからお出かけなのに悪かった」

正直なところ、シェウジとのデートにどんな形であれ、自分という存在を割り込ませてやったのは多少なりとも劣等感を慰めてくれた。

リリカは一瞬だけ口を離すと、根本を舐めながら「……いいよ。用事までまだ時間あるし」と言うと、再び啜えてクチュクチュとフェラチオを再開した。

リリカは慣れてくると、俺を見上げながら唇による抜きを速めた。啜えながら舌の腹で時折撫でつけてきた。

ちゅばっ、ちゅばっ、ちゅばっ、ちゅばっ。

口淫の音も様になってくると、再び男根に射精感がせり上がる。

「リリカ、射精すぞ」

リリカは返事代わりに俺の手を強く握り返す。そして俺が「イクっ！」と身体を震わせると、首のピストンを止めて、そのまま口の中で俺の絶頂を受け止めてくれた。

リリカの優しい温もりの中で、ビュルビュルと精を吐き出していく。その間俺達は両手をぎゅっと握り合っていた。

射精が一旦落ち着くと、リリカは口を半開きのまま顔を離した。その口腔内は、溢れんばかりの俺の精液でたっぷり満たされていた。

リリカは目を瞑ると、それを一息にごくりと呑み込んだ。暫く目を瞑り続ける。

やっと瞼を開けたと思ったら、苦々しく笑って、「やっぱりイガイガする。っていうかジンの精液、二回目なのに濃すぎだよ」と気安い笑顔を向けた。

そしてそのまま再び陰茎を咥え、頬を凹ませ、ちゅるるる、と音を立てて吸った。

更には慰めるように、クチュクチュと穏やかなフェラチオをする。

俺はもう堪らなくなつて、リリカの手を引いて、彼女をベッドの上に座らせた。リリカに抵抗の素振りとは全くなかった。

俺達はどちらも視線を合わせようとはしない。俺はワンピースから伸びるすらりと細い脹脛をチラチラと覗き見していたし。リリカの斜め下に向いた視線は、バキバキに勃起した俺の男根をやはり時折盗み見していた。

俺達の間をこんな気まずい空気が覆ったことがかつてあっただろうか。俺はカラカラに渴いた

喉からなんとか声をひりだす。

「……時間、まだ大丈夫なんだよな？」

「まあ……あと一時間か二時間くらいだけで」

会話が途切れる。時計の秒針の音がやけにうるさい。

「……さっきも説明したけどさ、同じ胃で吸収するにも、なるべく直前まで深く肌を交えて、お互いが気持ち良くなった方が効率が良いんだけど」

「……うん」

お互いが気持ち良くなる。その意味をリリカは言外に理解していた。

まだまだいきり立つ俺の男根を見る目はそれほど抵抗感を感じない。もう二度も自らの手で、いや口で射精に導いたのだ。慣れ親しんだと言っても過言ではない。

俺は意を決して、腰をずらしてリリカに近づく。その際にワンピースのスカートをゆっくり捲り上げていったが、リリカは少し肩を強張らせただけでやはり抵抗はなかった。

程よく肉付きの良い、眩しいほどに美しい太ももが、桃色のショーツと共に露わになる。

太もももショーツも、魔装少女としての訓練の時にいくらかでも見ているが、自分の部屋で、それも私服のリリカでそれを見るのは全く意味合いが違った。心臓が破裂しそうなほどにうるさい。

顔を近づけていくと、「……キスはダメ」とか弱い表情で顔を逸らすも、そのまま俺が押し倒すとゆっくり仰向けになった。

俺が覆いかぶさっていくと、耳元でリリカが掠れた声で尋ねる。

「……ゴム有るの？」

その言葉で決定的になる。俺とリリカは、今からセックスをする。それも互いに合意済みで。俺の心臓は歓喜で膨らみ破裂しそうになる。

「有る」

「……一時間か、二時間くらいだからね」

「わかってる」

そう返しながら、ショーツの横紐に指を掛けて脱がしていく。その際に彼女の陰部とクロッチの間に、ねっとりとした愛液の糸が架かった。

リリカはどこか不安そうに俺の勃起した陰茎をそっと握ると、「……あたし、普通にするの初めてだから……」と言った。

「わかってる。優しくするから」

俺はワンピースの上から彼女の美巨乳の谷間に顔を埋めながら、じっとり濡れた陰唇の中に指を挿入させた。

彼女の陰部が俺の指でクチュクチュと音を鳴らすと、「んっ」と彼女は微かに顎を引いた。そしてそのまま俺の首に両腕を回すと、両膝を軽く曲げた。

窮屈な腔内で指を曲げて優しく擦ると、リリカは「あっ……んっ」と蕩けるような声を上げる。彼女の膣壁は熱く、そしてじっとり濡れていた。男を受け入れる準備は万全だ。

指を抜いて俺がゴムを装着していると、リリカが罪悪感をその表情と声色に張り付けながら囁いた。どちらも視線は合わない。

「……強くなるためだからね」

「わかってる」

「……長谷君を守るためだからね」

「当たり前だろ」

リリカの両膝を持って左右に開く。リリカは下唇を噛んで横を向いていた。

長谷シュウジは意気込んでいた。待ち合わせ場所である公園の噴水前に、二時間も早く仁王立ちを決め込んでいた。

まだ正午も迎えていない爽快な日差しが彼を照らす。

（確かに今まで俺はリリカとジンに甘えて待ち合わせ時間を軽視していた。しかしこれからは違おう！ もうリリカを待たせることは一生無いだろう）

とはいえ流石に早く来すぎてしまった。彼も初デートで平常心ではいらなかったのだ。とても家で大人しく待つことなどできなかった。

自嘲するように笑うとその場に腰を下ろして真剣に考える。

（今まではジンが居てくれたが、俺とのデートの待ち合わせではリリカは一人で待つことになる。その間は色んな男にナンパされるだろうから。彼氏としてそんな煩わしい思いはさせない

ようにしてあげないと)

彼氏。その語句にくすぐったそうに笑う。

(そうだ、リリカにもう待ち合わせの場所に居るってメッセージ送ったらどうなるかな。呆れながらも早く来てくれたりして)

微かな期待をしつつ、リリカの携帯にメッセージを送った。

リリカの携帯が枕元で振動していた。しかし彼女はそれに気づけない。彼女の顔と携帯を同時に見下ろす俺は気づいてはいたがそれどころではなかった。

ワンピースを着たまま仰向けに寝る彼女の腿裏を抱え込み、そして腰を振って彼女の膣壁を味わうことに意識を集中していた。

「あっ、あっ。あっあっ！　そこ、だめっ！」

ベッドがギシギシと軋んでいる。

「ジンっ、ちよっと、はげしっ……もうちよっと、ゆっくりっ……」

「痛い？」

「痛くは、ない、けど……」

「じゃあ続けるよ」

俺の部屋のベッドが、俺とリリカのセックスでギシギシ揺れている。それをどこか非現実的に思いながらも、確かにリリカを貫いている、ほぼ透明の緑色のゴムを纏った俺の陰茎。そしてそ

れを感じるリリカの膣壁のヒタヒタした感触と、なにより彼女の体温が、このセックスが現実だと知らしめてくれる。

リリカが必死な様子で言う。

「……さっきいったばかりだから……だからっ、あついっ……良すぎてっ、変になっちゃいそうなんだってば……」

「お互いが気持ち良くなればなるほど吸収率は高くなるから」

俺のその言葉に、リリカはぐっと歯を食いしばり、「……気持ち良すぎなんだって……ジンの、その……おちんちん」と返した。

俺は益々昂りガツガツと腰を叩きつける。

「あっあっあっ！　いつあっ！　イクっ、イクっ！　そんな風にされたらっ、またイっちゃう！」

俺が激しく腰を振れば振るほど、ワンピースが捲れていく。もうヘソは丸見えで、あとはもう豊かな乳房がストッパーになっているだけだ。

シュウジとのデートの装いのままの彼女と交わるのは、俺を歪んだ優越感で満たす。

さぞかしシュウジはリリカの勝負服を楽しみにしているのだろう。それを先に味わっている。シュウジは昔から俺とは違い皆に好かれていた。友達だって異性問わず多いし、告白だってよくされている。

だからリリカは、リリカだけは、俺のモノにさせて欲しい。

別にシユウジを嫌いになったわけじゃない。死んでは欲しくない。だから守る。でもそれとこれとは別だ。

「俺もイクからっ」

ピストンを中断してそう宣言すると、リリカは切なそうに俺を見つめ、小さくこくりと頷いた。

「……あんまり奥の方、しちゃダメだからね？」

「却下。リリカ、奥の方が気持ち良さそうだし」

そう言って射精用のピストンを再開する。

「あっ、あっ、あっ♡」

リリカは甲高い声を上げると、俺に冗談めいた睨みを利かせて、「……ジンの意地悪っ」と安く言った。

「リリカも気持ち良くさせないと意味無いだろ」

根本までしっかりと挿入することを意識したピストンでリリカを責め立てる。

「あっあっ、いっあっ、だからっ、そこっ、そこっ！ 奥っ、ダメだつてばっ……あっ、いっ！ やっあっ、ジンの、おっきっ！ 一番深いところ、届くっ……あっ、イクっ！ あっ、イクっ！ イクイクイク！」

「リリカっ！」

俺がぐっと下腹部を押し込み、ゴムの中でビュルビュルと射精を果たすと、リリカは一瞬遅れ

て、「イックウっ！！！」と背中を浮かせた。

射精中の陰茎が絶頂した肉壺でぎゅうぎゅうに押し込められる。すると搾り取られるようにビュウビュウと更に射精をした。

無理矢理犯すのではなく、合意の上でセックスをして、同時に果てる。なんて幸せなんだろうか。

俺達は結合したまま、はあはあと息を荒らげて余韻が過ぎるのを待つ。そして陰茎を引き抜くと、外したゴムをそのままリリカの口元に持つていく。

リリカは酸欠めいた息遣いをしながらも、目を閉じて口を開けると舌を出した。その上にゴムの中から精液を垂らしていく。リリカの赤い舌が白く染まり、やがてこくりと喉を鳴らした。

俺はまだまだ猛りが収まりそうにない陰茎に再びゴムを装着する。まだまだ血管を浮かせ、ギチギチと肉の雄たけびを上げるそれをリリカは薄目で見ながら、「……すごいね」と感心するよう

うに言った。

その言葉とはほぼ同時に再挿入する。

「ああっ、はっんっ！」

気が付けば汗をびっしょり掻いていた。根本まで挿入した状態で、リリカの身体ごと揺らすように軽くズンズンと腰を振りつつ、上半身は直立させる。

「あんっ、あんっ！」

俺が上着を脱ぎ始めると、リリカも喘ぎながらワンピースをゆっくりと脱ぎ始めた。

露わになった桃色のブラから零れ落ちんばかりの乳肉は、汗を纏ってその瑞々しい質感をより煽情的に染めていた。

ただでさえ形の良い美巨乳が、腰を振るとぶるんぶるんと弾むように揺れた。

長谷シュウジはウロウロと待ち合わせ場所周辺を歩き回りながら、デートのプランを詳細に練っていた。

(まずはあの店に寄って……いやしかしリリカの好みなら……)

そんな折、先程のリリカに送ったメッセージの返信が訪れる。

「遅れるか早く来すぎかで、なんでそう両極端なのよ。まあいいけど。代わりにあたしが準備に手間取ってる。少し遅れたらごめんね？」

リリカが遅れるなんて初めてかもしれない。きっと服や化粧に手間取っているのだろう。女友達に相談したら、初デートなんて特に気合入れたり悩むから、少しくらい遅れても絶対に怒るなよとの助言を受けている。

あれから二時間近く経って、待ち合わせ時間は近づいている。

たとえ陽が沈むまで待たされても怒るものか。

自分とのデートのためにおめかししてくれたリリカの姿を見れば、きっと全てが吹き飛ぶ。

リリカは携帯を置くと、俺に向けてうつとりするような瞳で見つめる。

「待ち合わせの相手、ちょっと遅れても大丈夫って？」

リリカは小さく頷くと、掠れた声で言った。

「ジン……これっ、おちんちんの擦れ方、今までと違うんだけど……」

「気持ち良くない？」

リリカは恥ずかしそうにジンを薄目かつ上目遣いでちらりと見ると、瞼を閉じて、「……気持ち良いっ、けどさ……」と蕩けた声を返した。

部屋に熱気が籠るほどのセックスをしながら、シュウジに連絡を入れさせるのはやはり喜びで背中が震える。

俺達は身体をやや後ろに倒し、両腕で各々の上半身の体重を支え、下腹部は前に押し出すように結合しあっていた。

結合部はお互いから丸見えた。腰を前後させる度に、ぬぶ、ぬぶ、と音を立てて、陰唇を貫く肉槍の様子がよく観察できた。

リリカはきゅっと唇を結うと、顔を横に向ける。

「……恥ずかしいよこれ」

「でもリリカからも腰振ってるじゃん」

微かにではあるが、俺が腰を引くとリリカもそれに倣い、そして俺が突き出すと、やはりリリカも自ら腰を前にスライドさせていた。

「……知らない」

耳まで真っ赤にしながらも、俺達は同時に腰を引いて、同時に腰を押し出す。リリカ以外の女など興味が無いが、間違いない彼女が極上の雌だろう。顔やスタイル、性格は言うまでもない。この結合感を知れた自分は世界で指折りの幸せな男だ。

窮屈なほどの膣道をにゅるんと滑るように貫くと、ウネウネとした曲がりくねった肉壺に抱擁されるのだ。リリカの中はとにかく温かくて、性器の結合だけで背中が汗ばむ。

それはリリカも同様のようで、「……ジン……熱い……」と切なそうに呟く。

「なにが？」

本気でわからないといった様子ですつとほけると、リリカが恥ずかしそうに言う。

「……ジンのおちんちん、すごく熱い」

リリカの額から流れる汗はその細い顎を伝い、ブラをした胸の谷間に流れていく。

全裸にしたい気持ちもあったが、リリカがデートのために選んだその桃色のブラを着用させたままエッチをするのは、なんだか自分が彼氏のような気分になった。

「ほらリリカ。リリカの愛液で真っ白だよ」

丸見えの結合部から見える陰唇は、泡立ったりリリカの愛液で真っ白で、またその真下のシートはドロドロに濡れている。

腰をぐりぐりと押し付けながらそう言う。

「あっ、あっ、あっ♡」

顎を引いて喘ぐと、そのまま目遣いで拗ねるように言う。

「……ジンが気持ち良くさせるからじゃん。それに……」

二人でやや大きく腰をぶつけ合う。

「ああっ、あっ♡ あっ、ああんっ♡」

リリカの肩が小さく震える。軽く達したようだ。はあはあと恍惚の吐息を漏らす。

そんなリリカは唇を尖らせると冗談っぽく不平不満の視線を俺に向けた。

「……ジンだって、おちんちんいっぱい気持ち良くさせたくせに」

リリカの太もも、お腹、そしてブラをしたままの上乳に、使用済みのコンドームが置かれている。戦闘機の撃墜マークのようなものだ。

そしてそれだけリリカが俺の精液を飲んだということでもある。

「お腹の中、ジンの精液でたぶたぶだよ……」

俺は少し表情に影を落とし、真剣な様子で言う。

「少しでもリリカの力になりました」

「……それは、わかってる……ありがとうね。いっぱい勇気貰えた」

リリカがあくまで相棒として応える。

俺だけ背中を直立にさせてピストンの主導権を握る。リリカを完全に受け身にさせて、俺が力強くピストンをする。そこで俺も表情を崩し、茶化すように言う。

「最後にまだまだ魔力詰まったのやるからな」

「うっ、ん♡」

先程までの協力しあうようなピストンではなく、一方的な雄の攻勢にリリカは一瞬で顔をトロトロにさせた。

「……ジンの濃いザーメン、たっぷり飲ませて」

ベッドがギシギシと揺れる。

「あつ、あつ、あつ♡ ジンっ♡ 硬いっ♡ あつ、いっ♡ いいっ♡ おちんちん、硬いよっ♡」

生クリームのようなリリカの愛液が、結合部をグチュグチュと鳴らす。

「いっ、いっ♡ きもちっ♡ そこっ、そこっ、奥っ♡ あつすごっ、届いてるっ♡ ジン、ジン、おっきっ♡ そこ、気持ち良いっ♡ あっあっ♡ おっきいの、すごい♡」

カクカクと腰を振りながら、ゆっくりと顔を近づける。力強さに蕩け切ったリリカはそつと瞼を閉じた。

ちゅう、と唇が触れ合う。何度も精液を飲んだ唇だが、直接口内に垂らしていたからか、精子の味や匂いは全然しなかった。リップグロスの甘い味だけがした。

顔を離すと、「……きつと守ってみせる」と呟いた。リリカも照れ臭そうに頷いた。

リリカは、俺達二人でシユウジを守ろう、という意思表示だと受け取っただろう。

キスも性的な興奮に流されて、その決意表明のついでのような行為だと思っただろう。

こみ上げる射精感に突き動かされるように腰を振る。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ジン、激しいよっ♡」

「激しいの好きだろ？」

「……好きっ、だけどっ♡ でも、でも、ジンのおちんちん、遅しいから、あっあっいっ♡

ああっ、いいっ♡ おまんこ溶けちゃうっ♡ 来るっ、来るっ♡」

「リリカ、俺もイクよ」

「来てっ、来てっ♡ あたし、飲むから……ジンの精液飲んで、ジンに心配させないくらい、もつと強くなってみせるからっ！」

「ああっ、射精るっ！」

「イックっ♡♡♡」

ビュルッ、ビュルッ、ビュルルルッ！

リリカの温もりの中で、ゴムの先端が膨れるほどに精を吐き出していく。

その間、俺とリリカは何度かちゅ、ちゅ、とキスをした。もしかしたらリリカにとっては男とのファーストキスにはカウントされないのかもしれない。それでも構わない。シユウジよりも先に、その艶やかな唇の感触を何度も味わった。

そして何度も繰り返した工程を再度行う。俺がゴムを外すとリリカの方から口を開けた。

「そっういば待ち合わせの時間、少し過ぎるんじゃないか？」

「……うん。謝っとく」

リリカは右手にそつと携帯を握りながらも、先に俺に顎を上げて口を開いて舌を出した。

謝罪のメッセージよりも、先に俺の精液を欲したことが嬉しかった。



リカの口に精液を垂らしながら、この後シュウジとデートをするのだと思うと少しは失恋の溜飲も下がる。舌の腹では受け止めきれず、顎にまで垂れていく大量の精液は俺のリカへの想いの証。

俺の精液が掛かった髪や顔や服、俺の精液を何度も呑み込んだ口でシュウジと談笑するのだ。腹部にもずっと俺の熱を感じ続けるに違いない。

リリカがデートに向かった後、俺は一人で考えていた。

普通に人間同士として肌を交えたことで、改めてリリカを愛してしまっている。しかしシュウジを本気で憎むことはできない。

そんな俺に、一本の電話が掛かってくる。花鳥院シランだった。俺に用事がある時は大抵誰か使いの者を挟む。下々の者と直接通話などしたがないお嬢様が珍しい。

「はい。柳楽です」

「ご機嫌よう。良い知らせと悪い知らせがあるけど、どちらから聞きたいかしら？」

「良い方からお願いします」

「よろしい。「企業」の試算によると、次の崇りの受肉で祠はほぼ無力化することよ」

思ったより早い。まだまだ容量は沢山残っているはずだ。つまり……。

「続いて悪い知らせね。次に受肉する崇りは相当濃密な呪力を有している」

「でしようね。それで受肉時期は？」

「明日の晩よ。まあ精々頑張りなさい。最悪負けるにしても、研究データだけは厳重に保全しておくように」

一方的に通話を切られる。花鳥院シランの高飛車な態度に心底ムカつき携帯をベッドに叩きつ

けた。

四話 ファーストキスも見守ってやる

リリカとシュウジの初のデートは二人にとって夢のような時間だった。街中を散策して、ウィンドウに飾られた商品を二人で眺めては、「これ部屋に飾りたいわ」「長谷君趣味悪っ」と他愛の無い会話で笑い声を絶やさなかった。

歩き疲れたらシュウジが事前に調べておいたオシャレなカフェに寄った。「よくこんなお店知ってたね？」なんて聞かれて、しどろもどろになる彼を見て、リリカは色々と察して頬を緩ませた。

「あの長谷君がデートスポットを事前に調べてくれるなんてね」

「そ、そ、それくらい当たり前だろ」

猪突猛進でデリカシーとは無縁な恋人が、自分のために手を尽くしてくれて、更にはそれを指摘されて狼狽えている。

リリカは心から彼を愛しく思った。

「長谷君ったらカーワイイ」

姉貴分ぶって露骨に茶化しながらも、リリカも顔が真っ赤だ。

シュウジは顔を逸らしたまま唇を尖らせ、「つつかさ、いい加減その長谷君ってのはやめろよな」と反撃の狼煙を上げる。

「……もう俺達、付き合ってたんだからよ」

そのストレートな言葉に今度はリリカが狼狽える。心臓がドキンと跳ね上がった。膝の上で両手をモジモジと重ねながら顎を引き、照れ笑いを浮かべながら、「……シユウジ」と好きな人の名前を初めて下の名で呼んだ。怪異と戦う時よりも余程ドキドキするとリリカは思った。

勇気を振り絞って顔を上げると、蒸気が出そうなほどに顔を真っ赤にしたシユウジの顔が在った。リリカはくすくす笑うと、「どうしたの？ シユウジ」と破裂しそうなほどの鼓動の中、露骨に恋人をからかうのであった。

二人は意味も無く笑い合う。幸せの絶頂だった。

どこことなくリリカのテンションが終始無理矢理高めているようにもシユウジは感じたが、初デートならではの緊張だと解釈した。なにより自分も同じ心境だからだ。

彼女が時折なにかを思い出したかのように表情に陰を落とす瞬間もあったが、初めてのデートで浮足立つシユウジにはそこまで気を回す余裕が無かった。

リリカとしても魔装悪鬼に犯されたことや、ジンと合意の上でセックスをしてしまった際の葛藤が時折脳裏をよぎったが、デートに集中するため笑顔を決意し、ささやかに努めた。

全てはこの幸せな時間を守るための代償だったのだから。

空が街路樹の緑で覆われる遊歩道を、木漏れ日に愛でられながら歩いていると、時々手の甲がぶつかる。意図的にどちらからも触れ合わせていた。

どちらも手を握りたがっているのに、恥ずかしくてそれが言い出せないまま、二人は素知らぬ

様子でそのまま遊歩道を歩き終えてしまう。

周囲が見れば胸やけがしそうなほど甘酸っぱい時間は、二人にとってはあつという間に過ぎてしまう。

陽が暮れ始めると、公園のベンチに座ってあとはお開きの時間待つだけになった。それでも二人は言い出せない。リリカもシユウジも、まだまだずっと二人で居たいと心から願った。

そんなリリカのもとに、とあるメッセージが届く。ジンが花鳥院シランから伝え聞いたことがそのまま記されていた。厳しい戦いが待っている。隣で笑っている恋人の命を守るかどうかの瀬戸際。

決意と覚悟で彼女の顔が強張るが、今だけはこの報われた恋を甘受しようと、幸せに浸り続けた。

不安が無いわけではない。明日には自分とシユウジの四肢が祟りによって引き裂かれているかもしれない。わざわざ『企業』が警告をしてきたくらいだ。次の祟りは相当手強いのだろう。それでもこの幸せを守るためならと己を奮い立たせる。

「……ずっと好きだったよ。シユウジ」

「きゅ、急になに言い出すんだよ」

狼狽するシユウジの太ももを、リリカがいじらしくツンツンと指で突く。その意図を理解したシユウジは大きく咳払いをして、顔を逸らすと、「……俺も一緒だったの」と言った。

「ダメ。ちゃんとやって」

「うっさいな。これでいいだろ」

「言ってくれないと次のデートは無し」

勿論リリカにそんなつもりは無い。たとえシュウジに他に好きな人が居ても、自分の気持ちは変わらないし、シュウジと会いたいと思うだろう。

不意にシュウジに手を握られる。温もりと同時に伝わる鼓動は、一体どちらのものかわからないくらいにうるさい。

「……好きに決まってるんだろ」

「……それで勘弁してあげる」

蜜月の時は過ぎ、すっかり夜も更けた時間、シュウジは帰宅するとベッドに倒れ込み、すぐさまリリカにメッセージを送る。

「今日は楽しかった。ありがとう」

リリカの笑顔を独り占めできただけで、心の底から幸福だった。それに伴い、胸の奥がちくりと痛む。

(ジンにもいつか言わないとな……。ジンもリリカのことが好きだったのは知っていた。だから俺はせめてジンがリリカに告白するまでは俺の想いは伏せておこうと思った。でもリリカに告白されて揺らいでしまった。すまん)

その時は親友による、拳の一つや二つは当然だと覚悟した。

しかしその頃リリカは、拳よりも余程遅いジンの槍で突かれ続けていた。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

薄暗いジンの部屋で、二人は全裸になっていた。

「ジンっ、すごいっ♡ 朝、あれだけ射精したのになっ♡」

リリカは四つん這いとなり、その突き出した桃尻は軽快に打ち付けるジンの下腹部で、パンパンと乾いた音を軽快に鳴らし続ける。

「おちんちんっ、硬くてっ、おっさい♡」

「硬くて大きい、気持ち良い？」

リリカは両手でシーツをぎゅっと掴むと、恥ずかしそうに頷いた。

「お互い気持ち良くなった方が魔力の吸収率は良くなる。恥ずかしがらずにそのまま昂るんだ」

「……わかってる……。あっあっ、いいっ、いいっ♡ 奥っ、当たるっ♡ ジンのおちんぽっ、奥まで来て気持ち良いっ♡」

ジンは射精の前兆を感じ取ると、上半身でリリカの背中に覆いかぶさり、腰を掴んでいた両手をベッドについた。

コッコツと腰を押し付けるようにピストンしながら、片手はリリカの乳房に伸ばす。

「あっ、あっ、あっ……。これも、きもちっ♡」

重力に従ってより量感を増したリリカの美巨乳を鷺掴みにする。掴みきれないその柔肉は、あまりに瑞々しい弾力で手の平を愉しませる。

ぎゅ、ぎゅ、と揉むだけで、ジンの頭が浮遊感を覚えた。

「やあつ、ジン……強いよ……」

「……悪い。痛かったか？」

気が付けば腰を止めて、指を沈みこませるほどに揉みしだいていた。

リリカは首を横に振った。やせ我慢をしているようには見えなかった。

「じゃあこれは？」

桃色の乳首をぎゅつと摘まむ。

「あつ、んっ♡」

返答は聞くまでも無かった。そのままコリコリと指を擦り合わせる。

「やつ、ああつ……はっ、んっ♡」

ジンと同様に絶頂寸前のリリカの背中が、汗を浮かべてもどかしそうに揺れた。

「……意地悪、しないで」

リリカが消え入りそうな声で呟く。

「え？」

逡巡の後、媚びるような甘い声で言う。

「……欲しい」

ジンは乳首を責めながら、コツ、コツ、とゆっくり腰を押し付ける。

「あっ♡ あっ♡」

そしてリリカが堪らなそうに蕩ける。

「……ジンのおちんちんが、欲しい」

形も色も可憐そのものな乳首を乱暴なほどに摘まむ。

「あんっ♡」

「ちゃんと言ってみな」

リリカは背中をぐつと反らせて、シーツをより強く握った。

「……ジンの遅い勃起ちんぽで、おまんこガンガンに突いて欲しい……です」

ジンは再び上半身を上げると、彼女のしつかり骨盤が開いた腰を掴む。

ベッド脇に脱ぎ捨てられた、デイトで着用したワンピースや下着を見下ろしながら、ガツガツと腰を振り出した。ベッドが激しく軋む。

「すごいっ♡ ああつ、ジンっ♡ あつ、あつ、あつ、あつ♡ イクっ、イクっ♡

ああつ、いっ、はげしっ♡ 頭の奥までおちんちん来て痺れるっ♡」

「リリカ、射精すよっ！」

「おちんちん気持ち良くして、いっぱいザーメン出してっ♡ んっ、ックウウ♡」

リリカの臀部がブルブルと震え、膣内が収縮した。俺の男根もそれに導かれるように激しく射精した。

半日の休憩を置いたとはいえ、勢い良くビュルビュルとゴム中出しを果たす。

リリカの体温を名残惜しく思いながらも、陰茎を引き抜いてゴムを外す。

まだ身体を小刻みに痙攣させているリリカの体勢を横向けにして、側位で続けることを無言で意思疎通しながらゴムを手渡す。

まるで駄菓子かなにかのように、ゴムの中から精液を吸い出し嚥下するリリカの右脚を高く持ち上げながら挿入の態勢に入る。

「……ゴム、無くなったから」

飲精を終えたリリカは、視線を顔と同様に横に向けて俺を見ない。

「……絶対口に出すから」

リリカは視線をジンに向けていまま、小さくこくりと頷いた。

両手でリリカの美脚を抱えるように持ち上げながら、生での挿入を行う。

きつめの締め付けの中、それでもにゅるんとなんの抵抗もなく肉竿が収納される。

ダイレクトに伝わるリリカの体温と、そしてヒタヒタした膈壁が俺を襲う。

リリカの雌壺は生挿入で雄の全細胞を虜にする。俺は無意識に腰を振っていたが、すぐに陰茎が射精感でパンパンに膨張したのがわかった。

「リリカ……リリカの中、すごく温かいよ……」

情けない声を出す俺に対して、リリカは声すら上げずに、ブルブルと震えていた。リリカは挿入だけで達していた。そして切なさが高潮に達した声色を漏らす。

「……あたしも、ジンの生ちんぽで、おまんこ溶けちゃいそう……」

俺はもう後先考えずに腰を振った。

「……こんな熱いおちんぽで、そんな激しくズコズコされたら、おまんこドロドロに溶けちゃう……」

俺はもうこの魅惑の肉壺から陰茎を引き抜ける自信を喪失していた。

「リリカ……このまま射精していいか？」

リリカは答えない。

「……お前を強くするためだから……お前を守りたいから……」

欺瞞^{ぎまん}だった。勿論それも本音だ。しかしこの場に於いては性欲だけが支配していた。

リリカは流し目で俺を見る。派手な嬌声こそ上げないものの、リリカはもう生挿入からずっとアクメに達していたようだった。

「……ジン、あたしね……好きな人いるの」

俺はリリカの右脚をぎゅっと抱えながら腰を振る。

「……一緒に、その人を守ってくれる？」

遠まわしに、自分は長谷シュウジが好きなのだと告白してくる。

俺の親友。そして憎き恋敵。未だに心の整理はつかない。それでも俺は目先の性欲に誘われる。

「……当たり前だろ」

リリカがそっと目を瞑る。人として合意のセックスで、生の中出しを許可される。それもずっと恋い焦がれていた相手から。俺は涙を浮かべるほどに多幸感に包まれた。

「リリカっ！ リリカっ！」

すらりと伸びた美しい脛脛に舌を這わせながら、リリカの中で男根を、避妊無しで爆発させた。

抱えたリリカの脚にキスをしながら、ドクドクビュルビュルと、男子の本懐に身を委ねる。魔装悪鬼ではなく人間としての俺の精液が、リリカの子宮に流れ込んでいくのを実感すると、得も言われぬ浮遊感に包まれた。

リリカはシーツをぎゅつと握り、全身をキュンキュンと喘がせている。

射精は落ち着きを見せるものの、未だ昂りを見せ続ける剛直で貫き続ける。俺はリリカと繋がったまま、彼女の体勢を正常位にさせた。

膝裏をぐつと抱え込み、彼女の腰を上に向けると、下腹部を真下に叩きつけるようにピストンを再開した。

長谷シユウジはベッドに寝ころびながら、次のデートに想いを馳せていた。今度はサプライズでプレゼントを用意してはどうか。そういえば途中のゲーセンで見かけた熊のヌイグルミが可愛いと言っていた。

そうだ。今からでも遅くはない。

彼は上着を着込むと、訝しむ家族の目を背中に受けつつ、一人夜中のゲーセンに駆け込むのだった。

「ああっ♡ あっ♡ いっ、いいっ♡ ジンっ♡ ジンっ♡ 太いっ♡ ジンの生ちんぽっ、太くてゴリゴリするっ♡ あっひっ、ひいっいっ♡ やっ、またイクっ♡ きもちっ♡ あっイク♡ あっイク♡ イクイクイクっ♡」

リリカが切羽詰まった様子で全身を震わせて、瞼と唇をぎゅつと閉じ、やがてトロンとした様子でそれぞれが半開きになる。

「……ジンのおちんちん、カリが深いから、すごくゴシゴシされる……♡」

「気持ち良いだろ？」

そう尋ねながら顔を近づける。リリカは両腕を俺の首に回した。唇が触れ合うと、どちらからともなく舌を差し出した。

クチュクチュと唾液を塗りたくるように巻き付かせる。リリカの舌はぶるぶるとした弾力で、巻き付かせれば巻き付かせるほど、頭の芯が溶けていきそうだった。

舌を触れ合わせながら、リリカが眉を八の字にして愛らしく囁く。

「……気持ち良い……ジンのカリ高ちんぽ、おまんこトロトロになるくらい気持ち良い♡」

「もっとトロトロにしてやろうか？」

「……うん、して……♡ 深くてカチカチに出っ張ったカリで、おまんこ引っ掻いて♡」

リリカが甘い声音でそう囁くと、彼女の方から舌を巻き付かせてきた。俺はそれに応戦しながらも腰を叩きつける。

「あつ、あつ、あつ、あつ♡ ジンっ、だめっ♡ そんな擦られたら、あたしっ、あたし♡ あつい♡ いいっ、ああ、いっ♡ いっ♡ 欲しくなる……おまんこが、ジンのザーメン欲しくなっちゃう♡ いっぱいおまんこ擦ってくれるガチガチちんぼの精液で、あたしの中いっぱいにして欲しくなっちゃうっ♡」

「全部……俺の全部、受け取ってくれっ！」

ぎゅゅと腰を押し付ける。俺とリリカの間に隙間がないほど密着する。上の口も唇と舌で求めあうように結合していた。

俺達は確かに一つになっていた。リリカの柔らかさと温かさで溶けながら、俺はビュルビュルと吸い出されるように至福の射精を続けていた。

翌朝、俺達は吞気にも普通に登校して授業を受ける。あまり気を張りすぎても仕方がない。それでも今晩現れるであろう祟りは間違いなく今までで最強だろう。

リリカの様子はリラックスしているように見える。昨晩はお互いの足腰が立たなくなるまで生セックスをしまくった。

魔装悪鬼ではなく素の俺の精液でそこまで劇的な魔力上昇が見込めるとは思えないが、それでもやるだけのことはやったという自信はつく。

それに加え、単純に人肌を重ねるセックスというのは、メンタルの安定に大きな好影響を及ぼしているのだと推測する。

それにしてもやけにシュウジのテンションが高い。

「昨日の夜さ、ふと思いついてゲーセンに行つてさ、結構金使つてヌイグルミ取つてきたんだよな」

俺の机に突っ伏して、嬉しそうにニヤニヤしながらそう言う。

「誰かにプレゼントするのか？」

「そ、そういうんじゃないって。ただの気まぐれだよ気まぐれっ！」

わかりやすく狼狽する。常に感情豊かなシュウジだが今日は特に顕著だ。余程昨日のデートが楽しかったのだろう。その後、リリカが俺と熱い夜を過ごしたことも知らずに、顔をだらしなく綻ばせている。

とはいえやはり俺が一方的に優越感に浸れることでもない。やはりリリカの心はシュウジに有るのだ。いくら燃え上がるようなセックスをしてもそれは一時のこと。ただの肉欲でしかない。

そしてなにより前提となっているのが、シュウジを守るためというリリカの気持ちなのである。どこまでいってもシュウジのため、というのが俺とリリカの関係に付きまとう。

シュウジは俺だけでなくリリカにもやたらと教室で絡んでいた。自身がリリカの彼氏であるという事に慣れた結果、より距離感が近づいたのかもしれない。

俺の近くで誰かがヒソヒソと声を潜める。

「長谷君とリリカちゃんってやっぱ付き合ってたのかな？」

「前から仲良いだら」

「でもほら、リリカちゃんのあの顔つき。恋する乙女って感じじゃん。顔赤いし。今までとは全然違うって」

「まあでもお似合いだよな。元バスケ部のエースと、学校一番の気さくな美人。どっちも実際かなりモテるし」

俺の胸に、なにかどす黒い炎が燃^{くす}りだす。

昼休みはまだ三十分以上残っていた。俺は席を立つと、シュウジと楽しそうに話しているリリカに声を掛けた。

「リリカ悪い。そういえば物理の山本に実験室の片付け頼まれてたんだ。手伝ってくれるか？」

「ああ、うん。勿論良いよ」

リリカがなんの疑いも持たずに立ち上がると、シュウジも相変わらずテンション高めに口を開く。

「なんだよ水くせーな。俺も手伝うよ」

「お前物理の課題溜まりまくってるだろ。今山本と顔合わすの不味いんじゃないの？」

シュウジが両手を上げて一歩下がると、リリカがくすくすと笑った。俺とリリカは廊下に出て、ある程度物理室に向かって先に進むと、最上階に向かう。リリカが不思議そうに尋ねる。

「そっじゃないよね？」

「ああ。最上階のトイレに行く。昼休みのあそこならまず人來ないし。決戦は今晚だからできる限り準備はしておきたい」

その言葉で全てを察したリリカは階段の途中で足を止めた。俺は振り返ると、周囲に人の目がないことを確認して手を差し出す。

「やれるだけやっておいた方が良い。放課後になるともうそんな時間取れなくなるし」

俺はあくまで誠実に言った。リリカは恥ずかしそうに俯いていたが、俺に視線を向けると力強く頷いた。リリカの手を引っ張って件のトイレまで連れて行く。

まずトイレの入り口に入りに人払いの結界を張る。

「これで人が近寄りづらくなる」

そしてリリカと一緒に個室に入ると、カギを閉めてから更に音と振動を遮断する。俺は実技が得意なタイプではないが、それでもこれくらいの基本的な魔術は行使できる。そしてリリカもその効果は身を以て知っている。

これでもうトイレには人が近寄りづらくなり、そして入ってきたとしても、この個室内部の音や振動は一切外に漏れない。

リリカは個室の扉に背を預けた。その顔の隣に肘をつくと顔を近づける。リリカは一瞬葛藤するように下唇を噛んで微かに俯いたが、覚悟を決めたように顎を上げる。

昼休みのトイレの中で、さっきまで恋人と楽しく談笑していた唇が、俺とちゅっちゅと愛らしい音を立てて啄みあう。そのまま舌を入れてクチュクチュと音を鳴らした。

右手で制服越しに胸を揉みながら深いキスをする。右手を腰まで下ろし、スカートを捲り上げた。白い太ももと、水色のショーツの横紐が見える。

唾液を交換するようにねっとり舌を巻き付かせながら、「脱いで」と指示する。リリカは俺とキスを続けながらショーツを下ろす。俺もファスナーを下ろすとその隙間から陰茎を取り出した。

暫く濃厚なキスをしながら、互いの手で互いの性器を触り合った。舌と同様にその手もクチュクチュと淫靡な水音を鳴らした。

俺がしゃがみこんで顔を彼女の下腹部に埋める。薄めの陰毛の奥に、勃起したクリトリスが見える。

リリカが小声で囁く。

「やだっ、ジン……そんなところ汚いよ」

「リリカに汚い場所なんてあるものか」
舌を伸ばしてクリトリスを舐め上げた。

「んっ」

彼女の華奢な両手が俺の頭を軽く掴んだ。俺はそのままクンニを続ける。

「やっ……ああ……はっ……ん」

リリカは腰を引くが、俺は追いかけて鼻先を彼女の陰毛に密着させる。

コリコリになった豆のようなクリトリスを舌で舐め続けると彼女の膝が軽く曲がり、白い内腿を俺の唾液以外の粘液が垂れていった。

「んんっ、あっ……ジン、それ、ダメ……」

昼休みの学校のトイレということもあってか、リリカの声はスリルでより背徳に濡れていた。

「……はあっ、あっ……んっ、やっ…………イク……」

虫も追いつかないか細い声で絶頂を伝えたと、彼女の腰がビクンと一度痙攣したのがわかった。

前戯で達したリリカの身体は、既に雄を受け入れる昂りを得ていた。しかし俺はあえて突き放すような声色で言う。

「欲しくなったら言ってくれ」

鬼が耳元で囁くのだ。

「リリカの方からおねだりされてみたいだろ？」と。

俺は執拗にリリカをクンニした。ベチャベチャと音を立てて舐めると、それを受けてリリカの口からは蕩けだした吐息が漏れる。

「あっ、んっ……♡」

俺の頭に添えていた彼女の両手の指が、懇願するように軽く曲がった。意地悪をしないで、と。恥ずかしいから自分からは言えない、と。

しかし俺は勃起したクリトリスを舌先でぐりぐりと押しつぶすように突き続ける。

「んんっ……ああっ♡」

俺の頭を握るリリカの両手は切羽詰まっていた。カチカチに硬直したクリトリスが、彼女の全身を流れる痺れが限界だということを知らせた。

「……ジン……欲しい」

どんな時も凛然としたリリカの口から、こんな弱々しい声が出るとは思いもしなかった。なんて愛らしいのだと感銘すら受けたが、俺の中の鬼はまだまだ許さないと舌で更にぐりぐりとクリトリスを突く。

「あつ、いい……んっ、つくう♡」

リリカは再びクンニで達したようだった。俺の頭を握る両手は一瞬強張ると弛緩した。頭上からはあはあと浅い息遣いが聞こえる。その呼吸の合間に、「……おちんちんが、欲しい……」と聞こえた。

俺は再び立ち上がるとやや腰を下ろしつつ彼女と抱き合う。逆にリリカがつま先立ちになると、俺達はまず対面立位で繋がりが、そして俺はリリカの太ももの付け根を掴んで持ち上げ、彼女の背中は扉に押し付けた。彼女の両腕は俺の首に巻き付く。

リリカの太ももはスベスベツルツルとした肌触りながらも、むっちりとした肉感で指を悦ばせてくれた。

所謂駅弁と呼ばれる体位で腰を振る。激しいピストンによってリリカの背中が扉をがたがたと揺らした。

「やつ、ジン……激しいって」

「あまり悠長にしてられる時間はない」

「でも音とか」

「それは大丈夫。リリカも知ってるだろ？ 絶対に外には漏れないから」

「……うん」

昼休みの学校のトイレで、俺はリリカを生男根でズボズボと遠慮なく突き上げる。

「んっ、んっ、んっ」

わかっているとはいってもやはり恥ずかしいのだろう。リリカは必死に喘ぎ声を抑えていた。俺は先程教室で見せていた、リリカとシュウジのただならぬ空気を思い出して、嫉妬で腰を振る。

「あつ、あつ♡ だめっ、ジンっ、深いとこ、声出ちゃうっ♡」

だから大丈夫だ、と言わんばかりに腰を振る。リリカは蕩けつつも不満を訴える視線を俺に向けた。

「……ジンのことは信じてるけどさ、やっぱり恥ずかしいよ」

「こんなに濡れてるのに？」

俺達の結合部からは、ぴちゃぴちゃと愛液が垂れる音が聞こえていた。

リリカは耳まで真っ赤になると、俺の唇をカリッと軽く噛んだ。俺はそのまま艶やかな唇にちゅうっとして押し付けたまま呟く。

「俺が責任持って口塞いでやるから」

その言葉にリリカは小さく頷き、彼女の方からも唇を強く押し付けてくる。

リリカのシャンブーや吐息の甘い香りが、そんな甘言と共に鼓膜をくすぐる。若干理性を飛ば

す。
ちゅううつ、と音を立てて唇を吸いあいながらピストンを更に激化する。

「んっ……♡ あっ……♡ はあっ……♡」

扉が外れそうな勢いで腰を振る。リリカは両手両足を使って俺をぎゅっと抱き留めてくれた。それに伴いキスも激しくなり、俺がリリカの歯茎を舐めると、リリカも同じことをして応戦してくる。

クチュクチュという淫らな水音が、上下どちらから聞こえてくるのかすらわからなくなる。

「ジンっ♡ ジンっ♡ おっき♡」

俺達はもう互いに限界だった。同時に絶頂するのは目前。そんな瞬間、トイレの入り口から足音が聞こえる。そして用を足す音が聞こえた。

一般人を相手に気配を遮断する魔術は基本も基本なので完璧に作用するが、人払いは少々高難易度なので、こうなることは俺は十分予測していた。

俺は一応ピストンを止めたが、二人の息遣いはもう恍惚の最高潮に達しようとしていた。肉槍はリリカの肉壺によるウネウネした挿入感で破裂寸前だし、リリカの肉壺はドクドクと脈動する肉槍にキュンキュンと喘いでいた。

俺はリリカに小声で尋ねる。

「……このまま去るのを我慢して待つか、それとも俺の魔術を信用して、今すぐ思いつき気持ち良くイクの。どっちが良い？」

リリカは眉を八の字に下げて、きゅっと下唇を噛むと、「……意地悪」と言いながらちゅっとキスをした。俺達の結合部からは、互いの愛液が混じった粘液が糸を引いて垂れていた。

「……ジンのこと、誰よりも信じてるよ」

リリカは若干いつも通りの凛々しさを取り戻し、俺に信頼の視線を向けると言葉を続けた。

「……あたしの中でガチガチの生ハメちゃんばで、思いつきおまんこして……♡」

通りすがりの誰かが用を足し終わり、ファスナーを上げる音がした。同時に俺は激しくリリカを突き上げる。

「ああっ、あっあっ♡ 来るっ、来るっ♡ 大きいのっ、深いとこまで来るっ♡」

「リリカの可愛い喘ぎ声、外に聞こえてるかもよ」

「無理っ♡ もう我慢できないっ♡ ジンの硬いおちんちんで、こんなズンズン突かれたら、もう我慢できないよっ♡」

「リリカ、射精すぞ」

「来てっ、来てっ♡ ジンの熱くて濃いザーメン、いっぱいおまんこに注いでっ♡」

リリカの四肢が俺をきつく抱擁すると、同時にヒダヒダした生膣がぎゅうぎゅうに男根に纏わりついた。

「ううっ！」

リリカの中でドクドクと魔力と嫉妬と優越感と、なにより恋心の塊を放出していく。リリカはそれを全身をヒクつかせながら受け止めてくれた。

通りすがりの誰かは手を洗いそして何事も無かったかのように去って行ったが、俺達は気にする様子も無くちゅちゅとキスを続ける。

そしてリリカに「……射精しきった？」と聞かれると、俺は頷き、リリカの両脚をそつと着地させる。

リリカはそのまま腰を下ろすと、まだ雄々しさを失っていない陰茎に舌を這わせた。付着した精液を舐め取り、咥えて、そしてちゅちゅと音を立てて吸引した。

昨晚の生エッチをした時から、リリカは自らこのお掃除フェラをするようになっていた。勿論精液を無駄にしないためという大義名分もあるが、それ以上に雌として奉仕しているような色香を感じる。

今も俺を見上げながら、じゅぽつ、じゅぽつ、とフェラチオする様子はどこか色めきだっている。

同時にリリカは、先程注ぎ込んだ精液をその場にドロドロと垂らしていた。

俺が便座に座って、「おいで。もっと注いでやるから」と言うと、リリカは俺を跨ぎ、そして腰を前後にグラインドさせ始めるのであった。

午後の授業が始まる直前に俺が先に席に戻ると、前の席のシュウジが「ギリギリだったな」と笑いかけてきた。その屈託のない笑顔は続いて入室してきたリリカに向くと、ぽうつと見蕩れた表情になった。

外見上は何も変化は無いが、今のリリカはフェロモンを放出しまくっているのだろう。クラスメイトもリリカが気になって仕方がないようだ。

彼女に集まる視線が俺は誇らしかった。

「……なんかめっちゃ色っぽい」

シュウジが独り言のようにそう呟くと、俺に向き直り、「そういえばさっきさ、トイレが満員だったから最上階のトイレでしてきたんだよ。あそこ誰も使わないから綺麗で良いな」と笑った。

魔装少女となったリリカは普段の校舎の屋上ではなく、最初から運動場に降り立って迎撃の態勢を整えていた。

企業の監視班からの連絡によると受肉した祟りは二体。それもどちらも人型で、徒歩でこちらに向かっているとのことだったからだ。

警察なども協力して、交通規制が敷かれた道を歩く『ガンマ』と『デルタ』の姿を俺はモニタ越しに観測する。

筋骨隆々とした巨大な体躯。歩く度にコンクリートの地面が若干凹んでいることから、その大仰な巨躯が張りぼてではないことが窺える。どちらも猫背がひどいが体長三メートルほどはあるだろう。

『ガンマ』は馬の頭をしており、『デルタ』は牛の頭をしていた。どちらの四肢も人間の胴体

ほどは太い。

彼らの進路を遮るように放置されていた軽トラックを、片手で易々と持ち上げてそのまま小石のように放り投げた。

「……リリカ。とんでもないのが来るぞ」

「でしようね。離れていてもビリビリと伝わってくる」

そう答える通信先のリリカの返答に委縮は全くない。

「躲^かして穿つ。あたしがやるのはそれだけ」

やがてその二頭が運動場に顔を出す。牛の頭をした『デルタ』は立ち止まり、馬の頭をした

『ガンマ』が我先にとリリカと対峙した。

「ゴフツ、ゴフツ」と鼻息を荒らげながらリリカと睨み合う。

「リリカ喜べ。理由はわからないが一对一でやってくれるみたいだぞ。武骨そうに見えてサービ

ス精神旺盛らしい」

俺の軽口に、リリカが虚勢を張るように鼻で笑う。

「馬なのは頭だけなのね。それであたしのスピードに張り合うつもり？」

俺もリリカも、勿論相手を馬鹿にしているわけじゃない。その逆だ。全身が鳥肌を立たせるほどの存在感。遠くからモニタ越しに見ている俺ですら胃を握りしめられたかのように委縮する。

それを目前にしたリリカが受け取る威圧感がどれほどのものか想像すらできない。それでもリリカは一步も引かず、臆さない。

珍しく俺の研究室で一緒にモニタをしていた花鳥院シランが、安物の椅子に不快そうに腰掛け、その長い脚を組み替えながら言った。

「手下である馬頭に様子見させているんでしょうね。どう見ても牛頭の方が強いわ」

「……それでもリリカは勝ちます」

俺の言葉に花鳥院シランは冷たく言い放った。

「柳楽ジン。忠告しておいてあげるわ。魔装悪鬼の変身準備をしておきなさい」

リリカの脚部が魔法陣を描いて発光する。同時に常人には到底目で追えないスピードで、ガンマの周囲を稲光のように駆け巡ると、その巨体の背後を取った。

「喰らえっ！」

リリカが咆哮する。両腕は既にドラグーンの発射準備を完了させていた。その刹那、花鳥院シランは気だるそうに言った。

「魔装少女と魔装悪鬼。二人掛かりでもあのどちらの一匹にも敵わないわよ」

右腕による渾身のドラグーンが無防備なガンマの背中を直撃した。

杭の先端は突き刺さっているものの、分厚い胸までは貫通していない。

更には突き刺した部分の筋肉を凝縮させて、ドラグーンを掴んで離さない。

「リリカっ！ ドラグーンを捨てろっ！」

俺の指示よりも早くリリカは右腕の兵装を解除して離れようとする。しかしガンマは上半身を捻りながら背後のリリカを裏拳で襲う。まるで台風のように。リリカの機動性を上回る。

残った左腕のドラグーンを裏拳に合わせたが、相殺どころかドラグーンは粉々に割れ、そのままりリカの胴体は拳で弾き飛ばされた。

花鳥院シランがそれ見たことかと言う。

「魔装悪鬼になるのが怖いのかしら？ 闇に取り込まれるのが、いえ、自身がその闇を取り込もうとしているのが怖いのかしらね？」

彼女の言う通り俺はこれ以上魔装悪鬼になるのが怖かった。少しずつ、少しずつ、自分の中に闇が広がっていくのを感じた。

最初こそ完全に振り回されているだけだったが、今では自分と鬼との境界線が曖昧になってきた。

それは魔装悪鬼状態の制御可能というメリットと共に、普段の俺にあの狂暴性が、負の感情が、根付くようになってきたように思えてならないのだ。

しかしそんなことを言っていられる状態ではなかった。魔を装い鬼となった俺は数秒で現場に到着する。

ガンマはリリカの手を吊りあげるように持ち上げていた。足はぶらんと浮き、明らかに意識は失っていた。

狂暴性と闘争心が増幅されるはずの魔装悪鬼が、デルタとガンマを前にして膝を震わせた。リリカ、お前はこんな奴らの前に立てたのか。

その勇気に敬意を払うと共に、そんなにシュウジが好きなのかと嫉妬する。

しかしその気持ちだけは理解できる。今の俺も、お前を救うためなら命は惜しくない。

ガンマが鞭をしなすようにリリカを地面に叩きつけると、足を上げて彼女の頭部を踏みつぶそうとした。コンクリートの地面ですら陥没させる踵なら、リリカの頭部など果実のように割れるだろう。

翼を生やした俺は突進の体勢を取る。目的は攻撃ではない。とりあえずリリカは救う。「企業」は魔装少女の成果を欲している。最悪でもリリカは保護してくれるだろう。

その後奴ら二人相手に俺がどこまでやれるかだ。

リリカがガンマに与えたダメージは決して軽くない。俺が命を賭せばなんとかガンマは倒せるかもしれない。しかしデルタは無理だ。

おそらく俺とリリカが二人掛かりでも相手にならなかつただろう。

シュウジ、悪い。守れないかもしれない。

鬼に成り下がった俺が、心の中で友に救いを乞うた。そんな自分が不思議だった。俺の中で善と悪が、人と魔が混ざり合っていく。

シュウジを守りたいと願い、嫉妬もする。

リリカを愛したいと願い。犯したいとも思う。

そんな俺の肩を、まるで白魚のような指を有する細い手が、そっと叩いた。

「下がっていなさい」

俺はそれだけで、ガンマとデルタ以上の怖気を感じた。

花鳥院シランがワインの瓶を手にながら、俺の前を優雅に歩いていく。普段から着こなしているブランド物のパンツスーツが光を帯びると、深紅のドレス姿に变身した。

その姿が有する魔力の密度は、まるで極限まで凝縮されたダイヤモンド。

俺も知らされていなかったその事実にただただ驚愕する。

生粋の魔法少女。現在国内で千人程度しか存在せず、尚人口減少が止まらない絶滅危惧種。戦後から常に日本を怪異から守り続けてきた守護者。

花鳥院シランはその一人だったのだ。

ガンマはもはやリリカなどどうでも良さそうに、花鳥院シランに向けて威嚇の鼻息を荒らげた。静観していたガンマよりも格上のデルタも同様に、焦燥感すら滲ませて臨戦態勢に入る。

俺とリリカが二人掛かりでも歯牙にも掛けなかったであろうデルタが、怯えすら見せて狼狽している。

その装甲とも言えない衣服。リリカよりも細身にすら見えるスタイル。武器すら所持していない彼女が、まるで真夜中の散策とばかりに優雅な一歩を進める度に、二匹は唸り声を上げながら後ずさった。

花鳥院シランがリリカのもとに迫り着く。介抱どころか一瞥もせぬまま言う。

「重装型ではない甲種ではなく、運動性能に勝る丙種とはいえ、魔装少女リリカ。あまりに脆いわね。本当にこれがわたくし達の後釜になれるのかしら」

そして手にしていた変哲も無いワイン瓶を逆さまにすると、地面にその赤い液体を垂らした。それはまるで鮮血に染まる水面のような地面に広がった。

「とはいえ量産性。更には指向性を持ったわかりやすい兵装。なにより個々での出力偏差が少ない点は確かに魅力的ね。わたくし達の中にも刀剣や銃を得物とする同胞はいるものの、将棋の駒やら楽器などふざけているとしか思えないもので戦っている者が半数以上よ」

ガンマとデルタが猫に追いつめられたネズミのように、玉碎覚悟で彼女に襲い掛かった。

魔装少女を一撃で砕いた拳が左右から襲い掛かる。しかし彼女は夜空を見上げて億劫そうにため息を吐いただけだった。

「ゆめゆめ精進を忘れぬよう。いずれわたくし達魔法少女は絶滅する。その時この国を守るのは貴女達なのだから」

赤く染まった地面から、無数の赤い蔓が生えた。それらは一瞬でガンマとデルタの全身に絡みつき、そしてその動きを拘束した。ギリギリと骨まで軋ませるほどに食い込むと、二体の怪異は振り上げた拳を下ろすどころか悲鳴を上げた。

格闘技が筋肉や体格だけで勝負を決するわけではないように、魔力の戦いは戦闘センスや相性など様々な要素が関係する。

しかし花鳥院シランとこの場に居るそれ以外の存在は、あまりに魔力の密度が違いすぎる。まさに大人と子供であった。

蔓から真つ赤なカボチャが生えると、ハロウィンのお面のように大きな口を開き、ガンマの頭

部をトマトのように噛み砕いた。

デルタに絡みつく蔓には所々でブドウめいた赤い果実が生り、それらが同時に手りゅう弾のように爆ぜると頑強な巨躯が嘘のように爆散して消失した。

「まあたくしも、他人のことはあまり言えないふざけた能力なのだけれども」

二体の瘴気が霧消して朽ち果てると、花鳥院シランは深紅のドレスからパンツスーツの姿に戻り、またリリカには目もくれないまま戻ってくる。

魔装悪鬼の姿のまま、膝をガクガクと揺らしている俺の横を、彼女は小さく欠伸をしながら通り過ぎた。

「一つ。わたくしの手を煩わせるのはこれが最初で最後。二度目は無いと思いなさい。一つ。惚れた女を守るのに一瞬でも躊躇いを見せるなど腰抜けの極み。自ら去勢しなさい駄犬」
まさしく桁違いの力を見せた彼女に、俺は戦慄で寒気を覚えながらも返答する。

「……躊躇いなど見せていない」

花鳥院シランが愉快そうに振り返った。

「鬼の姿のまま普通に喋れるようになったのね。すっかり鬼を飼い慣らしたようだなによりよ。もしくは元々貴方の心に巣食っていた鬼だったのかしら」

「……鬼だろがなんだろうが、目的のためなんだったって利用してやりますよ。この醜悪な感情も姿も、全て俺自身なのだから」

矮小な自尊心と共に、魔装悪鬼の装甲が剥がれていく。彼女の指摘する通り、俺は渦巻く負の

感情と共存するようになっていた。

常に獣の息遣いを耳元で感じる。振り払ってもそれは俺に纏わり続ける。

逃れられない俺自身の声。

花鳥院シランは立ち止まると、スーツのポケットから折りたたまれた一枚のコピー用紙を取り出すと、それを広げて無造作に離す。風に乗って俺の足元に落ちたそれを拾い上げた。

「祠の最後の番人。イブシロンの資料よ。その撃破及び祠の破壊を以て、試験型三種魔装少女リカの最終試験としなさい」

俺は資料に目を通すと思わず笑ってしまった。

「……冗談でしょ？」

「あら、先程までの威勢はどこへ行ったのかしら」

「……先程戦ったガンマやデルタの比じゃない」

今の俺とリリカでは敵うはずもないクラスの怪異。これこそ魔法少女の出番だろう。

「鬼でもなんでも利用するのでしょうか？」

そうだ。鬼だろうが、魔法少女だろうが利用してやる。もうなりふり構ってられない。

あたしが目を覚ますと見慣れない天井が映った。どうやら車の中らしい。『企業』が用意した救護車かなにかだろう。

ガンマとの戦闘から殆ど時間が経っていないのは、ろくに指先も動かせないダメージが物語っ

ている。それでもあたしは生きていた。しかしそのことに安堵は無い。シュウジはどうなったのだろうか。彼を失ったあたしの人生に意味は無い。

車の窓ガラスの外から、ジンと花鳥院さんの会話が聞こえてくる。まだ声も出せないぼんやりとした意識の中で、二人のやり取りを聞く。

「お願いします。最後も手を貸して下さい」

次が最後。ジンのその言葉を聞いて、あたしは漸く生きた心地がした。最後の祟りが存在するということは、即ちシュウジの無事を意味する。

しかしあたしは負けてしまった。『企業』が手を貸してくれたのだろうか。ジンの口調は必死だ。最後の祟りはとてもあたしじゃ無理だという判断なのだろう。ジンがそう考えたのなら、きつとそれは正しい。

あたしは全身に激しい痛みを抱えながらも歯噛みした。悔しい。愛する人を自分の手で守れない。涙が零れる。

「二度目は無いと言ったはずよ？ それにわたくしに頼み事をするのに、頭がわたくしの靴より高いのはどういう見なのかしら？」

ジンがその場に跳き、そして額を地面に擦りつける音が聞こえた。信じられなかった。あのプライドの高いジンが、土下座している。

更に信じられないことが続く。

「靴裏が土埃で随分汚れてしまっているでしょう？ 貴方でもそれくらいの仕事なら任せられる

のかしら？」

少し間を置いて、ペチャペチャと犬がなにかを舐めるような音が聞こえる。ジンのプライドが引き裂かれる音も聞こえる。そして同時に、それでも守りたいなにかがあるという決意の鼓動があたしの胸と共鳴した。

花鳥院さんは随分と長い間、靴裏をジンに舐めさせていた。そしてその挙句に、「なんだか余計に汚れてしまった気がするわね。靴はこのゴミ箱に捨てていくから処分しておきなさい。あと当然だけれども、もうこれ以上手は貸さないわ。ご自慢の魔装少女でなんとかしなさいな。あくまで『企業』が欲しているのは、魔装少女が魔法少女の後釜足りえるかの確証。貴方の目的など知ったことではないわ」

退屈な余興に失望したかのように去って行く彼女の足音が聞こえる。

這いつくばったままのジンの背中が無力感で震えているのが、高熱に浮かされるあたしにも鮮明に伝わる。当然だ。あたし達は相棒なのだから。

けちょんけちょんにやられて今は指先に力を込めることすら叶わないけど、あたしの心が彼に呼応して燃え滾る。ジン。わかってる。このままやられっぱなしなあたし達じゃないよね。

俺はリリカを救護車に残して真夜中の校舎裏に向かった。ただ一人になったただけだが、シュウジとリリカの恋が結ばれた場所だと気が付くと、余計に胸が灼ける思いがした。吐き気すらする。

大きな木が目に入ると、俺はそれに頭を打ち続けた。最初は軽く、しかしやがてそれは鈍い音を響かせ始め、しまいには額から血が流れた。

花鳥院シランは俺の懇願を酒の肴にすらならないと一蹴した。

鼻筋の横を血が流れていく。鬼と混じりつつある俺の血はまだ赤いのだろうか。少なくとも溶岩のように熱いのはわかる。俺は抑えきれない笑いを零した。

どういつもこいつも馬鹿にしゃがって。

ここまで虚仮にされたら逆に清々しくなってきた。リリカのような実直なものではないにしても、俺も不屈の精神とやらを秘めているらしい。

あの花鳥院シランとかいうクソ女は、いずれワインに下剤でも混入させて粗相をしでかしてしまふ映像をネットに流出させてやる。あの程度で俺に上下関係を疑^うけたと思ったのなら大間違いだ。必ずこの借りは返す。

俺と鬼の狭間は今や不鮮明で、あの狂暴性が徐々に侵食しつつあるのを感じるが、同時にそれは元々俺が保有していた火薬庫でしかない。憤怒も嫉妬も、劣等感ですら使いこなしてみせる。

花鳥院シランに対する憎悪はひとまず置いておいて今は最後の祟り、『イブシロン』が火急の案件だ。

もうここまで来たら余計なことは考えない。俺にプライドが残っているとすれば、それは勝利を掴み取ることだけだ。

俺の作り上げた魔装少女リリカにイブシロンを撃破させて、そしてシュウジも守る。あいつは

俺のただ一人の友達だ。その上でリリカを……。

「……ジン」

振り返るとリリカが松葉杖をついて立っていた。俺にハンカチを手渡す。その視線には憐憫も同情も無い。俺と一緒に強くなりたいという魔装少女の力強い意志だけを感じる。それでこそリリカだ。

俺はハンカチを受け取り血を拭いながら言う。

「……最後の祟り、イブシロンの資料を渡された。真正面からやれば確実に勝ち目は無い。その上で勝つ策が俺には有る。非常に特殊な作戦で、下準備もかなりの無茶はするが……乗るか？」

リリカは是非も無いといった凛々しい表情で頷いた。

「いやあ、リリカの部屋でこうして三人で集まるのって久しぶりじゃないか？」

学校帰りにそのままリリカの部屋に三人で集まる。リリカの部屋は如何にも女の子っぽい雰囲気

気で甘い香りがした。

そんな中、テーブルを囲んで茶菓子や飲み物を摘まむ俺達の雰囲気は和やかそのものだった。

「受験勉強ばかりじゃ息が詰まるからな。たまにはシュウジの馬鹿デカイ声を聞いてリフレッシュしたいんだよ」

「わっはっは。俺の美声で良かったらいつでも楽しんでくれ」

いつもの俺の皮肉めいた口調に、いつものシュウジの朗らかな笑い声。リリカだけが少しだけ

「おいリリカどうした？　なんか元氣無くないか？」

シュウジが目ざとく恋人の変調に気づくと、リリカは苦笑いを浮かべて、「そんなことないよ」と、これから自ら行うことへの葛藤と罪悪感を滲ませた。そしてそれと同等の覚悟と決意も。このままでは全員共倒れは必至。今のリリカでは到底イブシロンを止められず、シュウジはその餌食になる。

当の本人だけが無邪気に笑っている。

「受験終わったらまたこうやって三人で遊びたいよな」

シュウジは屈託なくそう言った。勿論リリカと二人っきりで過ごしたいという気持ちもあるだろうが、それとは別で俺を含めた三人で居たいという友情も感じる。

俺だったらリリカと付き合えたらもうずっとリリカと二人で遊びたいと思うだろう。それなのにこの馬鹿は本気で俺とも一緒に居たいと言う。

こんな馬鹿じゃなければ任務度外視で守りたいなどと思わなかっただろう。

リリカと同様に俺の胸にも棘が刺さる。同時にそれは鬼の餌ともなった。まだかまだかと耳元で急いてくる。俺はその衝動を押さえつけるように胸を鷲掴みにした。

俺がシュウジとリリカを大切に想う気持ち、奴にとっては背徳という甘い蜜になるのだ。いや、奴などという他人行儀な呼び方は失礼かもしれない。あくまで俺自身だ。

「今年の夏こそは山が良いな。去年はお前ら二人に多数決で海にされたけど、今年こそは山だからな」

「アホか。俺もリリカも受験でそれどころじゃない」

「む。そうか。なら再来年は山だぞ」

「それまでお前との腐れ縁が続いていたらな」

俺の悪態にシュウジは痛快そうに笑った。

「あつはつは。当たり前だろ。俺ら三人はずっと一緒なんだから。なあリリカ？」

その言葉にリリカは下唇を噛んで、ただの日常会話には大袈裟なくらい神妙な面持ちで頷いた。そう在りたいと強く願う気持ちが溢れている。

シュウジはリリカのそんな真剣な様子を誤解した。この場で自分達が交際していることを俺に伝えるべきなのでは、とリリカが訴えている。シュウジはそう読み取ったのだ。

シュウジは少し照れ臭そうに、覚悟を決めたような表情を浮かべる。同時に薬が効いてきたようにで臉が落ち始める。

「……実はだな……ジンに伝えたいことがあってだな……」

俺にリリカと交際していることを報告しようとする。

「……うん？　なんだか……むう……」

やがて座椅子に深くもたれかかって、天井を仰ぐような体勢で眠りに落ちた。

「……シュウジ。ごめん」

罪の意識で張り裂けそうな胸を押さえながらリリカはそう言った。それでいい。それでもっと

強くなれる。そんなリリカの手を引いてベッドの上に腰掛ける。

すぐ傍で寝息を立てているシュウジをよそに、俺達はキスを始めた。リリカはひどく強張っていた。身体だけではなく心が固く拒絶していた。

最初は唇をちゅちゅと軽く啄みあい、そしてすぐに舌を挿し込んでクチュクチュと巻き付けあう。リリカはその間、ずっと申し訳なさそうに流し目でシュウジを見ていた。

舌同士に唾液の糸を引きながら顔を離すと、「苦しいか？」と尋ねる。リリカは黙って頷いた。当然だ。リリカの瞳は涙を浮かべていたが、それを零すまいと必死に耐えていた。

「それでいい。その気持ちを保ち続けろよ」

そう言う俺は再び深いキスを再開し、右手をスカートの中に差し込む。ショーツの上から陰唇をなぞると、リリカは既に湿っていた。

「リリカも触って」

リリカの手がスラックス越しの俺の勃起した陰茎を擦った。彼氏の手前ということもあり、その手つきは少し遠慮がちだった。

俺の手がショーツの中に入り込み、ちゅちゅと音を鳴らすと、リリカも俺のベルトを外し、ファスナーを下げて、男根を取り出すと手で扱きだす。

舌同士がくにくとゆと強く絡み合い、俺達の息遣いはあはあと浅くなっていく。

リリカのクリトリスは既に勃起しており、それを摘まむ度に、「んっ、んっ」と肩を震わせた。

俺の男根も我慢汁を垂らして、それがリリカの手に馴染むと、ニチャニチャと卑猥な摩擦音を鳴らした。

リリカの女の子っぱい部屋の甘い香りが、別の甘さと熱気を帯びだす。

リリカの舌の腹に唾液を落とし、それを受け取ったリリカが口を閉じて咀嚼しているところに、「シュウジとはキスしたのか？」と尋ねる。リリカは切なさうに首を横に振ると、こくりと俺の唾液を嚥下した。

再び顔を近づけると、リリカは一瞬躊躇いを見せた後、顎を上げて俺の唇を迎え入れた。ちゅう、ちゅう、と吸い合うような甘いキスをする。

「フェラしろよ」

「……うん」

彼氏の前で命令口調になって奉仕を上から目線で命じるのは、傷ついた自尊心を癒すには十分すぎた。

リリカはベッドの上で女の子座りをしたまま顔を、胡坐あぐらを掻いた俺の股間に埋めていく。その途中で何度もチラチラとシュウジを覗き見ていたのがわかった。その様子だけで陰茎が勝ち誇るようにビクビクと血管を浮き上がらせた。

イブシロンを撃破するには策が有り、それを実現させるには一時的でも構わないので、魔装少女のあと少しの性能上昇が必要だった。しかしその『あと少し』は尋常な訓練や精液の注入では中々達成できない。本来魔力の鍛錬というのは長い年月を掛けるものだ。

そこで必要になる付加要素は、極度の恥辱や罪悪感、敗北感などだ。互いの高揚は前提として、それらの激しい感情の軋轢は更に精液からの魔力吸収率を上げる。

更に、これはリリカには説明していないが、男側の優越感など歪んだ情念もそれを後押しする。

今思えば最初に魔装悪鬼として犯した後、リリカの魔力があれほど増幅したのは、それらの組み合わせの極致のような交接だったからかもしれない。

「いつも通り丁寧によれよ？」

「……わかってる」

俺の煽るような言い草がわざとだとリリカは理解しているが、それでもやはり苛立ちを隠せない声色で返す。

実際半分はイブシロン撃破のための演技だ。しかし半分は俺の心臓に混じった鬼に唆されるようにこの状況を愉しんでいる。全身を巡る俺の血はどこか獣臭い。

身勝手な理由で呪われて、しかも惚れた女を横取りされた。そんな奴のために汗水を垂らしてきたのだから、これくらいの役得は当然だ、と耳元で誘惑を囁いてくる。

ちゅう、ちゅう、と龟头に優しくキスをする、そのまま根本に向かって、ちゅう、ちゅう、ちゅう、と軽快に唇を押し付けていく。

根本まで到達すると、睾丸を優しく舐め上げ、舌で転がすように愛撫した。頬張ると睾丸が彼女の口腔の温もりに包まれ、肉角がビクビクと揺れた。

俺はリリカの頬を撫でながら言う。

「シユウジになんしてるか教えてやれば？」

リリカはレロレロと舐める舌を止めると、ちゅう、と睾丸に吸い付くようなキスをして、そのまま唇を袋に触れさせたまま呟く。

「……ジンの金玉を、あたしの口まんこで気持ち良くして、ザーメンたっぷり作ってもらってる……」

「なんのために？」

「……あとでこの大きいおちんちん、あたしの奥までずっぱり生でハメて、濃くて熱い赤ちゃん汁をドクドク注いでもらうため……」

俺が両脚をM字に開いて、少し腰を突き出すように浅く座ると、リリカは何も言わずに更に顔を下げていった。

睾丸から下に這っていく舌は俺のアナルに辿り着く。そのままベチャベチャと音を鳴らして舐めると、時々ツンツンと舌先で突いてくる。

ちゅう、ちゅう、とキスもしてくるリリカに対して、「もっと舌の腹しっかり使ったり、強く吸ったりしろよ」と横柄に言う。

リリカは言われた通りに、舌の腹全体を使ってねっとり舐め上げると、アナルをぐりぐりとほじるように舌先で突き、そして唇を押しつぶすようにキスをして、ちゅううう、と長く音を鳴らして吸った。

俺はその度に頭の中に恍惚の羽を舞わせた。

依然として俺のアナルを吸うリリカの頭を撫でながら、シユウジに声を掛ける。

「……お前の彼女の睾丸舐めとアナル舐め、すごいエロいのな」

龟头が優越感でヒクつき、我慢汁を勝鬨のような勢いで垂らす。それがアナルまで届くと、リリカはそれを舌で綺麗にするように、裏筋を舐め上げていく。

その途中で、「リリカのフェラテク、シユウジに見せつけてやれよ」と頭を撫でながら言う
と、リリカは若干涙目かつジト目で俺を睨み上げ、そして冗談っぽく肉竿の途中をカリッと甘噛
みした。

それでも龟头を咥えると、リリカは丁寧にしゃぶった。最初はゆっくりと唇を滑らせていき、
その中では唾液を塗るように舌を這わせた。

ちゅっばちゅっば、ちゅっばちゅっば。

俺達はどちらからともなく両手の指を絡めて握り合った。同時にリリカのフェラチオは色香を
増す。

じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ、じゅぽっ。

「あゝ。リリカのフェラチオマジで気持ち良い。もう結構したもんな。最初にしゃぶったのいつ
だっけ？」

リリカが口を離すと、男根はべっとり涎塗れになっており、リリカの唇と龟头も唾液が繋がっ
ていた。

「……シユウジとの初デートの前」

「声小さいぞ」

リリカがぐっと下唇を噛む。イブシロン撃破のために必要な工程だと理解していても、やはり
感情は抑えきれない。

「……シユウジを待たせてる間、ジンのおちんちんずっとしゃぶってた」

「それでいっぱいごっくんしてたよな？ あれデート中気になったんじゃないか？」

「……シユウジと楽しく話してる間も、ずっとお腹の中でジンの熱いザーメン感じてた」

リリカは罪を告白するようにそう言いながらも、ちゅ、ちゅ、と龟头にキスをする。

「あれからリリカ、フェラチオ大好きになったもんな？」

「……そんなこと、ない」

「じゃあもうハメる？」

俺の優しい声色に、リリカは俺に意地悪と言いたげな視線を送り、そしてシユウジにも申し訳
なさそうな流し目を送りながらも、裏筋をレロレロと舐めた。

「……もうちょっと、舐めてたい」

「ちんこならなんでもいいのか？」

「……ジンの大きくて、遅いちゃんぽをしゃぶりたい」

「いいぞ。好きなだけしゃぶりな」

リリカはうっとりするような瞳で俺を見上げると、はむっと咥え、そして首を上下に振った。

じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ。

その卑猥な口淫の音と感触で、背中をゾクゾクとさせながらも顔をシユウジに向ける。

「リリカのフェラ、吸い付き半端無いからな？ 舌もナメクジみたいに巻き付いてくるし。その上ザーメン飲むのも好きだし。このまま射精したら口離さないままごっくんするんだぜ？ なぁリリカ。精子飲むの好きだよな？」

リリカはじゅっぽじゅっぽとしゃぶりながら、耳まで真っ赤に染めながら小さく頷いた。

「いっぱい射精して欲しいから、いつも先に金玉たつぷり舐めるんだもんな？」

なるべく根本までしっかりと啞えこみながら、「……んっ」と掠れた吐息で返事した。

「じゃあそろそろ、セックスしようぜ」

リリカの頭をほんぽんと撫でると、リリカは名残惜しそうに口を離し、そのまま裏筋にちゅっちゅとキスしながら顔を下げていき、睾丸は特別長く優しいキスで吸った。

そのまま顔を埋め、アナルをちゅっちゅと唇で啄み、べろべろと舐める。その頭を撫でながら声を掛ける。

「射精したら、いつも通りゆっくりお掃除フェラさせてやるからな」

リリカはその返事代わりに、ちゅっちゅ、と深い口づけをアナルにした。

俺はストラックスと下着を脱ぎ、リリカにはショーツだけを脱がせる。制服姿のまま正常位になると、ぬぷりと音を鳴らして俺達は一つになった。

その際にシユウジに向かって言う。

「リリカってマジでフェラチオ好きだからさ、しゃぶらせとけばグシヨグシヨになるから」

「……やだっ」

リリカが俺の肩を軽く叩く。俺は腰を振りながら笑う。

「だって本当じゃん」

「あつ、あつ、あつ、あつ♡」

ベッドがギシギシと軋むと、リリカが不意に視線を逸らす。

「……だって、ジンのおちんちんが、大きくていやらしいからだし……」

「これ？」

「やっ、あつあつ♡ これっ♡ この、おっきいの、エッチなんだもん♡」

「でもそんなエッチなちゃんこ好きなんだろ？」

「やだっ、ジンっ、お願い……これ以上は許して……」

この行為がシユウジを救うためだと理解している。それでも乙女の羞恥は限界をとうに迎えている。

俺はリリカに眼差しで問う。その程度の覚悟と決意なのかと。

リリカは「……うう」と凛々しくも可憐な顔立ちを弱らせると、手の甲で目元を隠して声を震わせて言った。

「……シユウジ、本当にごめん……でも大好きだから……絶対に守るから」

そして下唇をぐっと噛むと、力強い視線を俺に向けた。両手を俺の首の後ろでぎゅっと結ぶ。

俺は横目でシユウジを盗み見しながら、全身を歓喜に打ち震えさせて射精した。リリカが愛す

る男の前で、リリカを力づくではなく心まで蕩けさせた。男としての充足感が、俺の身体と意識全体をドクンドクンと鼓動のように打ち鳴らす。

根本まできっちり挿入し、際限なく続けられる射精にリリカはよがりながらも、「……ジン♡あたしの子宮、そのままジンの赤ちゃん汁でいっぱいにしちゃっていいからね♡♡」と愛らしい表情で言う。

俺は暫くシュウジの気配をおかずに、肉竿で感じるリリカの温もりと肉壺の抱擁を愉しみつつ、精を吐き出し続けていた。

射精は収まりを見せても男根は筋肉の塊で在り続けた。一旦引き抜くと、リリカは、「やつ、ん♡」と名残惜しそうに喘ぎ、「すぐにまた貫いてやるからな」と声を掛けると、「……うん♡」とか弱い声と頷きを見せた。

ちゅう、と恋人のようなまったりと唇を押し付けるキスをする。リリカの上半身を起き上がらせた。

お互い汗だくだったので全裸になる。脱衣の合間合間にも、ちゅう、ちゅう、とじゃれあうようにキスをした。

俺達がシュウジの目の前で全裸になると、リリカはシュウジの方をチラチラと気にしながらも、射精直後でもまだまだ雄々しい俺の肉槍を気にしていた。

俺はリリカの頬に手を添えて、「正直に言ったらさせてやるよ」と言う。

リリカは微かに俯き、その豊かな乳房の間で心臓をきゅっ、と押さえる。シュウジへの罪悪感と

恋心をなんとか宥めようとしてるようだった。

「……ジンの射精ちゃんぽ、あたしの口まんこで綺麗にしてあげたい……です」

俺がご褒美とばかりに、リリカの頸を持ち上げて最初から深いキスをする。リリカの下腹部がキュンキュンと疼いたのが伝わった。

「お掃除フェラさせてやるから、その前に腰をこっちに突き出せ」

リリカは俺とのディープキスの余韻で、舌を突き出しながら、「……ん♡」と返事すると、そのまま緩慢な動きで四つん這いになり、俺に腰を突き出した。

魔装悪鬼に一度貫かれたとはいえ、その菊門はまだまだ無垢なままだった。可愛らしいほどの肉穴。

そこに特製のローションを塗る。あの時魔装悪鬼として使用したものと同様の効果がある。肛門に多少の痒みを覚えさせながら弛緩させ、更には直腸内に浸透して、排泄物など不純物を無味無臭の粘液に分解する。

リリカの肛門からその内部に至るまで、火照るような熱を帯びた。彼女の背中が更に汗を噴き出し、そしてどこかしそうにくねる。

予め用意していたのもう一つ。卓球の球だ。一つ摘まむとそれを、ヒクヒクと蠢くリリカの肛門にぐっと押し当てた。

特製ローションで弛緩していた肛門だが、リリカの精神的な抵抗感によりただでさえ狭い穴がきゅっ、と締まる。到底ボールが入りそうになかった。

「あとでちんこで犯してやるから」

俺が囁くと、リリカの肩甲骨が狭まった。

「ここも、俺専用のまんこにしてやるから」

リリカの全身がキュンキュンと疼くと同時に、卓球の球が、にゅるんと肛門を押し広げて中に呑み込まれた。

「んっ♡」

二個目は容易く入った。

「あっ♡」

三個目を入れると、リリカの肛門は何事もなかったかのように元に戻った。しかし呼吸をするように若干ヒクついている。リリカの息遣いはそれと同様に浅い。

「それじゃ綺麗にしてもらおうか」

俺がシュウジと対面するようにベッドの縁に腰を掛けると、リリカはやや余裕を失った呼吸のまま、その前に座った。俺が座り方を指定すると彼女は黙ってそうした。

つま先立ちで屈んで、膝を大きく左右に開けている。肛門はおろか、先程中出しした精液が床に垂れている。そんなはしたない背中をシュウジに晒している。

リリカはこれ以上赤くはならないだろうという顔色でお掃除フェラを始めた。丁寧な根本から精液を舐め取り、咥えてはじゅるる、と吸った。

その時々で睾丸への慰労のようなキスも忘れない。そんな甲斐甲斐しいリリカの頭を撫でなが

ら優しく言葉を投げかける。

「今からシュウジの目の前で、リリカとアナルセックスするから」

睾丸を頻張りながら、リリカが肩を軽く震わせる。同時にぼとりと卓球の球が一つ床に転がり落ちた。

リリカはふうふうと余裕の無い呼吸で、龟头を咥えると、じゅぽじゅぽと熱の籠ったフェラチオを始める。

「この龟头でリリカの肛門広げて、それでずっばり奥まで挿入してやるから」

じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ、じゅっぽ。

濃厚なチュパ音に隠れて、二個目の球がぼとりと肛門から産卵めいて産み落とされる。彼氏の前で、肛門が捲れるようにむにゅりと開いて球を排泄する姿を見せたリリカの恥辱は、目の前の剛直に絶えることでは逃げ場が無かった。

根本に吸い付くようなキスをしながら俺を見上げるリリカはもう泣きそうで、救済を求めているようにも見える。あんな化け物にも臆さず対峙したリリカが、である。

「……ジン。お願い。恥ずかしすぎて変になりそうなの……」

俺は立ち上がり、座椅子にもたれて寝ているシュウジの前の机を横にどかすと、リリカの両手にシュウジの両肩を持たせて四つん這いにさせた。

「しっかり愛しの幼馴染の顔を見とけよ。罪悪感が大切だからな」

リリカは俺の指示通り顔を上げていたが、到底直視はできていなかっただろう。目を瞑った

り、逸らしたり、しかしそれでも時々覗き見ては、ちくりと胸を痛ませていただろう。それです分だ。

俺が愉しむには、それで十分。

リリカの桃尻を両手で掴み、たつぷりと唾液を纏い、パンパンに膨張した龟头を肛門に押し付ける。

肉厚の輪がしっかりと侵入を阻むが、特製ローションで弛緩したそれは、ぐっと腰を押し進めると、にゅぷ、と独特の音を鳴らして肉の穂先で広がった。

「リリカ。シユウジにちゃんと報告してやれよ」

シユウジの両肩を掴む手に、爪が立つほどに力が籠る。

暫くそのまま肩を震わせていたが、リリカは観念したように言う。

「……今からジンにあたしのお尻の穴、おちんちんを気持ち良くするための性器にしてみようね……ジンの勃起ちんぽ、本当にすごく大きいから、少し広がっちゃって、ジン専用のおまんこになっちゃうと思う……ごめんなさい」

言い終わるや否や、にゆるにゆるにゆる、とリリカの肛門に肉棒を埋没させていく。

「ああっ♡」

肛門部分だけがまさに肉の輪となって締め付けてくる独特の挿入感。なにより尋常ではない結合行為。それに悦楽を感じているのは俺だけじゃないようだ。

肉槍でアナルを貫かれる被征服感や被支配感、リリカを浮遊感で満たしていた。魔装悪鬼と

いう得体の知れない敵ではなく、俺という信頼できる相手で、ある程度の安心感があるのがまた余計に快楽に繋がりがやすかったようだ。

「……シユウジ、あたし達、キスもしてないのに……あたしの口も、膣も、肛門も、全部ジンのおちんちんを気持ち良くするおまんこになっちゃったよ」

ゆっくり腰を引くと、リリカの肛門は吸い付いてくる。そして高さのあるカリが肛門を捲ると、「はうっ♡」と普通の性交時とはまた違ったトーンの喘ぎ声を上げた。

大きめのストロークを繰り返す。

「ああっ、あっ♡ はっ……んっ♡ くうっ、う♡ はあっ、はあっ……♡ あっ、いっ♡」

「痛くはないだろ？」

「……それはっ、ないっ……けど……変な感じ、する……やっ、あ♡」

少しづつストロークの間隔を狭めていく。

「はあっあっ♡ あっ、あっ♡ だめっ、だめっ♡ お尻の穴、捲れてジンジンするっ♡」

リリカの両手がより強くシユウジの肩を掴んだ。

「……やっあっ、きもちっ♡ 本当に、おまんこになっちゃうっ♡ ジンの逞しいちんぽで気持ち良くなる、はしたないおまんこになっちゃうっ♡」

パンッ、パンッ、パンッ、と腰を叩きつけながら俺は冷笑を浮かべて言う。

のオナホみたいになっちまって」

俺の中の鬼が色濃く顔を出す。俺の愛しいリリカになって口を利くんだと腹すら立つ。

「キスしろって言うてんの。オナホが口答えしてんじゃねーって」

ただ今この時だけは、彼女を支配したいという攻撃的な欲情に満たされる。リリカと、シュウジの恋仲を蹂躪したいという薄暗い感情。

パンパンパンパンパンッ！

「あっ、あっ、あっ、あっ♡イクっ♡イクっ♡イクっ♡」

リリカは激しく喘ぎ、ビクンと背中を強張らせた。すると鞭で打たれた猛獣のように大人しく顔を上げて、シュウジに口づけをした。

その瞬間、俺は絶頂した。救われたとすら思った。あの時、校舎裏で抱えた劣等感が晴れ晴れしく去っていく。

リリカの桃尻に指を食い込ませるほどきつく握り、男根を根本まで肛門に挿入し、ビュルビュルと終わりの見えない射精を続ける。

「……俺の射精が終わるまで、ずっとキスしてろ」

リリカは言われた通り、眠ったままのシュウジの唇を啄んでいた。俺は勃起した陰茎でリリカの肛門をずばり貫き、射精しながらそれを優越感と恍惚の極致と共に見下ろしていた。

俺と鬼が完全に混ざり合う。

シュウジ。お前のことは守る。大切な友人だから。俺の愛するリリカの心がお前のモノであ

ることも認める。俺はどうしたってお前の代わりにはなれない。

でもお前とリリカのファーストキスは、俺にケツ穴を犯されながらアクメしていたリリカとだ。

萎えるどころか更にビキビキと青筋を立てる陰茎が、リリカの肛門を押し広げ、直腸を持ち上げる。

「ああっ、すごっ♡」

シュウジと唇を重ねながら、甘い吐息混じりに俺の男根を称賛する。

「彼氏の前で俺のばっかり褒めてやるなよ。シュウジのもすごいかもしれないぞ？ ちょっと見てみるよ」

「……でも、勝手に見るなんて……」

ぐいっと下腹部を押し込み、ぐりぐりと竿の根本で円を描く動きをする。

「はうっ♡ ああっ、だめっ、それっ♡ おまんこ、広がるっ♡」

リリカはケツ穴を男性器で貫かれた女に、口答えは許されないと理解する。シュウジに対する心苦しい思いをその手に纏わりつかせながら、ファスナーからシュウジの男性器を取り出した。

「どうだ？」

「……わかんない。勃起していないし」

「してない俺のと比べろよ」

「……ジンのが全然大きい」

俺はくつくつと笑いながらも、「まあ膨張率が高い奴も居るからな。望みは捨てるなよ」と言いながら腰を振る。

「あつ、あつ、あつ♡」

今自分を貫いている男根よりも、明らかに小さい恋人の男根を目の前にしたリリカの嬌声は、それでもシユウジが好きだという健気な恋心と、太い肉槍に悦ぶ雌の二律背反で可憐な艶やかさを醸し出していた。

そんなリリカと繋がったまま後ろのベッドに向かって下がる。六本足に腕が二本の生き物のように、息を合わせて後ずさっていく。

それでも多少はズボズボと性器の摩擦が起こり、その度にリリカが愛らしい声を上げた。

「んっ♡ んっ♡ んっ♡」

俺は再びベッドの縁に腰を掛けた。リリカはくつたりと脱力するように、座位の体勢で俺の背中を預ける。

より深く肉槍で串刺しになったリリカを突き上げると、リリカは自分から顔を後ろに倒して、俺とのキスを求めてきた。

舌先を舐め合いながら、リリカの両脚をM字に開脚させる。俺の両手はリリカの豊かな美巨乳を鷺掴みにした。指先が見えなくなるほど強く揉みしだいたが、リリカは「あんっ♡」と喘ぎながら、肛門をきゅつと締め付けただけだった。

キスをしながらリリカに耳打ちする。

リリカは俺と舌を繋ぎながら、すっかりトロトロに蕩けた眼差しに罪悪感を混ぜながら、シユウジに流し目を送った。

彼女の両手は俺の指示通り、自身の裏腿から陰唇に伸びて、そしてその綺麗な膣口を広げた。最初に中出した精液はまだどろりと溢れてきた。



桃色の膣壁と俺の精液を見せつけながら、リリカは恍惚と罪悪感がせめぎ合う声色と眼差しを恋人に向ける。

「……こっちのおまんこは、いつかシユウジにも使わせてあげるね……でもジンが先に大きくて気持ち良い勃起ちんぽで沢山可愛がつてくれたから、カリの深さから反り返った角度まで完全に覚えちゃってて、おまんこの形、完全にジンの勃起ちんぽ用になっちゃってる……シユウジのそのおちんちんにはちよつと緩くて、気持ち良くできないかもしれない……ごめんね……あと赤ちゃん作る部屋もだけど、ジンの熱くてドロドロに濃いザー汁、もう何回も注いでもらってるから、それより強い精液じゃないと、子宮が満足してくれなくて赤ちゃん孕んであげられないかも……あっん♡」

全て言い切ると、ご褒美とばかりに腰を突き上げる。

「あっ、あっ、あっ♡ 強いっ♡ ジンのちんぽっ、強いよっ♡ イクイクっ♡ こうしてお尻のおまんこに刺さってると、全身ジンのおまんこになった気分になるっ♡ ジんっ♡ ジんっ♡ あたしの身体で、ザーメンを気持ち良くちんぽから抜いてねっ♡」

俺とリリカが同時に絶頂すると、リリカは陰部からプシュッ、プシュッと激しく潮を噴いた。それはシユウジの顔や、露出したままの男性器にも掛かっていた。

俺はそれを眺めながら、これ以上の射精をできる男がこの世にいるのかという幸福の中で、すっかり俺の形に馴染んだリリカの肛門に締め付けられながら、ビュルビュルと勢い良く達したのだった。

五話 魔装少女と魔装悪鬼の関係

祠から受肉した最後の崇り、『イブシロン』は今までの崇りと比較すると規格外の体躯を有していた。祠を覆うように鎮座するそれは巨大な漆黒の蜘蛛。体長は優に十メートルを超えている。

とはいえ『企業』の魔導ドローンなどによる観察によると、けして鈍重というわけではないようだ。

特にその八本の脚は機敏かつ強靱。複眼による索敵範囲及び反応速度はこれまでの崇りの中でずば抜けていて、間合いに入った瞬間に多方向からの串刺しは免れない。

外殻の硬度はドラグーンの直撃でも貫けるか怪しい。関節部分はやや脆いが、おそらく尋常でない再生能力を有しているとのこと。

臀部からは広範囲に渡って有毒な糸を噴出。

唯一の弱点は頭部。しかし八本の脚による防御は鉄壁。

『企業』が算出したイブシロンの戦闘能力は、非戦闘系の魔法少女であれば単独ではなくチームを組むことを推奨するレベルだった。

「しかし祠を守るためか自ら動くことは無い。もし今まで通り襲ってきたらとてもじゃないが太刀打ちできなかった。不幸中の幸いだったな」

通信でリリカに問いかけるも、「……そうね」と拗ねたような返事が返ってくるだけだった。

「まだグズってるのかよ。最初に説明してリリカも納得しただろ。罪悪感やら恥辱で魔力の吸収率が変化するって」

シュウジを眠らせて、その目の前でやったセックスをリリカはまだ引きずっていた。とはいえあんなことさせられて平然としていられるわけもないので、年頃の女の子としては当然の反応だった。

モニタに映るリリカは微かに頬を紅潮させて、唇を尖らせるとジンから視線を逸らした。

「あんなことまでさせられるとは思わなかった。ジンの闇の一面を見た気分だよ」

「俺も加減がわからないから必死だったんだって。でもまあ悪かった。悪かったよ。リリカの頑張りや努力も込めて、デバ地下のプリン一つで手を打たないか？ 千円もするやつ」

リリカは唇を尖らせたままジンにジトとした視線を向けると、「……それ三つね」と言った。

「わかったわかった。いくつでも『企業』の経費で買ってやる」

リリカが一転して明朗な笑みを浮かべた。

「こいつ倒して祠壊したら、それ皆で一緒に食べて祝勝会だよ」

「なるほど。だから三つか。全部リリカが食うのかと思った」

「そんな食いしん坊じゃないっての！」

リリカは子供がやるように「いーっ」と白い歯を見せる。

「まあ実際効果は実感してるだろ」

「……確かにね。まさか生きてる内に宇宙旅行に行けるなんて思ってもいなかったよ。それも自力でね」

「正確にはそこはまだ自由大気圏だ。成層圏はもう少し上だな。どちらにせよ魔力で強化されても息苦しいだろうが、もう少し辛抱してくれよ」

魔装少女リリカの脚部が有する魔法陣跳躍スラスタは、高度十キロメートル近くまで飛行することを可能にした。彼女は夜空の中に居た。

とはいえこの前のシュウジの眼前で行ったセックスに、そこまで劇的な効果は無い。この作戦のためだけの一時的な強化でしかない。

「そこからイブシロンを確認できるか」

「ばっちり。あとそろそろ跳躍スラスタがガス欠しそう」

「よし。只今よりイブシロン撃破と同時に祠の破壊作戦を実行する。右腕は『グングニル』の発射準備。左腕は『ドラグーン』をいつでも射出できるようにしておけ」

リリカの表情が一転引き締まる。

「了解。ドラグーンを第二形象に展開」

その声と同時に、リリカの右腕が幾何学模様で包まれると、腕に沿って巨大な砲塔が顕現した。

「魔装少女リリカ。『グングニル』、『ドラグーン』、共に装填完了。跳躍スラスタによる空ホバリングは限界まであと一分」

最後の戦いが始まる。

「突進準備」

ジンの指示に合わせて、リリカが成層圏ギリギリの高高度で身体の天地を逆転させる。足裏を宇宙に向け、頭を大地に向けた。

膝を曲げて身を縮こまらせる。足裏に跳躍スラスタの出力を集中させた。

「……行けっ！」

魔装少女リリカが宙空を蹴ると、宵の空を切り裂く隕石のように地表に向かってその身体を射出した。空高くから高速で落下してくるその物体を、イブシロンはまだ感知できていない。

高度五キロメートル。

「ジンっ！ 撃って良い!？」

「まだだ！ 射程距離まであと二キロ。我慢しろ」

高度四キロメートル。

「リリカ、照準合わせとけよ！」

「もうやってるっ！」

高度三キロメートル。

「撃てえっ！」

ドラグーン第二形象である長距離狙撃用高出力魔装重砲グングニル。

俊敏性や継戦能力を犠牲に、破壊力と射程距離に特化した重装備。一時的にはあるが強化された今のリリカは、そのじゃじゃ馬の手綱を完璧に扱った。

空から降り注ぐ一閃と化したリリカから、更に高速の魔弾がイブシロンに放たれる。

初弾がイブシロンの八本ある脚の内の一本を、遙か上空から押しつぶすように破碎した。着弾位置には地響きと共に小さなクレーターが発生した。

不意を打たれたイブシロンは咄嗟の反応に遅れる。続けて二発、三発、四発。一呼吸の間にイブシロンの脚が半分もぎ取られる。

高度二キロメートル。

リリカを感じたイブシロンは臀部を隆起させた。

その間に続けて五発、六発、七発、八発。イブシロンの脚を全て破壊する。

高度一キロメートル。

イブシロンは隆起した臀部から、投げ網のように糸を空中に散布した。捕らえられたら最後。脱出不可能の粘性と強度を持つそれは、神経毒で獲物を捕らえて離さない。

「グングニル、切り離すっ！」

超高速で落下しながら、リリカはグングニルをバージすると、跳躍スラスタを発動させ、横っ飛びで糸の回避を成功させた。

そのままくると宙返りすると、足裏を地面に向け、そのまま落下速度を調整しながら降下する。それでも地面を揺らす程度の衝撃を発生させてイブシロンの目の前に着地した。

イブシロンの脚は既に再生を始めていた。それが完了するまで数秒。そうなればリリカに勝ち目は無い。

弱点である頭部は目の前。人の背丈ほどはある巨大な顔面。禍々しい複眼がリリカを無機質に睨みつける。常人であればそれだけで気が触れそうな狂気。しかしリリカの眼光はそれを物怖じせずに押し返す。

何度も何度も苦汁を舐めさせられた。しかし心に宿した恋心と信頼はその輝きを穢されることは無かった。

彼女は天に選ばれた魔法少女ではなかったが、それでも魔を装い鉄槌を下す。

「これでっ、終わりだあっ！」

魔装少女の閃光が山中に迸る。左腕に充填していたドラグーンが弱点である無防備な頭部を突き刺したのだ。

イブシロンの顔面が大型ハンマーを振り下ろされたレンガのように飛び散って破碎された。

同時に体長十メートルを超す巨躯が一瞬でコールドタールのように溶け、辺り一帯を浅い沼地と化した。

リリカは勝利の余韻に浸る余裕も無く、再度ドラグーンを充填させると祠に向けた。そんな彼女の背後に覚えのある気配を感じる。

目も眩むほどの満月だったが、その月光すら届かない深い森の中で、魔装悪鬼が立っていた。しかしむき出しの戦意は感じない。その狂暴性を必死に抑えているように見えた。

リリカはドラグーンの照準を合わせるが、魔装悪鬼は棒立ちの構えを解かない。その顔面に向けて、威力を調節したドラグーンを放つ。

頭部の甲殻だけを弾き飛ばすと、そこには見慣れた男の顔があった。リリカが最も信頼する男の顔だった。

しかしリリカの表情にそれほどの驚きは見られない。

「途中からそんな気はしてた。アレの形とか、腰の振り方とか似てたし……その他にも状況的に思い当たる節はあったし」

リリカはツカツカと俺に近づくと、「でもそうであって欲しくはなかった」とグングニルをバージしたただの右手で俺をぶん殴った。

俺は鼻血を噴き出しながら大の字になって倒れた。その上にリリカが馬乗りになる。

リリカは俺の襟元をぎゅっと握り、顔を寄せて悔しそうに、そして悲しそうに顔を歪めた。

「……どうして？」

「ちよつとばかしショックなことがあってな。自暴自棄になって自分で変身の実験をした。そしてこのザマだ。理性を失い、ただただ狂気の衝動に支配される間抜けになった」

リリカは暫く俺の襟元を握ったまま、苦虫を噛み潰したような顔で俺を睨み続ける。今にも涙が零れそうだ。

「……またいつ暴走するかわからない。処分してくれ。リリカに殺されるならそう悪い結末じゃ

虫の音すら聞こえない深夜の森の中、静寂が続く。

「……ガキの頃はシュウジの尻拭いをさせられたっていつも愚痴ってたよな。俺まで世話を焼かせてしまったてすまない」

諦観の籠った俺のその声に、リリカは襟から手を離すと上半身を起き上がらせた。

「……馬鹿言わないでよ」

そう言うとき彼女は大笑したため息をついて言葉を続ける。

「……なんのためにあたしが魔装少女になったと思ってるの？ 大切な人を守るためでしょ？
それがシュウジからジンに変わるだけよ」

そして彼女の象徴でもある、懐と情が深い笑みを浮かべた。

「……ジンが暴れたら、あたしが止めてあげる。ジンとあたしが二人で強くした、この魔装少女で何度でも止めてあげるよ」

「もし俺のが強くなったら？」

その問いに、リリカは気恥ずかしそうに頬を紅潮させた。

「……だから、いつもみたいにジンが強くしてくれたら良いじゃん」

「いつもみたいって？」

リリカは不服そうに唇を尖らすと、冗談っぽく拗ねるような呟きを漏らした。

「……ジンの強いおちんちんと精液で、ってこと」

俺は皮肉めいた笑みを浮かべた。

「……早速下半身が暴れだしたんだが？」

魔装悪鬼独特の質感を伴った男性器が、馬乗りになったリリカを突き上げようと勃起を始めた。

リリカは照れ臭そうに顔を背けると、「……さっきジンに撃った分で、祠壊すドラグーンの魔力使っちゃったんだから、とりあえずその分補充しなさいよ」と言った。

肉槍は雄々しくそそり勃っていくと、陰唇に沿って切れ目の入った魔装少女のショーツを丁度押し広げて、そのまま彼女を串刺しにした。

「あっ、んっ……」

愛する人を守る運命の決戦とも呼べる分水嶺で勝ちを得たリリカの中は、その高揚と安心感で燃え上がっていた。普段よりも体温が明らかに高い。

鬼と魔女が両手を握り合う。

二人しか居ない森の中で、俺が突き上げると彼女は甘く蕩けた。

「やっあっ……奥っ、響くっ♡」

「大きさは普段と変わらないだろ？」

「馬鹿っ……でも、こっちのが、なんかっ、あっあっ♡ ゴツゴツしてるかも」

「どっちのが好き？」

「……わかんない……普通の時の、カリの出っ張りがわかりやすくて、すごくゴシゴシされる

感じするし……あつ、いつ、あつあついい♡ だ、だから……」

「だから？」

リリカは恥ずかしそうに視線を逸らすと、「……どっちも好き」と愛らしく呟いた。

俺は激しく突き上げながら尋ねる。

「じゃあこれからはどっちでリリカを犯したら良い？」

「あつあつ♡ ど、どっちでも、好きな方でしたら良いじゃん」

クロッチ部分に切れ目の入った黒いレース布地のショーツで重なる結合部は、グチヨグチヨと愛液を泡立たせながら卑猥な音を森に響かせる。

「あぁ♡ あぁ♡ はぁ♡、ん♡ もうあたしのおまんこ、ジンの勃起ちんぽの形になってるから、どっちでもちゃんと、おまんこのお肉使って、ジンのおちんちん気持ち良くシコシコできるんだから♡ ジンが気持ち良く、ザーメンびゅっびゅっ射精する穴なんだから♡」

確かに彼女の言う通り、彼女の締め付けの良い肉壺は、そのヒタヒタした柔肉をカリの裏まで這うようにみっちり密着させて抱擁してくる。

射精感を覚えながら俺は全身を弛緩させていく。

「リリカ」

「あつあつ♡ な、なに……」

「これからもいっぱいエッチしような」

そこでリリカは蕩けた顔を少しだけ引き締め、俺をジト目で睨んだ。

「……あ、あくまでジンが暴走しても止められるように、前以て普段からするだけだからね？ 魔装悪鬼よりも強く在るために、ジンのおちんちん気持ち良くして、いっぱいザーメン注ぎ込んでもらうためなんだからっ！ ち、ちゃんと愛のあるセックスは、シユウジとしかないんだからっ！」

俺は鼻で笑いながら「わかってるよ」と返答し、そして彼女を激しく上下に揺さぶる。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ♡」

リリカの気質を考えるとこうなる勝算は高かった。俺を見捨てるわけがない。狙い通りではあった。

しかし鬼に成り果てた自分を、彼女に滅されるのであればそれはそれで良いと思ったのは事実だった。

「突き上げっ、すごっ♡ そんな奥までっ♡ あっ♡ 頭、痺れるっ♡」

恋人を守るといふ使命を果たした彼女の心身は、安堵と高揚を伴って俺の肉棒に絡みつく。その肉壺による極上の快楽の中、運命の女神が選んでくれた至福に感謝しつつも昇り詰める。

「リリカ、射精すぞ」

「う、うん♡ 来てっ♡ ジンのおちんちん、一番気持ち良くできるおまんこで、たっぷりザーメン抜いてっ♡」

「俺のちんこも、リリカを一番気持ち良くできるちんこだろ？」

リリカは恋人のことを想いながら、暫く逡巡するも、切なそうに頷いた。

「……うん♡ ジンのおちんちんが、きつとあたしを一番気持ち良くしてくれる……あつあつ♡ ああついつ♡ ほらっ、すぐく、おまんこキュンキュンするっ♡ ジンの遅い勃起ちんぽが、奥までズンズン挿入^{はい}してくると、ああつ、イクっ♡ イクっ♡ イクイクイクイクっ♡」

リリカの身体がぎゅっと縮こまると、彼女のトロトロの蜜壺は、魔装悪鬼の質感を伴った男根すら溶かしかねない熱とうねりで抱擁する。

その至高の快楽に爆ぜるように男根が震えながら射精をする。リリカはそれを受け止めながら、更に深いアクメに堕ちていく。

「ああつ、はっ♡ すこっ、ちんぽっ、ビクビクっつ♡ あつあつ♡ 射精すごい♡ ジンのビュルビュル飛び散るザーメン、あつたかくて気持ち良いっ♡」

「ほらリリカ、もう魔力溜まっただろ？ 早くドラグーンで祠撃てよ」
ドビュドビュとリリカに精液を注ぎ込みながら笑う。

「ま、待ってっ♡ 今、無理っ♡ 今は、ちんぽ、刺さってるからっ♡ 身体中がおまんこになって、ジンのおちんぽから、気持ち良くザー汁抜いてあげることしか考えられないからっ♡」

俺は射精が収まると、上体を起こしてリリカの腰を掴んだ。そしてそのまま立ち上がる。
リリカは両手足で俺にしがみつき、駅弁に体位を移行する。

「やあつ、あつ♡ ジンっ、強いっ♡ ガチガチのちんぽで腰、持ち上げられてるみたいっ♡」
「ほら、射精収まったから、先に祠壊せよ」

「う、うん♡」

俺が顔を寄せると、リリカはトロンと瞼を閉じて、舌で交尾をするような濃厚なキスをした。

リリカはああと息を荒らげ、左腕以外の四肢で俺にしがみつき、俺の舌をフェラチオするように吸いながら、祠を破壊した。

念願だった祠の破壊を気にも留めず、俺がリリカを突き上げると、リリカは、「あつあつ♡ おっきっ♡ 深いところ、来るっ♡」と甲高く鳴いた。

「ドラグーンと俺のちんこ、どっちが強い？」と聞くと、リリカは乾いた笑い声をあげて、
「……それ、最初に犯された時に、思った」と言った。

そしてリリカの方から俺の下唇を甘噛みしてくると、「……ジンのおちんちんが、一番強いよ♡」と甘えるように囁いたのだった。

オレとリリカの恋が成就して数か月が経った。恋人として初めての夏休みも経験した。生憎リリカはジンと同様に受験生なので、学生最後の夏休みを満喫というわけにもいかなかったが、それでもなんとか受験勉強の合間を縫ってはオレとデートをしてくれた。

その中でも一際鮮烈に輝く記憶は、浜辺でしたファーストキスと、そしてつい先日、リリカの部屋で初めて結ばれたことだろう。

ベッドの上で恥ずかしそうに浮かべるリリカの照れ笑いとはにかく可憐だった。あまりに恥ず

かしかったのか、オレが激しく腰を振っても漏れる嬌声は消え入りそうなほど小さかったが、それもまた可憐だった。

そんな幸せも相まってか、ただでさえ暑苦しいと自覚しているオレのテンションは鼻息をふんふんと鳴らすほどにうなぎ登りだ。

夏休み明け初日の学校は残暑どころかまだまだ真夏の余韻を残していた。ホームルームと全校集会だけで放課になると、オレはジンの姿を探した。

「すまない。ジンを見かけなかったか？」

クラスメイトに尋ねると、「柳楽ならだるいから保健室で寝てから帰るって言ってたぜ」と答えてくれた。

オレは礼を述べると、ズンズンと大腿で保健室に向かう。

オレはジンの気持ちを知ってて尚、リリカと付き合うことを選択した。そして肌まで重ねてしまった。親友であるジンにいつまでも隠し通すわけにはいかない。

まだ手に残るリリカの柔肌の感触による高揚に背中を押されるように、罪の告白を決意した。

そのリリカを連れて行くかとも思ったが、拳の一発や二発は覚悟しないとけない。幸いリリカの姿も見えないので一人で保健室の扉をノックした。

返事は無い。扉に手を掛ける。何故か冷や汗が背中を伝った。夜中の墓地で鴉にぎやあぎやあとな鳴かれるような不吉感。この妙な凶兆は前もどこかで感じたことがある。学校のトイレだったか。とにかくオレは無視して扉を開ける。

保健室は無人だった。カーテンを引かれた一つのベッドを除いて。

そのベッドにも人影は映っていない。ジンが横になっているのだろう。物音一つしない。空調の音だけが聞こえる。

「……ジン。寝てるか？」

「あゝ？ シュウジか？ どうした？」

「いや、ちよつと話があつてさ……なんだかこの部屋少し暑くないか？ 大丈夫か？」

「そうか？ 別に体調悪くて寝てるわけじゃないし俺はこのままでいいよ」

「そっか。あの……少し話があるんだけど今いいか？」

「なんだよ改まって」

「うん……実は、だな……」

シュウジはそこで言葉を喉に詰まらせた。猪突猛進なシュウジにしては珍しいこともあるものだ。

「彼氏が俺になにか話あるんだって」

俺の上に跨がっているリリカに話しかける。俺と両手を恋人繋ぎしながら、俺と同様に全裸で二人共汗だくだ。リリカは先程まで派手に喘いでいた唇を閉じて首を横に振った。

「大丈夫だって。俺とリリカの会話は外に聞こえないから。ああでもこの熱気だけは漏れてるかもな」

「というかシユウジは前も人払いの結果も気にせずに入ってきた。よく言えば裏表が無く、悪く言えばデリカシーが無い人間には効きづらい魔術なのかもしれない。」

「とはいえ気配遮断の魔術はやはり完璧なので、俺はリリカを激しく突き上げる。安物のベッドが激しく軋む音や、美巨乳を派手に揺らすリリカの人影もシユウジには届かない。」

「んっ、んっ、んっ、んっ♡」

「なに声我慢してんだよ」

「……だ、だって」

外からは見えない聞こえないとはいえ、リリカや俺からはシユウジの影がばっちりカーテンに映っている野が見えた。

「じゃあこのままシユウジの話が終わるまで止まってる？」

リリカの既にトロトロな蜜壺の中で、ギンギンと青筋を立てて屹立する肉槍に、リリカは臆壁をキュンキュンと疼かせて言外に返答をする。

「じゃありリカのペースで動く？」

俺の提案にリリカは切なそうに頷くと、ゆっくり腰を前後にグラインドさせ始めた。それでもグチュグチュと淫らな音が鳴り、「あっん♡」とリリカは気持ち良さそうに背中を反り返らせた。

相変わらずヒダヒダでウネウネと絡みついてくる肉壺と、たぶんたぶんと瑞々しく揺れる美巨乳を愉しみながら俺はシユウジに軽い調子で声を掛ける。

「なんだよずっと黙って。気持ち悪いな。拾い食いでもしたのか？」

カーテンの向こうからシユウジの咳払いが聞こえる。同時に腰を擦りつけるようにグラインドしていたリリカの両手が、より強く俺の手を握った。

「あつい♡ おっき♡」

「イキそう？」

リリカは俺と絡めた指を握り直すと、目を瞑って頷いた。俺の方からも軽く突き上げる。

「あっ、あっ、あっ、あっ♡ やっ、シユウジが、そこに居るのにな……」

そう言いながらも、綺麗で豊かな乳肉が、ピンク色の乳首と共に円を描くようにブルンブルンと揺れる。

「あっあっ♡ だめっ、頭、ジンジン痺れるっ♡ ホントに、おっき♡ ジンのちんぽ、一番奥までズコズコ届くから、おまんこ、溶けちゃいそうになるっ♡」

リリカがトロトロに溶けだす。カーテンの向こうから意を決したような深呼吸が聞こえたかと思えば、シユウジの相変わらず馬鹿デカイ声が聞こえた。

「……実は俺、リリカと付き合っているんだ！」

その宣言に、リリカの肉壺がぎゅうっつと窮屈なくらい俺を締め付けた。そして彼女は目を細め、下唇を噛み、俺をじっと見つめる。

「俺達も今突き合ってるよな」

「馬……鹿」



まずはシュウジに、「おお、マジで？ おめでとう。お似合いだと思うわ」と軽い調子で答えると、リリカを激しく突き上げた。

「いつ、いつ♡ あっいつ♡ やっ、すこっ♡ ジンっ、それっ、強すぎっ♡ ああっ、いいっ♡ ああっ、いいいい♡ すこい♡……♡ 硬いのが、ズンズン刺さるっ♡」

シュウジは拍子抜けしたように、「お、おお……」と口にする、安心したように、「ジンには真っ先に報告しようと思ったんだけど、なんか照れ臭くてさ」と、危惧していたことが杞憂に終わって安堵したように言った。

「水臭いだろ。そういうのは先に言えよ」と言いながら俺はリリカを突き上げまくり、リリカはもう蕩け切った表情で俺を見つめた。

「……ジン……イっていい？」

「ダメ」

「やっ、だっ♡ 無理っ、イクからねっ？ あっあっいつ♡ いいっ、いいっ♡ イクっ、イクっ♡」

リリカが上半身を伸び切らせるようにビクビクと痙攣した。リリカの肉壺はまるで独立した生き物のように俺の肉槍にウネウネと絡みついてくる。

その甘美な感触を生で味わいながら、俺はシュウジに話しかける。

「でもなんか悪いな。夏休み中は俺と受験勉強ばっかりでデートもできなかっただろ」

「それは仕方ない。それに少しは会えたから」

シュウジと会話を交わしながら、未だビクビクと絶頂の中にいるリリカに声を掛ける。

「俺達殆ど毎日エッチしてたよな？」

リリカは全身をキュンキュンとヒクつかせながら、「……うん♡」とだけ返事をする。

「海とか行けたのか？」と俺がシュウジに尋ねると、「いや、それは来年のお楽しみだな」と楽しそうに意気込みを語る。

トンッ、トンッ、と桃尻を軽く上下に揺らすと、「あんっ♡ あんっ♡」とトロトロの喘ぎ声を上げるリリカに、「俺とは泊まりで海水浴行ったのにな。リリカの水着姿、めっちゃ可愛かったぞ」と優しく声を掛ける。

リリカはゆっくり上半身を俺に預けながら、唇で吸い付きあうようなキスをする。豊かな乳房が俺の胸板で押し潰されると、瑞々しい弾力を愉しませてくれた。

舌を絡ませ合いながら、「……ジンが選んでくれた水着だからだよ」と愛らしく囁いた。

クチュクチュと舌を交尾させながら甘い吐息混じりに言葉を交わし続ける。

「来年もあのホテルに泊まりに行こうか？ 良いところだったよな。海が見渡せる浴室とか」リリカの両手をガラスにつかせて立ちバックしながら見た夕日は絶景だった。

「……うん♡ でも、パラソルの下でフェラしたのはすごく恥ずかしかったから来年は無しで」

「だってリリカがしゃぶったような顔してたから」

「そんなのしてません」

リリカの桃尻を両手で掴んで、ゆっさゆっさと突き上げる。

「あっ、あっ、あっ♡」

「本当は？」

「……しゃぶりたいっていうか……早く二人きりになって、可愛がって欲しいとは思った」

「あと夜の浜辺で対面座位でしたのは恥ずかしくなかったのか？」

「恥ずかしいに決まってるでしょ」

リリカは俺の唇を甘噛みすると、俺の首の後ろに両腕を回してぎゅっと抱き着くと、「でも……あの時このまま帰りたくないって思った」と耳元で囁いた。

「あの晩夜明けまでエッチしまくって、二人で寝坊してチェックアウト遅れたもんな」
楽しい思い出に浸るようにリリカがくすりと笑うと、俺はガンガンに突き上げる。

「あっ、あっ♡ いっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ 刺さるっ♡」

鼓膜を直接くすぐるリリカの嬌声が頭が溶けそうになりながらシュウジに聞いかける。

「リリカとはもう大人の階段昇ったのか？」

カーテン越しにシュウジが狼狽したのがわかった。純情青年め。

「お、おう！ なんつっても夏だからなっ！」

「そうか。ひと夏の思い出か。勉強ばかりだった俺には羨ましいよ」

そう言いながらビストンの回転を上げていく。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

「……どうだった？ 彼氏のは？」

リリカは縫りつくように俺に抱き着くと、トロトロの蕩けた快楽に、ちくりと罪悪感を滲ませて呟いた。

「……挿入^{はい}ってきたの、わからなかった」

俺が更にバコバコとリリカの尻肉を突き上げる。

「あいつ♡ いっ♡ いっ♡ はうっ♡ あっ♡ あっ♡ ああんっ♡ はあ、はあ、はあ、はあ……♡」

リリカは呼吸を整えると、「……シュウジのおちんちんが、いつ挿入^{はい}ってきて、いつ射精したのか、全然わからなかった……」と寂しそうに言った。

そして更に言葉を続ける。

「……夏休みはもうずっと、ジンのおちんちんはハメっぱなしだったから……。お口も、お尻も、全部ジンがザーメン抜くための穴になってたから……。だからおまんこも、ジンが気持ち良くシコれるためのオナホになってたんだもん……。ジンの大きくて硬い、気持ち良いおちんちんは専用の形になっちゃってたから……」

シュウジがどうしても気になるといった様子で尋ねる。

「……あのさ、ジンって好きな女はいないのか？」

俺がリリカを好きだと思っていたからこそその、実際の報告の遅れだったのだ。それが肩透かしになったのは嬉しくもあるが不可思議でもあるのだろう。

「いるよ」

即答すると、シュウジより先にリリカが耳元で囁く。

「……いるんだ」

その声色はどこか女の妖艶さが漂っていた。

「もしさ、それがリリカだって言ったらどうする？」

ズンッ、ズンッ、ズンッ、と深いストロークで激しく肉槍を突き立てながら言う。

「あんっ♡ あんっ♡ あんっ♡」

「リリカが好きだからシュウジと別れてって言ったらどうする？」

俺の首を抱擁していたリリカの両腕に、愛らしい力が籠る。

「……………わ、別れる♡」

耳元で囁く。

「…………俺の彼女になる？」

「…………うん♡」

完全なる勝利の充足感に満たされる。

「まあ、もしもの話だけだな」

「…………意地悪」

全てを手中に収めたのだから焦る必要は無い。どうせならこの状況をもっと楽しめば良い。

鬼が耳元でそう囁く。その誘惑に異論は無かった。

俺は射精を指して、ガツガツとリリカの桃尻を責め立てた。勝関を上げるように雄々しくそり立った肉槍は、グッチョグッチョとリリカの陰唇を愛液で泡立たせた。

「あいっ♡ いっひい♡ ひっ、ひっ♡ いっんっ♡ ああっ、いっ、あっひっ♡ ジンっ、ジ

ンっ♡ 好きっ♡ 強いっ、好きっ♡ あっい♡ 彼氏より、硬くて、太いっ♡」

「彼女できたら俺も紹介するわ」

シュウジにそう言うと、「おお。楽しみにしてる。とにかく俺の話はそれだけだから。それじゃな」と彼は肩の荷が下りたように保健室を後にする。

その背中に問いかける。

「ちなみに将来は男の子と女の子どっちが欲しい？」

シュウジが照れ臭そうに笑い、そして満更でも無さそうに答えた。

「馬鹿。気が早すぎるだろ。でもまあ…………男の子かな」

そう言って扉が閉まる。「だってさ」と全身をくたくたに溶けさせているリリカに言うと、俺は更に射精に向かうピストンをした。

リリカの身体と意識は、焼き串に刺されたマシユマロのように否応なく溶けていく。

「このままちゃんと男の子、孕ませてやるからな」

「…………うん♡ ジンのおちんちんで、ちゃんと男の子産むからっ♡ ジンの方がちんぽも、妊娠汁も強いから、ジンの赤ちゃん孕みたい♡ シュウジよりも強いジンの子種で妊娠する♡」

余すところなく密着したリリカの身体は発熱しているかのように熱く、そして柔らかかった。

俺達の汗が混ざり合い、粘膜が混ざり合い、俺とリリカの境界線が曖昧になっていく。

「…………だからジンも、あたしのおまんこ使ってパパになって♡ あたしのお腹に強いちんぽの遺

伝子残して♡」

「射精すぞ。しっかり孕めよ」

ぱっくり開いた子宮口に、更に亀頭を押し込んで、直接中に精液をドクドクと流し込む。リリカは俺の首筋を強く吸うようにキスをしながら全身を痙攣させた。

「ああっ♡ パパのが、来てるっ♡ 熱くて濃いので満たされていく……あぁっはあっ♡ 受精しながらおまんこイクっ♡♡」

汗塗れで酸欠状態の俺達はそのまま暫く抱き合い、まだまだ湧いてくる下腹部の奥からの熱を感じると、互いの唇を吸い合うようなキスをして見つめ合った。

「……俺の家行つて、子作りの続きするか」

「……うん」

そう言葉を交わしてから、再び唇を優しく重ねるのだった。

おまけ

「俺が確信しているのは、リリカは一時の性欲なんかで流される女ではないということです。俺と比べて頼りない男性器で抱かれようが、シユウジへの恋心は全く色褪せてはいないはず。それでも俺の子種を欲したのは、魔装少女として命懸けの戦闘を重ねた影響だと推測されます。即ち自らが何度も死地に追いやられた恐怖が、より強い遺伝子を残すことを本能に望んだ」

人気の無い真夜中の廃墟で、俺は淡々とそう言うのと深紅のドレスを捲り上げた。紅いティールバックの、その高飛車な態度に似つかわしい生意気そうな臀部が露わになる。きつとブラも紅いのだろう。彼女が今まで血祭にあげてきた怪異の返り血で染まったのかもしれないなどと馬鹿げた想像が浮かぶ。

イブシロンと祠の力を呑み込んだ俺は、背中から八本の脚を出してそれらを自在に操り、花鳥院シランの両手両脚を拘束し、立ちバックの体勢を取らせていた。

俺は自分の両手で彼女の腰を掴み、ただ腰を振るだけだ。ズブズブと剛直が彼女を突き刺す度に、生意気な尻肉がパンパンと乾いた音を上げる。

なんと透き通るように白い肌だと感嘆する。その透明度は健康的なりリカとはまた違い、月光のように妖艶だ。

「んっ……くっ……ふっ、ん」

「聞いてます？ 俺の報告」

膿の密度は言うまでも無く高圧的だ。それでも彼女の傲慢な膿壺はあつという間に濡れそぼった。

「普段偉そうなのに膿は男に媚びるの早いですね。もうグチョグチョですよ」
立ちバックで犯されながらも、花鳥院シランは普段通りの冷笑を含んだ声色で言う。

「柳楽ジン。光栄に思いなさい。このことは『企業』を通さず、わたくし自ら貴方を罰してあげるわ」

しかし息は浅く、なにより結合部はもうトロトロだ。

「研究費削減は勘弁して欲しいんですが。軽装型の丙種であつたりリカとは違い、重装甲型である甲種魔装少女の試作実験にも着手したいですしね」

研究者として今後の開発に思いを馳せながら、ガンガンに腰を叩きつける。彼女は「あつ、んっ」と甲高い声を漏らしながらも冷たく言い放った。

「研究費削減？ 殺処分以外にあり得ないわ」

俺は聞こえない振りをして言葉が続ける。

「適合者の候補も最終選別の段階まで来てます。六連装式魔導追尾ミサイルを背中に背負い、右腕にマジカルコアカートリッジ換装型ガトリングガン。左腕には断絶方陣シールドを装備した攻防一体の魔装重歩兵はきつと上層部も気に入ってくれますよ。なんといっても史上最強の魔法少女の一人として名高いあの東雲ヤヨイを参考にしましたからね」

「データだけ残しておきなさい。開発は別の者に引き継がせるわ。その後、わたくし自らの手で

罅^{なま}り殺してあげるわ」

「俺じゃないとダメですよ」

この女は安っぽい恫喝をする人間ではない。口にしたことは必ずやる。俺への明確な殺意を感じる。

祠の破壊から数か月、俺は彼女に平身低頭で服従の擬態を続けた。

その上で弱体化の薬物混入。不意打ち。考えうる俺に有利な状況をこれでもかと固めて、それでもギリギリの勝負だった。

今もまだ効いているはずの麻酔薬は象を数秒で眠らせる劇薬だ。なのに少しでも気を抜くと拘束しているイブシロンの脚を破碎されそうなほどの魔力を感じる。真正面からでは到底敵わないであろう化け物だ。

それでも勝ちだ。屈辱の借りは返すばかりに腰を振る。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ」

常に人を見下す言葉しか発さない口から甲高い声が漏れる。

「その口、可愛い声も出せるんですね」

彼女は鼻で笑うと、「冥途の土産よ。今の内に堪能しておきなさい」と余裕綽綽の様子で言った。

それでも俺のピストンで明らかに声は上擦っていく。

「やつ、あつ……あつい、そこっ、あつあつ♡」

膝がカクンと軽く曲がる。

「ここですか？」

「そこっ、だめっ……あつあつ、いいっ、あついいっ♡」

「歴戦の魔法少女花鳥院シランさんは、奥手前の上側をカリで擦られるのがお好み、と」
散々小馬鹿にされ、傷つけられた自尊心を癒すように鼻で笑う。

「やつ、あつ、深いっ♡」

「俺のカリは中々のものでしょう？」

「……理知的ぶりながらも、野蛮な鬼を内に秘める貴方には相応しいペニスの形状ね」

この期に及んで俺を冷笑する。

これはもはや快楽のための性行為ではない。歴として戦闘行為である。リリカを抱く時は歪んでいようがそれでも前提として彼女への恋心と愛情がある。いくら花鳥院シランがぞっとするような美貌と端正な肢体を持ち合わせようが、そんな感情は微塵も湧かない。ただただこのいけない女を打ちのめしてやりたい。

「前に靴を舐めさせられたでしょ？ あれ相当ムカついたんで、あとでこのちんこ舐めさせてあげますね」

「肴として珍味は嫌いではないけれど、野良犬のペニスはいささか抵抗があるわね。食い千切るだけ食い千切って吐き捨ててあげるわ」

彼女の肉壺は傲岸な口振りに相応しい圧力で男根を締め付ける。

「その内自分から舐めたいって懇願するように躡けてやりますよ」

俺はそれを味わうように肉槍を擦りつけた。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ♡」

特にカリで膣壁をゴリゴリと抜く動きを意識する。威圧的なほどに締め付けのきつい膣内は既に泡立つほどに濡れており、その肉圧の中でスムーズな摩擦を行えることは喜悦で俺を武者震いさせた。

「ああっ、いっ♡ それっ、それっ、だめっ、来るっ……そんな風に擦られるなんて……あつあつ、いっあつ♡ 来るっ、来るっ、おまんこっ、いっちやうっ♡」

彼女の腰が絶頂でガクガクと揺れる。イブシロンの脚で拘束している彼女の四肢が漸く反抗の意志を緩めた。

絶頂の余韻の息遣いを見せる彼女の背中に、勝ち誇るように言葉を投げかける。

「たまには野良犬に犯されるのも良いモノでしょ？」

彼女は恍惚で膣壺をウネウネと蠢かせ、浅い息遣いを見せながらも未だに温度の低い声音で返した。

「……そうね。褒美に死に方くらいは選ばせてあげるわ。どちらにせよ首から上は残さないけれど」

正直こんな状態でも寒気を感じる。花鳥院シランと俺の力の差はそれほどまでに大きい。しかしそれはあくまで魔法少女と魔装悪鬼として戦った場合だ。

今まさに雄としては、この雌を屈服寸前まで追い込んでいる。

彼女が絶頂の余韻から冷めやらぬ内に更に責め立てる。大きく横にずらした紅いティーバックの横で、黒光りする男根を遠慮なく抜き差しする。

「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ♡」

廃墟に切り裂くような甲高い嬌声が響き渡る。膝もガクガクと揺れて今にも崩れ落ちそうだが、彼女の腰は俺の両手でしっかり支えられ、そして足首と膝はイブシロンの脚で固定されていた。

「だめっ、だめっ♡ おまんこ、イってるっ♡ これ以上、そんな強いのでズコズコされたら壊れるっ♡ 深いカリで、おまんこ壊されるっ♡」

「大丈夫ですって。魔法少女は魔装少女より脆くないでしょ？」

「あっ、ううっ、あっあっ♡ やっ、あっあっ♡ イクっ、イクっ、イクイクイクっ♡」

彼女は俺の皮肉すら耳に届いていない様子で全身を激しく痙攣させた。

「飼犬のおちゃんばでイっちゃうっ♡」

ビクビクと背中を振らせると、彼女の膣圧が最高潮を極めた。その直後、結合部からビュッ、ビュッ、と透明な液体が廃墟の床を濡らした。

「飼主が粗相しちゃダメでしょ」

俺は彼女の潮噴きを笑いながらピストンを継続する。

「あいっ♡ いっいっ、ひいっいっ♡ あっ、ひっ♡」

グチヨグチヨと摩擦音、パンパンと打撃音が続く中、その合間合間にビュッビュッ、と彼女の潮が床に飛び散っていく。

そんな彼女は廃墟の壁に両手をついていたが、左手の薬指には指輪があった。

「許嫁が居るんでしたっけ？ なんでも良家同士の御縁だとか」

「はあっ♡ はっ♡ んんっ、あっ♡ だめっ♡ これ以上は、もうイケないわっ♡」

パンパンと腰を無心で打ち続けたら、ガクガクと揺らす真つ白な美脚に、失禁した液体が垂れていく。

彼女の下半身はリリカよりもスレンダーで、より洗練された美しさがあった。その分尻肉はやや薄い、今までの鬱憤を晴らすように腰を叩きつけると乾いた良い音が鳴る。

「あっ、いいっ♡ そんなところまでっ♡ すごっ♡ 硬くて、強いっ♡」

「強くて麗しい花鳥院シランさんも、今ならリリカの気持ち理解できるんじゃないですか？」

「……一体、なにを言って……」

「少しでも強い雄の精子が欲しいでしょう？」

蜘蛛の脚の一つで器用にその指輪を外して捨てると、荒々しく突き上げる。

「あっ、くうっ♡ ふう、ふうっ……はっ、はあっ♡」

指輪の存在は推測通りだったようで、その相手に操を立てるためにか、必死に喘ぎ声を我慢しようとしている。

しかしドレスから覗く美脚は失禁と愛液を紅いハイヒールまで垂らしていた。

「例えば魔法少女であるご自身を力づくで屈服させ、犯すことができる魔装悪鬼の種とかね」

「ああっ、ぐっ♡ はっ、ん……………こんなの、初めて……♡」

「え、なんて？」

「……こんな大きいペニスで、乱暴に突かれるのは初めてだと言っているのよ」

「悪くはないでしょ？」

「……くっ、ん♡」

俺が軽く腰を前後させるだけで、彼女は返事代わりに上の口で切なそうに喘ぎ、そして下の口ではぬちゅりと交接音を鳴らした。

彼女は悔しそうに眉間に皺を寄せながらも、その口元は快楽で蕩けていた。背後からでもそれがわかるのは、余っている脚でビデオ撮影しているからである。便利な能力だ。

彼女を前方から映すと、ドレスの胸元では爆乳がブルンブルンと谷間を揺らしていた。この女、全体的にリリカより華奢なのに、おっぱいだけは爆乳のようだ。どれだけ高飛車でワガママな美貌と身体をしているのだ。

「更にハメ撮りも初めてでしょ？ なんといっても生粋のお嬢様だし」

「……ついでにこんな激しい殺意を覚えたのも初めてよ。今夜からは毎晩震えて眠ることね」

「イブシロンと祠を取り込んで、鬼と同化した俺は『企業』の要観察保護対象です。更には魔装少女開発のパイオニアでもあります。勝手に殺したら怒られますよ？」

彼女はそんなことを意に介する様子もなく鼻で笑った。

「ふん。この花鳥院シランにそんな下々の者達の都合など関係無いわ。殺すと言ったら殺す」

圧倒的有利にあっても背筋が冷たくなる。実際彼女が俺を私情で処分しても、『企業』からは大したお咎めは受けないだろう。いや、仮にお咎めがあったとしても有言実行する女だ。

「……そんな物騒な雌犬は、ちゃんと躰けとかないとね」

俺は例の唾液ローションをアナルに垂らし、そして男根を膣から引き抜くと、無造作に一息でずぶりと彼女のアナルを貫いた。

「ぐっ、うっ！」

彼女の美しい気品溢れる肛門が、黒い肉棒で無残にもむにゅりと押し広げられ、根本まで押し込まれる様子をしっかりと撮影する。

「これ、ネットで販売したら爆売れするだろうなあ。許嫁さんと言い値で買っくんじやないですか？ どうせお金持ちなんですよ？」

脅迫するようにそう独り言しながら遠慮なく腰を振る。男根が彼女の貴い肛門をズボズボとはしたくない音を鳴らして行き来する。

「はうっ、あっ、ぐっ♡ くっ、ふっ、んっ♡」

花鳥院シランは苦悶の声を上げながらも、同時に雌の音色を既に上げ始めていた。

「あれ、もしかしてこっちもいけるクチですか？」

「はっ、はっ、はっ、んっ♡ お、覚えてらっしゃい……いつかわたくし自らの手で、この下品なペニスを去勢してあげるから……あっ、すっ♡ 広がるっ♡ あっあっ、いいっ、あっ♡」

「なに言っても無様ですよ」

「ああっ、いっ♡ あっあっ、いっ♡ おっき♡ こんな、肛門犯されて……くう♡」

「去勢どころか毎日愛でなくなるくらい、一晚掛けてたっぶり仕込んであげますからね」

「誰がっ、こんな、あっあっ♡ 誰になんかっ……あっ、やっ♡ 遅しいっ♡ イクっ♡」

「初めてのAnalセックスでアクメするところ、しつかり撮影してあげますからね」

「やっ、あっ、だめっ、見ないでっ……お尻、ジンジンするっ♡ 大きいちんぽで肛門捲れる度、おまんこになっていくっ♡」

「俺のちんこ舐めるなら許してあげますけど？」

「な、舐める……♡ この強いちんぽ舐めるから♡ これ以上わたくしの肛門を生ハメ用の穴にしないでっ♡」

胸に勝利感が満たされる。リリカを抱く時の充足感とは全く違った、肉欲でも性欲でもない。ただただ男としての自尊心が燃え滾っていく。

「フェラチオなんてしたことあるんですか？」

「あるわけ、ないでしょうっ！」

「でしょうね」

他人に奉仕させ、かしくさせるために生まれてきたような女だ。ただの成金ではない。その風格と気品は本物だ。

「バキュームフェラから玉舐めまで全部仕込んであげますからね」

言質を取るだけ取って、ピストンを続行する。

「……くっ、柳楽ジンっ……！」

彼女の両手が廃墟の壁に爪を立てた。一生の不覚、と彼女のプライドが言外に叫ぶ。

俺の中に巣食う、いや、もはや俺の血肉となった鬼も満足したようで、俺は口端を歪めて笑っていた。

「このわたくしが駄犬に犯されて、ケツアクメするなんてっ♡ あっあっあっ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクイクイクイク♡ ちんぽで肛門抜かれてイクッ♡♡♡」

深紅のドレスを着込んだまま、ビクビクと激しく絶頂した彼女は、更に太ももを伝う失禁の量を増やしていた。

男根を食い千切ってきそうなほどの肛門の締め付けでビュルビュルと射精をしながら、とりあえず借りは返したと溜飲を下げた。

その後、予算アップを約束するまでハメ撮りを続けた頃には、彼女の綺麗な肛門は俺の陰茎の形そのままではつくりと開きっぱなしとなっていた。

ピンク色の腸壁からドロドロと精液が垂れる様子を撮影しながら、俺の肉角はまだまだ物足りない。鬼の咆哮を上げていた。

あとがき

KTC様では初めての書籍となります。懺悔と申します。

今作は私の同人作品である、『魔法少女と呼ばないで』から連なる世界を描かせて頂きました。そちらを未読で他の魔法少女の活躍が気になった方は、是非当ブログ、『魔法少女と呼ばないで』にお越し頂ければと思います。<http://blog.livedoor.jp/ben1983/>

今作では唯一の魔法少女だった花鳥院シランさんですが、自分の血を地面に垂らすと魔物めいた野菜や果物が守護獣として生えてくるという能力です。己の肌を傷つけるのが嫌なので、作中ではワインで代用していました。勿論その場合は大幅なパワーダウンは避けられませんが、大抵の相手はそれでも問題無いという強者です。本気でピンチの時は必然的に怪我をして出血するので、その時は自動的に彼女の周囲は地獄絵図となるでしょう。

ジン君はそれを避ける為に、あらゆる姑息な手を使って無血決着を完遂しましたね。

二次下り103号で読切だった「どうかこの手にスズランを」も書籍化される予定ですので、そちらもお手に取って頂けたら幸いです。

最後にご購入下さった皆様と共に、熱意をもって作品に向かい合ってくれた編集のF様と、素晴らしいイラストを提供して下さい下さった樺糖練乳様に感謝の意を示したいと思います。

本当にありがとうございました。

二次元ドリームノベルズ
魔装少女リリカは屈しない

著者 懺悔

発行 株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル1F

編集部 TEL 03-3551-6147 / FAX 03-3551-6146

販売部 TEL 03-3555-3431 / FAX 03-3551-1208

URL <http://ktcom.jp/>

©Zange 2019

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

※本作品は電子書籍配信用に再編集しております。